

---

# 雨乞いの村

忍足香輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨乞いの村

### 【Nコード】

N5578D

### 【作者名】

忍足香輔

### 【あらすじ】

仕事で村を訪ねた三島大貴。案内役の深雪の下、調査を開始した。村の真実が明らかになっていくなか、失踪する女性。それを意に介さない住人。何かを隠している弟たち。まわりだした歯車がきりきりと動き出す。

## ブローグ

人が人を殺すとき、人のためにと頭こぶしを垂れる

人が人を殺したのち、それを忘れて諸手を上げる

これを怨みと言わざるか、これを怨みと言わざるか

忘れし記憶に鐘鳴らし、雨と共に降らせよう

恵みの雨など与えるものが、我等の存在を知らしめよ

四つの人頭柱にし、怨みの欲はぐを育まん

姉の犠牲は己おのが罪、そなたが無念を晴らすのだ

「これ以上入らないでください。下がってください」

雨が降っている。それまでの天気が嘘のような、盆をひっくり返したような激しい雨。その雨の下に、ざわつきうごめく人の群れがある。小高い丘が半分削り取られたような激しい土砂崩れ。その下に、一人の女性が倒れていた。その女性を取り囲むようにして、人々は群がっている。先ほどから上げられる声は、どうやら警察官のものようだ。事務的に発せられるその声に、従う人間は誰一人としていない。何人もの警察官が広げた手の隙間から、いくつもの顔がそれに視線を注いでは目をそらす。口を手で覆うものもいれば、涙ぐむものもいる。

多くのものがそこで囁いている。

「運の悪い」

「かわいそうに」

「安らかに」

「まだ若いのに」

その囁きの中で一際小さく、だがどの囁きよりもはっきりとした声があった。

「祟りだ」

この一言で、誰もが口を閉ざした。誰の呟きか、それを知る術はない。だが、みなが一様に心の奥深くで思っていたこと。決して口に出してはならない禁句。暗黙の了解であつたはずの言葉。しかし、その縛りを破つても、誰も非難の声を上げることはない。

「うあああああ」

一人の少年が、村中に響き渡らん声を上げた。彼の体にはすでに三人もの警官がしがみついている。しかし、少年はそれらの制止など意に介していない。というよりも気づいていないようだ。少年の目は血走りもはや正気を失っているようにも見えた。

それを見た村のものは少年のために道をあける。村のものは誰一人として少年を止めようとしない。少年を止めようと奮起するのは町のものだけ。全身が泥にまみれ、何度額を地に打ちつけられて血を流そうとも、その血にすら意識を向けていない。自らの体がどれだけ傷つけられようと、少年の目はある一点を凝視している。変わり果てた、彼の……………。

「祟りだ！」

誰かがもう一度囁いた。いや、すでにそれははっきりとした声となつてすべての者の耳に届いたであろう。やはり、誰も咎める者はいない。それは何故か……………。

それは、それ以外の言葉が見つからないからだ。この惨状を表現するのに、それ以外の言葉が存在しない。大岩が転がり落ち、内臓は潰れ、四肢は散らばり、あたかも岩から手足が生えているかのよ

うに見える。体から流れ落ちる血は、激しい雨の下とどまるところをしない。どれだけ強く雨が降り注ごうとも、地にこびりついた赤い色を洗い流すことはかなわない。死に顔には、目の恐怖が刻み込まれている。生前は端正なものであったはずのその顔は、さながら修羅のように映っている。

ここにゐる者すべてが同じ思いを心に刻んでいる。

いや、

一人だけいた。この惨状を目にし、別のことを思っているものが、一人だけ。

体を泥で汚そうとも、何度額を地に打ちつけられ血を流そうとも、その血にすら意識を向けていない。自らの体がどれだけ傷つけられようとも、ある一点を凝視している少年。そう、彼はたった一人だけ、心にあるだけの闇を怨みに変え、こう思っただろう。

「復讐だ」

## 1 大貴と雨の村

町からバスに揺られて三時間。見慣れた四角い建物が後ろに過ぎ去り、視界一面には人工的なものが見えなくなつた。大貴はその風景をぼんやりと眺めていた。バスの中には老婦人が二人座っているだけ。町からこのバスに乗っているものは、もはや大貴ひとりとなつていた。

「次は雨の村、雨の村、終点です」

目的地を告げるアナウンス。大貴は三時間ぶりに腰を上げた。

再開発に伴う雨の村の特集。村と町をつなぐ絆。

編集長にその特集を任されたのは三日前。三日間で町にある資料は調べつくし、生の空気を実感するため、会社から雨の村行きを言い渡された。大貴が会社に就職してから三年。ようやく大きな仕事が始まるようになってきた。誰の目から見ても浮き足立つように仕事に励んでいた。そのため大貴は意気揚々と雨の村行きを了承した。

バスから降りると、そこはやはり都会とは比べようもない。ドラマなんかでよく見る小さな待合所。背景には小高い山がそびえている。少し村の中心部に目を向けると人工的な建物を見ることができると、それまでの道のりは舗装されていない土が丸出しの道路。

町にある資料は頭にいれ、漠然と村に対するイメージを構築していた。千人程度の過疎が進む村。村と町をつなぐバスは日に十便程度しかなく、利便性は都会と比べようもない。まだまだ多くの道路が舗装されておらず、多くの住民は畑仕事に従事している。何十年も昔、あまりの日照りが続き雨を呼ぶ神を祭るために作られた村。町の資料にはそう書かれていた。

田舎に対する一種の憧れのようなものを持っている大貴は、この風景に満足していた。編集長は骨休みのようなものと言っていたが、まさにその通り。その上、何やら神聖な歴史を秘めた村だ。排気ガ

スとは無縁な空気を胸いっぱい吸い込むと、それだけで大貴の心は弾んだ。

バス停から町の中心に向けていくらか歩かないうちに、一人の女性を見つけた。その女性は大貴に気がつくときりかかっていた木から体を起こし、小さく手を振って近付いてくる。

「山中、大貴さんですね。お話は伺っています。深雪です」

二十台半ばぐらいの、穏やかな雰囲気を持った女性だ。柔らかい目尻に、笑うと頬にえくぼができるのが印象的だ。軽くパーマをかけた髪は緩やかに胸の前に流し、光の加減により薄茶色にみえる。一般的な美人に該当するだろう。会社を出る前に連絡を入れた役場の人間が用意してくれた案内役だ。大貴も頭を下げ名を名乗った。

「驚かれましたか？　あまりに田舎過ぎて」

「いえ、そんなこと無いですよ。自然が多く、きれいなところですね」

これは本心だ。大貴は心底この村を気に入っていた。だが、この村に足を踏み入れた人間は総じて似たような台詞を吐くのだろう。大貴の言葉を聞いて、深雪は口に手を当てるところと笑った。

「お世辞はいいですよ。わたしも何度か町に足を運んでいますから、この村がどう見られるかなんてわかっています」

「町で仕事をなさっているのですか？」

「いえ、私はここで畑仕事をしています。町に出ることも考えましたが、私には合いませんでした」

深雪は舌を出してへへつと笑った。町でこれほど無邪気に笑う人を見たことがない。これもこの自然から得られるものなのだろうか。それなら、ビルを全部壊して木を植えるのも悪くない。

「それで、この村について知りたいと聞いたのですが、私はどこを案内すればいいですか？」

「ああ、そうでしたね。できれば、この村全体を案内してくれませんか？　それほど時間もかからないでしょう」

「村全体というと、小さい村ですがとも一日じゃ回りきれません

よ？ それよりも、今日はお疲れでしょう？ 宿泊場所に案内しますよ」

「いえ。今日見られそうな場所は、今日見ておきたいんです。どうにも、気分が高揚してしまいました」

大貴は歯を見せて笑った。期待感が体内の許容量を超えて表れてしまう。

「仕事熱心ですね。確か編集の方でしたよね。詳しく知らないんですが、どのようなことを中心にお調べになるのですか？」

「主にこの村の歴史についてですね。そうすれば、町との関係性も見えてきます」

「町との、関係性ですか……？」

「ええ、再開発に伴う雨の村の特集。村と町をつなぐ絆っていう感じなんです」

につこりと笑った大貴は、横を歩く深雪に顔を向けた。だが、大貴はそこで口をつぐんだ。いや、言葉が出なかったと言ったほうがいい。

「えっ……」

一瞬、深雪の瞳が暗い淵の色に映った。それは大貴が身震いするほど、恐ろしい色。さっきまでの穏やかな深雪からは想像できず、大貴は息を呑んだ。

だが、それもほんの一瞬で、すぐに深雪は微笑みを見せた。

「じゃあ、まずは学校を見せますね。小さい村ですから、学校もひとつなんですよ」

深雪はもとの無邪気な笑顔を大貴に向けた。その瞳からは暗い色など一片も見えない。

「……ええ、お願いします」

さっきのは何だったのだろうか。首を捻りつつも、大貴は深雪の後を追った。





## 2 大貴と学校

学校は町の中心部よりも外れの位置に存在していた。住宅街らしきところを通ってきたが、やはり民家の数は少ない。それでも大貴が予想していたよりも、ずっと都会に近い家が立ち並んでいた。完璧に木造だな、という民家もちろん建っていたが、多くは都会で建っているもなんら違和感の無い家だった。それを深雪に話すと、村の中心部には商店街があり、コンビニやファミレスもあると話した。これも大貴の想像していた村とはかなり異なっていた。

学校は、小さくはない。小学生から高校生がすべてひとつの学校に収まっているため、当然といえば当然かもしれないが、校舎は都会ではまず見かけることのできない木造建築。戦前から存在しているのではないかと思うほどの外観を有している。これはまさに大貴の想像通りだった。放課後ということもあり、校庭では多くの子供たちが遊んでいる。

「珍しいでしょう？ 私は古風で好きなんですけど、町からの人になればやっぱり不便ですからね」

深雪は校舎を指差しながら言った。大貴も校舎を眺めた。

「いつ建てられたんですか？」

「役場に行けば正確にわかるんですけど、もう50年以上前だって聞きましたね。はじめはあんなに大きくなかったんですよ」

「どういうことですか？」

大貴は深雪の顔を覗き込んだ。

「この村ができた当初は、学校なんて作るお金が無かったから、みんなでここに座って授業を受けていたんです。先生も村の大人が集まって、必死で教えていたんですから」

おばあちゃんの受け売りですけど、と言って、深雪は舌を出して笑った。

「最初は何も無いところに座って、それからみんなが机とイスを持

つてくる。それで村の人がみんなのために屋根を作ってあげて、壁を作って、それで小さいけど学校ができる。私が生まれたときにはもう校舎があって、ちゃんとした先生もいたからよくわからないんですけど、昔の人はすごいですよ。当時は大変だったろうけど、楽しそうじゃありません？　そうやって勉強するのって」

都会育ちの大貴にとつてあまり想像しにくかったが、その考えに納得できる部分があった。首を縦に振り首肯した。

「でも、確かこの学校は取り壊されるんじゃないですか？　村の再開発事業で」

ふっと深雪の表情が翳った。声に出すまいとしていたのかもしれない。

「あ、でももつと設備の整った学校ができるそうじゃないですか」大貴はしまったと思い、すぐに言葉を繕った。狼狽が声に出てしまい、大貴の声は妙に甲高くなってしまった。

「気になさらないください。もう了承していることですから……でも、」

学校を見上げる深雪の視線は、切ないほど寂しげな瞳をしていた。口紅をしていない、純粹な淡い赤色の唇がかすかに震えている。

「村のみんなの、かけがえのない場所だったのにな」

その言葉が、ずきりと大貴の心をついた。語尾は消え入るように弱く、それが一層大貴の心をえぐる。大貴はただ黙り込むことしかできなかった。

「すみませんね。ちょっと辛気臭くなっちゃって」

深雪はくすつと小さく笑うと、手を上げて大きな声で男の名前を呼んだ。その方向を見ると、四人の学生服を身にまとった男子がこちらに視線を向けている。そのうちの一人がこちらに歩み寄ってきた。

「私の弟の裕紀です」

裕紀と紹介されたその子は柔和そうに目を細めると、左手を差し出してきた。

「こんにちは。裕紀です」

それに合わせて大貴も左手を差し出した。

「どうも、山中大貴です」

「姉が案内役で心配していたんですよ。何かお困りのことがあれば、気軽に声をかけてください。村のことはたぶんぼくのほうが詳しいので」

「こら、裕紀」

深雪はこつんと裕紀の頭を小突いた。それでも裕紀は柔和な顔を崩さず、残りの三人を指差した。

「彼らもぼくと同じ年です。左から悟、勝也、圭介です」

三人に視線を向けると、揃って頭を下げてきた。それに合わせて大貴も頭を下げる。

「みんな姉がいますよ。今日は神社のほうにお泊りと聞いたのですが」

「えっ、何故それを」

「小さい村ですので、すぐに情報は広まってしまうんです」

微笑を崩さずに裕紀は言った。こうしてみると、顔の造形は深雪に似ている。二人とも美男美女であるからなのか、その顔を見ていると少しばかり圧倒されそうになってしまう。特に裕紀の微笑は、感情表現以上の意味を含んでいるようにも感じる。それが何なのか、うまく判断することはできないが。

「神社にいる巫女は圭介の姉です。真弓さんといいます。歴史のこととは彼女に聞くのが一番ですよ」

「巫女さんか。歴史は町の資料で調べているといっても、やっぱり現地の人のほうが詳しいだろうからね。聞いてみるよ」

「町の資料だと、この村の歴史はどのように書かれているのですか？」

裕紀の言葉、何気ない言葉のはずなのに、大貴は何か引っかかるのか、眉をしかめた。何かが引っかかるような、それでいて何でもないような、つかみどころのない感覚。それが大貴の中で渦巻いて

いた。

「あの、どうしました？」

「あ…ああ、ごめん」

呆けていたようだ。不思議そうな目で裕紀が大貴の顔を覗き込んでいる。大貴は咳払いをし、背筋に力を込めた。

「そうだね。町の歴史だと、この村は雨を呼ぶ神を祭るためにできたと言われているね。神事を行うために町から派遣した人達によって作られた神聖な村。たしかそう書かれていた」

記憶を手繰るように話しているため、大貴は気づいていない。それを聞いている裕紀の顔が強張っていくことに。その目に込められているのは、明らかな怒り。

「それだから、この町に住む人達は神の申し子という人もい

」

「すごいですね。大貴さん。そんなに勉強なさっているなんて」

深雪が感激したように大貴の肩を抱いた。尊敬のまなざしを大貴に注いでいる。大貴は恥ずかしくなり視線を中空にそらした。ふらふらとなんとか話題を変えようとして、視線を動かした。

「本当に勉強なさっているんですね。ぼくも見習わなくては」

深雪の後ろから裕紀が顔を出した。その顔はやはり微笑んでいる。

「じゃあ、次は沼に行きませんか？ 一応、あそこも歴史に関係しているんですよ」

「ああ、はい。お願いします。それじゃあ裕紀君くん、うしろの子にもよろしく伝えといてくれないか」

「ええ、わかりました。よい記事を書いてくださいね」

大貴は手を振ると、深雪に手を引かれ学校を出て行った。

### 3 裕紀と学校

大貴に声が聞こえなくなる位置まで来ると、裕紀のそばに悟、勝也、圭介が姿を見せた。

「あの人が、そうなの？」

呻くような声で悟が言った。真一文字に唇を引き結んでいるが、その唇はかすかに震えている。どうやら歯を食いしばっているようだ。

「ふん、嫌な野郎だな」

長身の勝也は裕紀の頭の上から、遠くを歩いている大貴を睨みつけている。

「裕紀君が引き受けてくれてよかったよ。もし俺だったら、我慢できなかったかもしれない」

髪をかき上げながら圭介は言う。その耳には銀色のボールピアスが光っている。

「ぼくもぎりぎりだったさ」

小さく首を振りながらため息をついた。感情をコントロールしようとしても、やっぱり難しい。これからのことを思えば仕方ないことかもしれないが。

「姉さんが顔を隠してくれなかったら、ばれていたかも」

裕紀はすまなそうに苦笑し、全員の顔を見回した。そして、小さくなっていく二人の背中に視線を流す。

「町の歴史だと、ぼくらは神の申し子らしいよ。随分きれいな解釈にしているよね」

「てめえらの都合で、俺たちがどんな思いをしてたか知らねえんだよ」

と言って勝也は腕を組むと、鼻から強く空気を吐き出した。勝也の気持ちもよくわかる。というよりも裕紀自身、勝也と同じ意見を

持っていた。勝也の横で口の端を歪めた圭介が聞こえるように舌打ちをした。

「しかし裕紀君も挑戦的のところがあるな。握手で左手を出すなんてさ。あの男は気づかなかったけど、気づかれてたらどうなったかな」

「と言うより、握手なんて、普通はしないんじゃないかな」

と悟がこわごわと言った様子で口を挟んだ。もともとが引込み思案だったが、あの事件以来、それに磨きがかかってきている。それもこれもすべてが大貴のせいだと裕紀は考えていない。というより、大貴はまったく関係ないかもしれない。それでも、彼には怨みを持っていて。あるひとつの要素を持っているだけで、それは怨みの対象に変わる。

「そうかもしれないね。でも、姉さんが案内役なんだから、ぼくもそれなりに親しくしといたほうがいい。予定が変われば、ぼくが姉さんの代わりをすることになるからね」

「平気だよ。全員で考えた計画なんだ。失敗も例外も起こるはずねえさ。あの優男が俺らの考えがわかるはずねえ」

「確かに優しそうな顔しているけどさ、彼の狙いは決まっているよ。俺たちを、殺しにきたんだ」

圭介の言葉で全員の顔に緊張の色が走った。皆、平静を装っているが、それぞれ耐えるようにコブシを握りしめている。悟にいたっては、平静を保てず荒く息を乱していた。それに気づいた裕紀が悟の背をさする。気持ちかわかる。裕紀だけでなく、悟の気持ちを勝也も圭介も理解できるだろう。否、理解するだろう。

「大丈夫だよ。智美さんの恨みは忘れない。必ず、果たそう。この村の掟にしたがって」

裕紀だけではなく、その一言で、悟も勝也も圭介も瞳の色を変えた。誰もが無表情に大貴の背中を眺めている。それは、無意味なものを見るような顔。存在を否定しようとしている顔だ。

瞳の色は、心にあるだけの闇を怨みに変えた黒よりも、さらに深

くに落ちこんだ色をしていた。



#### 4 大貴ゝ沼ゝ

学校を離れ、深雪とともに今度はさらに村の外れへと向かった。住宅街を離れているためか、民家らしいものはさらに少なくなり、視界は畑の割合が増してきて、足元は雑草が茂っているため歩きにくい。畑と畑の間を歩いていると、深雪は畑仕事をしている人達に、大きく手を振ったり振られたりしている。そのつど、深雪は満面の笑顔で大貴を紹介した。

大貴も頭を下げたり、適当な笑みを見せたりしていたが、所々で小さくため息をついていた。何故だかわからないが、大貴は緊張した後のように全身が疲れていた。村に着いたときの高揚感も、今は嘘のように消え去っている。裕紀のせいだと言いたくはないが、大貴はやはり彼のが気にかかっていた。

「聞いていますか？」

「あついや、すいません。何ですか？」

深雪が不思議そうに首をかしげている。

「次は沼に行こうと思いますって言っただですよ」

深雪はいたずらっぽい笑みを見せながら、人差し指を立てた。それを大貴の額に突き立てる。

「もしかして真弓のことでも考えていたんですか？ 手を出そうとしてませんか？」

「そんなこと、考えてませんって」

さつと背筋を伸ばして顔に力を入れた。確かにそんなことは考えていない。それでも、どんな人が早く会ってみたいかな、とは考えていた。それが表情に出てしまいうので、大貴は少し赤くなった。

夕日が大貴の背景にそびえていたためか、どうやら深雪は気づかなかったようだ。両手の指を絡ませ、大きく伸びをしている。

「真弓は生粋の巫女ですから。ちよっと変わった感じがするかもしれませんね」

「生粹の、ですか？」

大貴の質問を受け深雪は、そうでしたね、と呟くと形のよい顎に人差し指を当てた。

「彼女の家、勝也くんもですけど、あそこの家系の長女は巫女になるしきたりがあるんです。男子は特に何もないんですけどね」

「しきたり……」

不謹慎かもしれないが、しきたりというその響きに、大貴は期待感を持ってしまった。これこそ村にふさわしい。こういうことを待っていた。大貴は口元が笑ってしまうのを手で隠した。

「詳しく教えてくれませんか？ その、しきたりについて」

「しきたりですか？ まあ、これも真弓に聞いたほうが手っ取り早い気もしますが、私がわかる範囲でいいですか？」

「ええ、お願いします」

大貴が言つと、深雪はうーんとうなり声を上げ眉をしかめた。

「何か問題でも？」

「いえ、この先の沼も少なからず関わっているんで、沼に着いてから説明しますね」

「ああ、はい。わかりました。あとのくらいですか？」

「もう少しですよ」

そう言つと深雪は道の先を指差した。その先には小さな森が広がっている。日が傾いているためかその森は薄暗く、深雪が指差す先の沼は見えない。ちょうど森の入り口辺りに二本の巨木が天を突くかのようにそびえている。それは大貴の足が止まってしまふほど威圧的に、大貴を見下ろしていた。

「ごくりとつばを飲み込む。この先が異世界に通じているかのように、一種の崇高さを大貴は感じていた。この先に何かがある。大貴は全身の毛が逆立っているのがわかった。

「それほど構えないでください」

大貴の様子を心配しているのか、深雪は苦笑している。そう言われて、大貴は額に汗をかいているのはじめて気がついた。焦って

袖で拭くと、行きましようと言って深雪を促し、森に足を踏み入れた。

森に入り沼にたどり着くまでの間に、大貴はすぐにこの異変に気がついた。入り口で感じていた崇高さはなりを潜めている。それもそのはずだ。外からは暗くてよく見えていなかったが、中に入ってみるとそれは一目瞭然。周囲に存在しているのはここにあるはずの無いもの。自転車のタイヤ、薄汚れた冷蔵庫、錆びついた鉄筋、原形を留めていない自動車、へこんだ鍋、ガラスの割れた食器棚……。森の奥に足を踏み入れていくほどに、その量は増えていく。この村のものが捨てるはずのない、ゴミ。

深雪は黙り込んだまま歩いていく。大貴も黙って深雪の背中を追った。ゴミは無造作に置かれてはいるが、人が通れるように左右に分けられている。だが、山から崩れ落ちたゴミが、時たまつま先にぶつかりからかと音を立てる。

しばらく歩いているとようやく沼に着いた。そして、大貴はまた絶句した。

途中までのゴミの量など、比較などできなかった。沼の大きさはテニスコート二面分ほどだが、その半分以上にゴミの影が見え隠れしている。異臭が凄まじく、鼻を押さえいてもそれを防ぐことはできなかった。

「ほんとうは…… もっと大きい沼なんですよね」

「ぼつりと独り言のように深雪が呟いた。

「ここが、ゴミ沼です」

「ゴミ沼……………」

「もちろん、ちゃんとした名前はありません。でも、もう誰もその名を呼ぶ人はいません。私が生まれたときには、きれいな沼だったらいいですけど。今では、誰もここに来る人はいないんです」

深雪の声は生気を無くしたように冷たく響いた。嘆くようでもあ

り、寂しさに震えているようにも聞こえる。それでも、深雪の声にはもっと違う何かが含まれているような気がしてならない。

「どうしてこんなことに？」

大貴が言くと、すつと深雪はさらに森の奥を指差した。

「この村は小さいですが山に囲まれているんです。村への唯一の道は、大貴さんがバスで来たあそこだけ。あの道がなくなれば、この村に入ることも、出ることもできません。建て前では」

「建て前？」

深雪は大貴の目を見るとこくんと頷いた。

「険しい山ではないんです。だから、道を選べば歩いてでも越えることはできます。それに木をいくらか伐採するだけで車も走れます。そのため村の人が気づかないうちに、町の人が別のルートを作ってしまったんです。それでそのルートを使ってゴミを置いていくようになりました。気がついたときにはもうかなりの量のごみが運ばれて、村の再開発が始まると、それに拍車がかかり、」

深雪は沼に目を移す。

「この沼は、名前を無くしました」

最後の言葉は、大貴の頭の中をぐるぐると駆け巡った。名前を無くした沼。それは歴史などではなく、今まさに目の前に存在している。慰めの言葉をかけるべきなのか、適当に相槌を打つべきなのか、大貴にはわからなかった。意気揚々とこの村に足を踏み入れたはずなのに、たった数時間で大貴は何のために自分がここを訪れたのか、わからなくなっていた。結局、大貴は口をつむぐことにした。荷が勝ちすぎている。ただ、そう思っただけだった。

「深雪？」

どれぐらいそうしていたのか、太陽は最後の輝きを西の空に投げかけていた。森のさらに奥、声はそこから聞こえてきた。声の感じから女性のようだが、女性の中でも声が高いほうだ。少し幼いのか語尾が僅かに上ずっている。がさがたと音はするが、姿はまだ見えない。目は慣れてきているが、いっばいに伸ばした枝葉は森の奥を

包み隠している。

「あんた、何でこんなとこに来てるのよ？ あら、そっちの人誰？」  
声から女性だと判断できたが、暗闇から現れたのは大貴の予想以上に幼い少女だった。日も沈みかけたこんな時刻に、こんな人気のない場所にいることに注目すべきだったのだが、それを忘却してしまっただけ、大貴は彼女の髪に見とれていた。渋谷や新宿のような都会ならともかく、こんな場所ではそうお目にかかることのできない金髪。数メートル先が闇に染まってしまっただけの中、彼女の金髪はそこだけが浮き上がっているようにはっきりと確認することができた。

「愛、この人が山中大貴さん。町から来た人よ」

「ああ、あんたが」

納得したようなため息を吐き、大貴を無遠慮にじろじろと見てくる。上下ジャージで右手にスコップ、左手にゴミ袋を持っている。髪をツインテールにし、まつげが長く瞳は大きい。鼻はつんと上を向き、その年頃にありそうな生意気さを表現している。それでもそれが彼女の印象を悪くすることはない。成長すれば十分チャームポイントとなりそうだ。

「えっと、よろしくね。愛ちゃん」

前かがみになって大貴が言っていると、途端に愛は顔をしかめ、手にしていたスコップで大貴の額をはたいた。深雪が止めるまもなく放たれた一撃は、見事に大貴の眉間にヒットし、不意の一撃に大貴はうめき声をもらしその場に座り込んだ。

「あんた、失礼でしょ！」

眉間を押さえながら大貴が顔を上げると、目の前には手を腰に当て、子供っぽくつんと鼻を上げた愛が今度は大貴を見下ろしていた。「ちよつと愛、今のはあなたのほうが失れ……」

「深雪は黙ってて！」

視線だけ深雪に向け一喝するとすぐにまた大貴を睨みつける。深雪はその一言で黙り込んでしまい、すまなそうな視線を大貴に送っ

ている。改めて大貴が愛の目を見ると、その目は怒っている。それもとてつもなく。状況は全く理解できないが、とにかく謝らねばならないと大貴は納得した。眉間を押さえながら愛の視線の高さまで顔を上げる。

「ごめんね、よくわからないけど、お兄ちゃんが何か悪いことでも

「黙れ！」

言い終わらないうちに、今度は横から袋が飛んできた。愛が持っていたゴミ袋だと気づいたのは地面に転がり、愛に足蹴にされ、か  
るい悲鳴を深雪が上げてからだった。

「あんたも見た目で判断するやつなの？ 最悪ね、町のやつってみんなこんなやつなのかしら」

愛は額を押さえ頭を振りながらため息をついた。これは間違いなく呆れたため息だろう。

「あのさ、愛」

「ちよつと、あんた」

愛は深雪の言葉を無視して足の下にいる大貴に指を差し、きつと目を吊り上げた。自分が言われているわけではないのに、深雪は小さく肩を震わせている。

「あんたもどうせあたしのことを幼いとか子供だとか思ってるんだろうけどね、あたしはそこにいる深雪と同じ年なのよ。むしろ誕生日だったらあたしのほうが年上なんだからね」

一息にそこまで話し終えるとぜいぜいと肩で息をしている。大貴は呆氣にとられてぼんやりと愛のことを眺めていたが、何故かその態度が愛を満足させたようだ。ふんと鼻で笑うとゆっくり大貴から足を下ろした。

「まあいいわ。許してあげる。わかったみたいだから」

「…はあ、どうも」

「早く立ってよ。あたしがいじめたみたいでしょ」

どう見てもそうだろう、と考えたが口に出せばただでは済みそう

にないため黙っていた。反射的に頷いて体を起こそうとすると、深雪が手を差しだしてくれた。大貴はそれに甘え、体を起こした。

「えっと、ごめん。愛さん」

服についたほこりを払いながら頭を下げた。幸いにもゴミ袋の中身は雑草だけだったようで強く痛む場所はない。

「いいわ。あたしも気にしないから、あなたも気にしないで」

につこりと歯を見せて笑った。やっぱり子供っぽいなとか、あんなが言うことか、といってやりたい気持ちもあったが、その天真爛漫な笑顔を見ているとそれがどうでもいいことのように感じた。

「ところで愛さんはこんなところで何を？　それもこんな遅くに」

大貴はようやく気になっていった質問を口にした。

「女の子が一人で出歩ける時間じゃないよ」

「あついいこと言うね。そうだよ、やっぱり」

につこりと嬉しそうに微笑む。愛は照れたように視線を大貴に向けてはまたそらす、ということを繰り返した。

「こんな田舎だとさ、あんまり気にしないんだよね。やばくなっても皆が味方してくれるからさ」

「この村は特に町との交流が少なかったので、村民同士助け合っていくのが当たり前だったんです。だから、夜でもそのあたりをうろつく人も多いんですよ。愛の場合は少し違うんですけどね」

「そつ、あたしの場合は日課だからね」

「日課？　でもさつき深雪さん、ここにはもう誰も来ないって言いませんでしたか？」

大貴が言うと、深雪はすまなそうに視線を落とした。

「すみません。その、愛は祠に行くので、正確には沼ではないんですよ」

「祠？」

大貴が首を傾げると、愛が森の奥を指差した。ちょうど愛が出てきたあたりだ。

「この奥にあるやつ。もう使われないんだけどね」

と言つて愛は微笑んだ。でもその笑顔はさっきの天真爛漫な笑みではなく、どこか寂しさが混じっているように見えた。そのギャップに大貴は苦しいものを感じた。それは、愛が可愛いからとかそんなことは関係なく、愛自身が隠している何かの重みなんじゃないだろうか。

ふーっと愛は大きく息を吐くと、ツインテールにしていた髪を振りほどいた。

「そろそろ行こう。ほんとに日が暮れちゃうよ」



## 5 大貴と愛

森をでるともう太陽は見えない。西の空が名残惜しそうに暗闇へと変わっていくところだった。ふと大貴は自分が最後に夕焼けを見たのがいつだったかを思い出そうとした。町で働いていたときは意識したこともなかったが、どうしても思い出せなかった。子供時代は時計など気にした覚えがない。学校が終わって、暗くなるまで遊ぶ。その繰り返し。いつもいつも同じ友達と遊んで、いつもいつも似たような遊びをし、そして同じ時間に眠る。だが、それを苦しいと感じたことはなかった。繰り返しが苦しいと感じたのはいつからなのだろうか。

大貴は前を歩く二人を見た。『日課だから』と愛は楽しそうに笑って言った。祠に行くことも、そしてこの夕日を見ることも、愛にとって苦痛になっていない。大貴は自分と愛のどこに差があるのかわからなかった。

「なあに？」

振り返った愛と視線が合った。顔にかかる髪を耳にかけている。

その仕草が妙に色っぽく映り大貴は言葉に詰まった。

「……いや、きれいな髪だなと思って」

とっさ口を突いた言葉だったが、それに嘘はなかった。森の中でも一際きれいに見えていたが、夕日のかすかな光とあいまって輝いているように見える。少なからず触ってみたいという衝動に駆られていたのも事実だ。染めていれいくらか痛んでもおかしくないのに、愛の金髪は澄んだ小川のように流れている。

「この髪？」

大貴の言葉を確認するように、愛は自分の前髪を持ち上げてみせた。不思議そうに口を尖らせる愛を見て大貴は焦って三回頷いた。愛はくるくると指に髪を巻きつけて、ぼんやりと自分の髪の毛を見つめている。それでも、次の瞬間にはいたずらっぽく目を細めて、

「ナンパしてるの？」

と言つてにつこりと笑つた。

「さすが町の人だね。女の子と遊んでるんでしょ」

「そんなことないよ」

「うん。あんた奥手そうだもんね」

けたけたと愛はお腹を抱えて笑つた。はつとしたがすでに遅く、見ると深雪も口を押さえて微笑んでいる。

「でもありがと。そんなこと言われたことなんてなかった」

首を傾け嬉しそうに笑うと、愛は大きく伸びをした。

「この村じゃ、この髪の色は珍しいからね。思つても口に出す人はいないし、じいさんばあさんなんて珍獣扱いよ。まっしょうがないわよね。これ地毛だし」

「地毛なの？ それじゃあ両親が？」

「ううん、ばあちゃんか外人。どこのだったかは覚えてないけど」

そう言つた愛の表情がどこか遠くを見ているようだった。懐かしんでいるのか、それとも寂しがっているのかそれはわからないが、それでも大貴は胸が縮こまるような急激な狭さを覚えた。

「おばあちゃんってことは、戦時中だよな」

戦時中に外国人と恋人関係になるなんてドラマでは聞きそうな話だが、現実になり立つとは思えない。戦争など経験していないからそれがどれだけ厳しいかは大貴の想像の範囲外のことだが、非国民と罵られ、石をぶつけられるようなことが当然にあったのではないだろうか。

大貴が遠慮がちに言うと、愛はこっくりと頷いた。

「うん、だからじいちゃんばあさんは隠してたらしいよ。ただでさえ町との交流を無くしてるのに、村以外の女の人と関係持ったんだからさ。それでも結局ばれちゃったんだよね。無理もないと思うけどね、こんな小さい村で隠し切るなんてさ」

「交流を無くしてた？」

「そーよ」

愛は小さく息を吐くと、目を伏せてこれまた小さく言葉を吐き出した。

「村を追われそうになったんだけど、最後はおばあちゃんが命を張ってじいちゃんを助けてくれたんだ」

「命を張って？」

「そう。じいちゃんが村を大好きなの知ってたから、どうしても村にいさせてあげたかったから……。じいちゃんが止めたらしいけどね」

そこで愛は深雪に視線を送った。表情を変えようとしながその目からは飽和寸前の光が輝いている。それを悟ったのか、深雪はひとつ咳払いをして大貴に向き直った。

「あそこの祠は愛のおばあさんのお墓のようなものです。あの沼におばあさんは身を投げました。それで……」

深雪は大きく息を吐くとちらりと愛の顔を窺った。愛がこくと頷くと深雪が大貴に向き直って言った。

「さっきはあの沼をゴミ沼と言いましたが、正式には違います。ずっと昔に名づけられて、若い子には馴染みがないんですけど、あの沼は身投げ沼と言います」

「身投げ…沼」

「はい。それで村の人達も認めてくれました。ある意味では、愛がこの村にいるのもそのおばあさんのおかげなんです」

「まだ風当たりはきついけどね」

愛がわざとらしく声を大きく出し自分の髪の毛を梳くと、深雪がすまなそうに目を細めた。なんとなく、深雪が影で愛を支えているようなイメージが大貴の頭をよぎった。きっと深雪は愛がこの村になじめるように手を尽くしているんじゃないだろうか。それでも愛はどこかで一歩ひいている。深雪の気持ちをありがたく思っている一方、ある一定の範囲からは誰も寄せ付けない。完全に輪の中に入りきれていない、入ろうとしない。そんな感じがした。

「それでもあたしは…だからかな、この村嫌いになれないんだよね」

異国のばあちゃんが、じいちゃんが止めるのを振り切るぐらいだからさ、じいちゃんを好きだったこともあるだろうけど、ばあちゃんもこの村が好きだった気がするんだ。それってすごいことだと思わない？ 辛いことばかりだったのに、それなのにこの村を好きでいられて、命だつて捨てられる。そう思うと、あたしこの髪の色も好きになれる。ばあちゃんと同じ色だつて、安心できるんだ」

目の端をやりわりと微笑ませ、愛は小さく息を吹いた。そしてくるつと大貴に向き直りにっこりと、とびっきりの笑顔をみせた。

「だからね、あんたがきれいだって言ってくれたのも、ほんと嬉しかったよ。ありがと」

ふわつと舞った愛の金色に輝く髪の毛が、太陽が沈んでしまった暗闇でも光をまとつてあたりを照らしているような気がした。その光はどんな光よりも輝いているが、どんな光よりも弱々しい。少しの風でかき消されてしまいそうな儂い灯火。一筋一筋が流れるように宙を舞い、緩やかに降りていく。

数瞬の光景がコマ送りのように大貴の視界に映る。それですら短く感じ、惜しむように愛の姿を目に焼き付けていた。自分がどこにいるのかも、何のためにここに来ているのかも完全に忘却し、ただ愛から目が離せない。離そうとしない。嬉しそうに笑う愛の背後には、必ず憂いが宙を舞っている。それを知っていて、それでも笑顔でいることができる。愛のその姿が、この世のすべてに背を向けられたような寂寥感を大貴に与えた。

「あたしはこつちだから」

気がつくと、すでに村の住宅街に入っていた。点々と家の明かりが灯っている。

「あたしんちは定食屋だから、あんた明日食べにきなさいよ」

「あ、ああ」

「それとねあんた、あたしと深雪に対する話し方。違つてることに気づいてる？ 子ども扱いしないでよね」

「は、はい」

「うん、よろしい。それじゃバイバイ、深雪、大貴」

手を振り愛が遠ざかっていく。しばらくして背中を向け少しずつ小さくなり、角を曲がって愛は大貴の視界から完全に消えた。

愛が背を向けたとき、大貴はとっさに腕を突き出していた。その手は何を表しているのか、何をしたかったのか、そのときに口からでかかった言葉は何だったのか。それを必死で押しとどめようとしたのは何故だったのか。それで、今名残惜しく思っているのは何故なのか。大貴にはわからなかった。

「どうしました？」

少し離れたところで深雪が首をかしげている。大貴は深雪に向かって頷き、もう一度愛が歩いていった方向を見てから深雪の後を追った。

「定食屋って、どこにあるんですか？」

大貴が聞くと、深雪は少し考え込むように顎に手を当てて小さく笑った。

「大丈夫ですよ。ちゃんと明日案内してあげます。愛が気になるでしょうが、明日までお預けです」

そう言つと、深雪は手を後ろで組んで片目を瞑り悪戯っぽく微笑んでみせた。大貴はむっと口を一字に引くと早足で深雪の少し前を歩いた。今の顔は他人に見せたい顔じゃない。火照った頬を冷えた風が通り過ぎていく。

大貴の後ろで深雪が小さく微笑んだ。

## 6 大貴く神社く

「この上です」

深雪が指差す先に石造りの階段が見える。階段の上、神社の入り口には大きな鳥居が佇んでいる。おそらく赤い色をしているのである。暗闇の中でそれは暗く沈んだ色に見えて踏み入れるものに威圧感を与えている。もう随分と年季が入っているが汚らしい印象は受けない。鳥居をくぐると神社までの参道を歩く。左右を砂利が埋め尽くし、さらに周囲には森林が鬱蒼と広がっている。

神社の前にはよく見られる賽銭箱や鈴が見られなかった。その代わり薄明かりの下にみつつの人影が見えた。ひとつが巫女姿、残りのふたつが学生服を着ている。そのうちのひとつが片手を挙げて、軽やかな足取りでこちらに近付いてきた。穏やかに微笑んだその顔は、学校で紹介された裕紀の顔だった。

「お疲れ様です。いかがでしたか？ お仕事の参考になりそうですか」

昼間同様の微笑で裕紀は大貴に尋ねた。

「姉さんはちゃんと案内できましたか？ ぼくはそれが心配で心配で」

「こらっ 裕紀」

わざとらしく眉をしかめた裕紀の額を深雪が小突いた。微笑ましいその様子を大貴は口元に笑みを浮かべて眺めている。大貴が裕紀の後ろを見やると、巫女姿をした女性と目が合った。この人がおそらく真弓だろうと大貴は見当をつけた。長い黒髪を後ろでくくり、それを胸の前に流している。ほうきを持っているその姿に巫女姿が実に合っていた。

大貴が会釈をすると真弓は丁寧にお辞儀を返し、ゆったりとした足取りで歩み寄ってきた。

「お話は伺っております。三島大貴さん。真弓と言います。この子

は私の弟の圭介です」

真弓の堅い口調で紹介された圭介は、本殿の前の階段に座ったまま小さく頭を傾けただけだった。昼間は遠くて見えなかったが、耳に小さなボールピアスが光っている。巫女の弟にしてはあまりそぐわないように感じ、どこか浮いているように見えた。

「今日はどちらを見てまわられたのですか？」

と真弓が切れ長な瞳を大貴に向けた。

「学校と……沼を見させてもらいました」

大貴は身投げ沼のことを知っていたが、その名を無意識に押し止めた。

「あの沼を見たときは申し訳なく思いました。あれほどのゴミを町の人が捨てていったなんて」

「お気になさらず。あなた個人が責を負おうとする必要はありません」

「しかし……」

「もしさ、責任があると思うならさ、あのこと記事にしてくださいよ。そうしたら、少しは変わるかもしれない」

前髪をかき上げたため息を吐くように圭介が言った。変わると口に出してはいるが、あまり期待していないように感じる。そういう性格なのかもしれないが、口調や態度がどこか投げやりのように感じた。大貴に話しかけているはずなのに、顔は違うところを向いている。

「そうだね」

圭介の態度はあまり好意的ではなく少なからず大貴はむっとしていたが、それを表に出さずやんわりと笑みを作って答えた。そのときにも圭介は顔を大貴に向けず鼻で小さく笑った。その人を子馬鹿にしたような笑いで大貴の眉に皺がよったが、大貴は視線をそらして深雪に話しかけた。

「深雪さん、今日はありがとうございました」

「いえ、お気遣いなく。私も楽しく回ることができましたから」

深雪は手を顔の前でふり照れくさそうに眉を下げた。

「明日はどこを回るおつもりですか？」

と裕紀が尋ねた。大貴は少し首を捻ってから口を開いた。

「明日は歴史とか関係ない、この村について知りたいね。商店街とか、住宅街とかを見てみたいな。かるい散歩みたいな気持ちで歩いてみようと思ってるよ」

「気持ちよさそうですね。ぼくも行ってみたいですよ」

「かまわないよ。一緒に歩いてみようか？」

「すみません。明日は平日なので学生は学校です」

「それじゃあ大貴さん。明日の朝、私がお迎えにきますから準備しといてくださいね。愛の定食屋に連れて行ってあげます」

深雪は片目を瞑ると唇の端を悪戯っぽく歪めた。うろたえる大貴を楽しそうに見つめている。

「帰ろっか、裕紀」

「うん、それじゃあお先に失礼します」

深雪も裕紀も同じように腰を曲げ、同じように背を向けた。背丈こそ違うが所作や表情に共通点があり、それがおもしろく大貴は口の中で笑った。二人が階段を下り、頭が見えなくなるのを見送ってから真弓は口を開いた。

「では三島さん、今日お泊まりになるところへご案内します。本殿の渡り廊下を通らねばなりませんので、こちらで靴を脱いでください。靴はそのままお持ちください」

と言つて、真弓はくると圭介に向き直った。

「あなたはもう帰っていいわよ。パパとママに伝えといてね」

圭介は黙って立ち上がると、そのまま黙って背を向けて歩き出した。両手をポケットに入れた後姿がだんだんと暗闇にまぎれていく。このとき、大貴に全身の毛が逆立つほどの身震いが襲った。圭介が消えていった暗闇の中を凝視していると、その中から何かが現れてくるような恐怖を感じ、ただ無性に形の無い何かを恐怖していた。目の前に広がる黒々とした闇が、両手を広げて大貴を包み込もうと



する。遠くに見える民家の家々の明かりが目玉に変わり、血走ったその目で大貴にある限りの憎しみを注いでくる。

冷たい汗が背中を伝い、手には嫌な汗を流している。それでも大貴は視線をそらすことができなかった。囚われたかのように動くことができない。ごくりと大貴の喉が動いた。

「どうしました？」

真弓が声をかけると、ようやく大貴の体にやわらかさが戻ってきた。闇はやっぱりただの暗闇だし、遠くに見える明かりは民家のものだ。

大貴は頭を強く振ると曖昧に笑いかけて靴を脱いだ。真弓もそれ以上詮索しようとはせずに本殿の階段の脇にほうきを立てかけた。

このときの恐怖を大貴がはつきりと覚えていたのなら、もしかしたら何かが変わっていたのかもしれない。どんなに後味が悪かろうと、最悪の結末を避けることができたのではないだろうか。しかし、この後、大貴は真弓から村の歴史を知らされる。その結果、大貴はこの恐怖をきれいさっぱりと忘却してしまうだろう。あるものによって作られた時計は、三島大貴という歯車によってゆっくりとまわり始めた。くるくる、かちかちと確かに音を鳴らして。それを作ったのは誰なのか、いったいいつになったら鐘が鳴るのか、それはまだわからない。一度動き出した歯車はもう止まることができない。針が頂上で重なるまでは。

この主はきつとほくそ笑みながらこの舞台を覗き、こう呟くだろう。

「役者は揃った」

## 7 大貴く神社内く

板張りの廊下に靴を脱いで上がると、ひんやりと靴下を通して冷たさが伝わってきた。まだそれほど風は冷たくないが、一瞬の北風は体を震わせるほどに冷たい。季節は刻一刻と変わってきている。本殿を一周している廊下を真弓の後に続いて歩く。縦に長い本殿は鳥居同様に時代を感じさせる古さを蓄えている。最近では神社も鉄筋コンクリート造が増えてきているが、ここは木造の日本式建築だ。端々からにじみ出る木造特有のにおいが鼻を刺激する。町では感じるこのできない心地よさに自然と気分が落ち着いた。

ちょうど真裏の位置にもうひとつ建物が見えた。屋根のついた渡り廊下で本殿と繋がっている。どうやらこれが離れのようだが、いまいち離れという気がしない。大貴の中の離れのイメージは付属品といった感じで、少なくとも母屋より大きいと考えたことはない。本殿が母屋と考えていたが、どうも本殿のほうが付属品のように見えてしまう。

「拝殿はないんですか？」

ここに来てからずっと不思議に思っていたことを口に出した。

通常、神社には本殿と拝殿という二種類の建物がある。本殿の前に礼拝用の拝殿が建っており、賽銭箱が置いてある。拝殿はお祓いや祈祷を受ける場所になっているのだ。しかしこの建物は正面に賽銭箱はなく、春日造という本殿の造をしていた。拝殿がない神社なんてこれまで聞いたことがなかった。

「お詳しいですね」

「以前仕事で扱ったことがあるんですよ」

「ここは飾りのようなものです。参拝する人は誰もいません」

真弓の言葉はやはりどこか冷たい印象を受ける。接客サービスをするつもりのない事務員のような印象を受けた。まあ、そんな事務員を見たことがないが。

「それにしても、ずいぶん大きい離れたね」

と大貴が感嘆の息を漏らすと、真弓が足を止めこちらに振り返った。

「居住スペースとなっておりです。こちらの建物は神社とは切り離してお考えください。離れという言葉も適切ではありません」

淡々とした話し方で大貴を攻めているような印象を受ける。実際には何も悪いことでも、攻められるほどのことでもないが、大貴は何か悪いことでもしたような気持ちになりすみませんと頭を下げた。「謝られることはありません。三島さんがお泊りになる部屋にご案内します」

と言つて背を向けると、足音を立てずに廊下を歩いていった。大貴は焦つてその背中を追った。

真弓が切り離して考えろと言つた意味をすぐに理解することができた。離れの正面に立つてみるとそれがはつきりとわかる。離れには玄関がついている。確かに渡り廊下を歩いてきたはずなのに、何故かそこには横開きの玄関があり、開いた中にはしっかりと三和土横には靴箱まである。もともと別々になっていた建物同士を無理やり廊下でくつつけたみたいだ。

「靴はそこにお入れください」

真弓は靴箱を指差した。大貴はそれに従い靴箱の中に自分の靴を入れる。靴箱の中を見るとハイヒールと女物の靴が数点置いてあるのが見えた。巫女とはいえ、常に巫女装束というわけではなさそうだ。

「ではご案内します。一応、客間だけでなく他のお部屋も紹介しておきますが、あまり探索なさらないようにしてください」

「ええ、わかりました」

大貴が頷いて真由美の後に従う。

真弓は丁寧に一つ一つの部屋を説明していつてくれた。大貴の泊まる部屋は玄関を南とすると、ちょうど北東の場所に位置していた。六畳程度の和室で毎日掃除がなされているのかほこりひとつ見るこ

とができない。家具といったものはハンガーがいくつかと卓袱台がひとつあるだけで、それ以外は何もない殺風景な部屋だ。

大貴が部屋の隅に荷物を置くと、真弓は襖の前で正座をし、

「お料理をお運びしますので、しばらくお待ちください」

と言って大貴の言い分も聞かずにさつと襖を閉めた。どうも真弓の言葉の端々に大貴に対する冷たさが含まれているように感じる。嫌われているのか、それとも彼女の性格なのか。後者であって欲しいと大貴は切実に願った。

ほどなくして真弓は盆に料理を持って襖を開けた。すべてが村で取れたものであり、丁寧に料理の一品一品を説明してくれたが、大貴はそれを上の空で聞いていた。今日一日この村を回っただけだが、どうも町で知られている村の印象とは随分違っているように思えた。真弓にしても深雪はしきたりと言っていたが、この家に一人で暮らしているのだろうか。

「どうなさいました？」

説明を終えたところで、ようやく大貴の耳に真弓の声が届いた。

「あの、この家に一人で住んでいるのですか？」

「深雪から聞きましたか？」

「しきたりがあるとは聞きましたが、その内容までは」

「では、後ほどお話ししましょう。この村の歴史についてもまとめてお教えします。お食事を終えましたら居間のほうに来てください」

そう言うともうここにいる理由が無いと言わんばかりに俊敏な動きで部屋を出て行った。襖を閉める乾いた音と、まだ湯気の立ち昇る食事を残して。

「まるで氷か風だな」

真弓に対する印象を大貴は口ずさんだ。氷のような冷たさに、風のようなつかみどころのなさを兼ね備えている。万人に好かれると思うほど大貴は自意識過剰ではない。それでも、初対面の相手に冷たくされるのは嬉しいことではない。

とにかく早く食べてしまおうと食事に手を伸ばす。

温かいけど、どこか味気ない。

## 8 大貴の歴史

食事も終わり居間に行くと、卓袱台に正座したままじっと目を閉じている真弓がいた。まだ巫女装束を着替えていない。大貴が襖をあけるとゆつくりと目を開ける。

「お食事はいかがでしたか？」

「おいしかったです。町ではあまり食べれないものばかりでした」

「それはよかったです」

大貴が真弓の正面に胡坐をかいて座ると、真弓が電気ポッドから急須にお湯を注ぎお茶を出した。差し出された湯呑みを受け取り口をつけると、ほのかな甘味が口の中に広まった。

「早速ですが、いくつかお尋ねしたいことがあります」

両手で湯呑みを持っている真弓を正面から見据えた。湯呑みの水面に向いていた真弓の瞳が大貴を捉える。上品に結われていた髪を頭の高い位置でポニーテールになおされている。切れ長な瞳は涼しげでもあるが、やはり真弓はどこか冷たげだ。鼻梁は緩やかにカーブを描き高みを目指す。顎は細く尖っており、それが真弓の冷淡な雰囲気一拍車をかけていた。化粧をしていないにもかかわらず、頬は柔らかな茜色に染まり唇は朱色。これで眼鏡をかけスーツを着れば有能な秘書にもなれるだろう。外にいたときは細部がはつきりとしなかったが、明るいところで見ると気後れしてしまうほどに整った顔立ちをしている。

大貴を見ているはずなのに、その射抜くような視線はもつと別の何かを捉えているように思える。奥の奥を見透かされているようなそんな気さえしてしまい大貴は背筋を伸ばし、息を吸い込んで腹に力を込めた。

「真弓さんがこちらに一人で住んでいる理由です」

深雪はしきたりだからと言っていたが、結局それについて話を聞くことができなかった。

「深雪から何も聞いていないのですか？」

「しきたりと聞きました。あと、身投げ沼が関わっているとも」

真弓は湯呑みを卓袱台の上に静かに置いた。

「三島さんの調べた村の歴史。圭介と裕紀くんに尋ねましたが、それにはかなり誤りがあります」

と真弓が淡々と語りだす。

「この村は雨の村と町では語られているようですが、この村の正式名は雨乞いの村と言います」

「雨乞いの村ですか？」

「はい。この村は雨を呼ぶ神を祭るためにできた、そう三島さんは解釈していると伺っております」

圭介と裕紀だな、と大貴は当たりをつけた。

「ええ、裕紀君にはそう話しました」

「それは町により歪曲された歴史です」

淡々と話していた真弓の声が一瞬暗く落ちこんだように思えた。目つきもかすかに鋭くなったように見える。

歪曲と聞いて、裕紀と話したときと同じ違和感を覚えた。そしてその理由もわかった。

違う国同士ならともかく、同じ国で距離も離れているとは言いがたい。少なくとも歴史に変革をもたらすような距離ではないだろう。それなのに、裕紀は「町の資料だと、この村の歴史はどのように書かれているのですか？」と尋ねてきた。村と町とでは歴史が異なっていることを知っている。確信している。裕紀に感じた違和感はいかなのだ。

「信じていただけるためにも、村の歴史の概要を説明しましょう」  
何か言おうと口を広げたが、大貴の先手を打って真弓が口を開いた。仕方なく大貴は耳を傾ける。

「当時、この地方では日照りが続いていました。それはひどい日照りだったようです。老人、子供と体の弱いものからどんどん亡くなっていきました。そのため人々は雨の神に何度も祈りました。その

雨の神が住まうとされていた場所は、三島さんがご覧になった祠のある身投げ沼です」

祠は見えていないが何も言わずに大貴は頷く。

「しかし、いくら祈っても日照りは続きました。これに業を煮やしたのが当時の地主です。いくら祈っても雨が降らないことに怒りを示し、ついに生贄を捧げると言い出したのです」

ありそうな話だなと大貴は考えた。慈悲深いとされるキリスト教も過去には生贄をもとめたこともある。他にも太陽を神と考えていた地方では、自らの心臓を太陽への貢物として差し出したとも言われている。宗教や祈りに生贄はかなり高い確率でつきまとう。

「民の中には反論もありましたが、代替案も思いつきません。その上、状況も窮地にまで追い込まれていました。多くのものの賛成によりすぐにでも決行するため、神社にて何度も会議が行われたそうです。生贄に女性を捧げることまではすぐに決定しました。これは、昔の風習とでも言いましょうか、男尊女卑といえわかりやすいでしょう。しかしここまでです。これより先は一向に進まなかったのです」

「進んで生贄になりたがる人はいなかった」

「そうです」

真弓は頷き、ため息を吐くように言葉を続けた。

「生贄を誰にするか、どのように捧げるか、何人捧げればよいのか、問題は挙げれば挙げるだけ存在しました。いくら考えても答えなど存在しません。当時、神に仕えていたものたちもこれには首を傾げるしかありません。しかし犠牲を最小限に抑えるためにも、早急に結論を求めました……」

話が途切れ、いくら待っても真弓の言葉が続かない。真弓は目を伏せじつと卓袱台を凝視している。不思議に思い大貴が声をかけようと身を乗り出すと、突然険しく表情を歪めた真弓と目が合った。「最善とは、いったいなんでしょうか？」

脈絡のない真弓の質問に冗談かと思ったが、真弓の表情はそれを



否定する。それまで冷たい雰囲気を漂わせていたが、大貴が知っていたその顔は真弓のほんの一部、仮面であつたのかもしれない。真弓の瞳には闇というのですらまだ明るく、深海ですら浅すぎる深みを備えている。奥の奥に何を隠しているのか、読むことができない。だがその瞳の表面からは抑えきれずに噴出した怒りが溢れ出している。目をそらしたいはずなのに、真弓の視線に絡み取られそらすることができない。

「社会の利益とは、それほど優先されるものなのですか」

口調こそは穏やかなものだが、狂おしいほどの怒りがひしひしと伝わってくる。大貴は背中に冷たい汗をかいているのがわかった。

「じ、状況に、よるんじゃないだろうか」

「状況とは何ですか？ どんな状況なら許されるのですか？」

どもる大貴に追い討ちをかけるように真弓は攻める。背筋を伸ばし、正座をした膝の上に両手をおいている。指一本、髪一筋とも微動だにしない。だがそれが大貴には不気味であり、蛇に睨まれた蛙のように真弓から逃れることができないでいた。

「すみません」

真弓の言葉が風船に穴を開けたように、張り詰めた空気が抜け出していった。引き締めていた目尻からも力が抜け、悔やむように目を細めた。

「熱くなつてしまいました。三島さんに尋ねても仕方のないことでした」

真弓は深々と頭を下げ、顔を上げたときにはもう、最初のかすかに冷たさを感じる顔つきに戻っていた。

「結論を出したのは神に仕えるものではなく、生贄を提案した地主です。地主が決断を下すことに対して疑惑や反論が無かったとは言いません。しかし明日すら危うい人が大勢いる中で、そんな悠長なことを表立つて言える人はいませんでした。彼の提案はこうです」

そう言つて真弓は強く息を吸い込むと、

「巫女や坊主など神に仕えるものおよび身分の低いもの全員を生贄

に捧げる」

と一息に言い目尻をきゅっと上にあげた。

「全員といっても地主の使用人などは免れたと思います。生贄に選ばれたのは、地主から見て邪魔と考えられたものたちでしょう」

教科書で今までにも歴史は学んできた。南京大虐殺、ナチス大虐殺、ホロコースト。肩を並べて学んだ学友の中には涙を流したものもいた。大貴もそれらの映像、残された資料を見て何も感じなかったわけではない。少なからず心を痛めた。それでも、それは昔の出来事ではない。いくら悲しくて、恐怖しようとも他人事。心の芯を貫くことはなかった。

しかし、大貴は息を呑んでいた。喉を鳴らす音が真弓にも届いたのではないかと思うぐらいに、のどぼとけが上下に震える。心の芯を舐め回されているような悪寒。過去の歴史に過ぎないはずなのに、真弓の言葉からほとばしる形のない何かが大貴を揺さぶっている。真弓の視線が大貴に発言を求めているかのように細められる。

「それは…具体的に、どれぐらいの人が？」

「かるく見積もっても百人は超えていたでしょう。自らの悪事を隠蔽しようとしたのか、このときの詳しい記録は残っていません。身分の低いものは字が書けないものがほとんどでしたし、神に仕えるものたちは、自らの祈りが通じず悲しみにくれていたと言われています。この結果を仕方のないものとして受け入れたようです。ゆえに正確にはわかりません」

「おかしくないですか？　いくらなんでも、それほどの人数を生贄にするなんて」

「それほど窮地に立たされていたのでしょうか。それに地主に仕える使用人を含め、身分の低いものは虐げられていました。邪魔者を排除するいい機会ぐらいに考えて地主は決断を下したのかもしれない。先ほども述べましたが、正確な記録は残っていません。口頭で伝えられものをお話しています」

真弓の口調は教科書を黙読しているかのように静かで、しかし一

言一言が大貴の全身を駆け巡りすべての細胞に刺激を与えていく。淡々と語る姿は静かな威圧感があり、それを感情込めずに語ることのできる真弓に恐怖を覚えるほどだ。

「それほどの人が……身投げ沼に？」

「はい。全員が全員というわけではありませんが、多くのものが身を投げました。愛の祖母がこの沼に身を投げたのは、これが理由です」

「愛さんの」

愛、という名が出てきて大貴は恥ずかしいほどに反応した。声が裏返り、腰を曲げてまで真弓の言葉に耳を傾けようとしている。

「生贄に選ばれたものたちは、山で囲われた未踏の地に閉じ込められることとなります」

期待に反し真弓は愛について触れなかった。名残惜しい気もしたが、大貴はそれには触れずに言葉を待つことにした。

「三島さん。私は先ほど、口頭で伝えられたものをお話している。と言ったのを覚えておいでですか」

「あ、ああはい。覚えていま」

口頭？ 頭にその言葉がぽつんと浮かび上がって離れない。

口頭、文書などに記されず人から人へ口で伝えること。口伝の儀とも言つ。少人数で秘伝を守っていく際に使用された方法。さらには、文書で記すと隠滅、土地によっては迫害の対象とされてしまったため、周囲に知られないように真実の歴史を残すために有効とされている。真実の歴史を残す

いったい誰が？ 何のために？ 歪曲してまで隠そうとした歴史を残したのか。それを何故真弓がそれを知っているのか。

瞬間、大貴の頭に閃光がよぎった。全身がぞわぞわと波打ちだし、髪の毛が抜け落ちたのだとは思えるぐらいの、冷たい汗が毛穴から勢いよく流れ出る。

真実の歴史を残すのは誰か？ それを歪曲するのは誰か？ 虐げられたもの、被害に遭ったものが後世にそれを伝えていく。虐

げたもの、加害者こそが自らの罪を隠そうと歴史を隠蔽していく……。大貴が上げた顔に、真弓が小さく目を閉じ、そして瞼を上げた。「お察しの通り、私は生贄にされた巫女の子孫です。雨乞いの村の村民は、すべて生贄の子孫です」

## 9 大貴の歴史・後編

事の顛末を教えましょう。と言って真弓は少しだけ居住まいを正した。

「生贄に選ばれたものたちをどうやって捧げるか。これは地主たちの頭を大いに捻らせました。近場で死体の山をきづくわけにはいきませんし、遠くなればこのことが知れ渡ることになってしまう。これはどうしても避けなくてはいけなかった。そして、全員を殺すわけにもいかなかった。もしも、これから日照りが続いてしまえば、もう捧げる生贄はいない。この邪魔者を排除し、かつ生贄に捧げる。それも長期間にわたって行わなければなりません。そこで考えられたのが四方を山で囲まれたここ雨乞いの村です」

真弓は息をつくと一口湯呑みからお茶をすすった。そして音を立てずに卓袱台の上に置く。大貴はその動作をじっと眺めていた。

「当時は村などなかったので、四方を山で囲まれ隔離された空間。そこに生贄を押し込めればいいと考えたのです。村からは離れ、情報も漏れる心配がない。雨の神がいるとされていた沼もここにありません。口実にもなっているわけです。今でこそ多少の労力で山を越えられますが、当時はもつと山は大きく、野犬や盗賊がはびこっていました。生贄たちが逃げる心配ありません。ひとつだけ不安視されたのが、生贄が長期間生き残ってくれるか、です」

「それは心配ないんじゃないやありませんか？ 隔離された場所なら全員が死んでしまっても情報は漏れないし、農民には偽の情報を流せば

「

言葉の途中で、真弓は力なく首を振った。

「地主も神をないがしろにしていたわけではないんです。妖怪や怪物を恐れていたような時代ですから、神の力をどこかで恐れていた。だからこそ、これほどの非常識な生贄も成立したのですから」

大貴ははっとして頭をかいた。もともと雨を降らせるために生贄

を捧げようとしたのだ。農民は騙せたとしても、生贄を与えなければ神は日照りを続けるだろう。問題の基盤を忘れてしまっていた。大貴は腕を組みうなり声を上げる。そんなことが可能なのか？ 生贄を生かし続け、状況によって命を捧げる。あたかも籠の中に動物を入れて飼うかのように。そのような異常な方程式は成立するのだろうか。

ふっと真弓の視線がゆれた。

『私は生贄にされた巫女の子孫です』

そうだ。真弓の言葉。生贄には子孫がいる。つまり、この異常な方程式は成立しているのだ。籠は完成していたのだ。

ならば、前提は出来上がっている。これは成立するものだと考えれば良い。どうすれば生贄を死なせずに住むか。長く生きることができるか。今存在していて、過去に存在していないものを探せばいい。

『当時は村などなかったのだ』

「村？」

「そうです」

大貴の言葉に、真弓が首肯した。

「何もないこの地に、村を作ったのです。本当は村と呼べるほどのものではありません。生贄が死なない程度に土地を整えた、と言った方がいいでしょうね。そして、有事の際には女性を生贄に捧げます。つまり、」

真弓は言葉を切り、息を吸う。

「この雨乞いの村は生贄により作られた、生贄を生産するための村なのです」

体内が揺れ動くような感触がした。地盤が崩されたような浮遊感

に全身の毛が逆立つ。

今までに出会った村民。深雪も裕紀も圭介も悟も勝也も愛も、そしてこの村に住む全員が、生贄。生を受けても、すぐ目の前に死を突きつけられる恐怖におびえている。この村にいることで、すでに運命は決定されてしまう。それも神ではなく、人に。

「この村の、全員が？」

「正確には違います。巫女や坊主、神に仕えるものは生贄の対象外にされました。生贄とはなにも命を捨てることだけではありません。私の先祖には雨乞いの村の住民を監視し、なおかつ生贄に捧げることが義務付けられました」

他人に死を宣告し続ける恐怖と、いつ死を宣告されるかわからない恐怖。いったいどちらが辛いのか考えてみたが、すぐに止めた。こんなことを客観的に判断しても、それが正しいことだとは思えない。殺人が正しいことだと証明されたことはないが、支持されることはいつの時代でもある。

「何年もこの生活が続きました。生贄を選び続けた先祖たちは精神が朽ちていったのです。当然といえば当然でしょう。隔離された仲間を殺していく。これを何年も、何十人も続けたのですから。そこで彼らは、これから後、子孫を作っていく中で女兒が生まれたら、その子を神に近いものとし常にひとりで神の言葉を伝える。これが、今に伝わるしきたりの根本となります」

「それは……」

生贄の中で、さらに生贄を作り出す行為に等しい。死を宣告する恐怖から逃れるために、神に仕えるものの中からさらに生贄を選別したのだ。これは正しいことなのだろうか。一人を犠牲にして安らぎを得る。数の上では、紙の上では正しいことだが。

大貴は考えるのを止めた。もう無駄なことだとわかっている。

「その掟のために、真弓さんはここで一人、暮らしているのですね」「そうです。現在では生贄の選別など行っていません。時間が経つにつれて掟ではなく、しきたりと幾分やわらかい言葉にも変わりま

した。先ほど三島さんは拝殿がないことに疑問を抱いておられましたが、もうお分かりでしょう？」

死の宣告を下すだけの巫女。この村に住むものが好き好んで拝むとは思えない。雨の神を祭っているのかもしれないが、この村のものにとつて雨の神にどれほどの価値があるのだろうか。

「では、あの本殿にはなにが収められているのですか？」

「何もありません」

「何も？」

「はい。この家が建てられるまでは向こうで暮らしていたそうです。私が生まれたときにはもうこちらが建てられていたので、経験していませんが。今では役場のものが会議をする際に場所を提供することもあります」

真弓は咳払いをすると、とにかく、と言って話を戻した。

「日照りも長くは続かず、しだいに生贄にされるものも減っていきます。隔離された場所に村が置かれていたため、次第にこの村は忘れ去られていきました」

言い終えると真弓は肩を落としゆっくりと息を吐いた。少し疲れただのか眉間を軽く押さえる。大貴が時計を見ると、すでに二時間近くも経過していた。

「以上です。大まかですが、この村ができた真実の歴史です。まだ話すべきことはありますが、きりがよいので今日はここまでにさせていただきます。何か質問はありますか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうですね。では、後ほどわからないことが出てきましたら、そのときに遠慮なくお尋ねください」

と真弓が言い終わると、静かに立ち上がり襖をあけた。

「申し訳ありませんが、先に休ませていただきます。私の部屋は三島さんの客間とはちょうど対角線の位置、三和土の脇にあります。何かありましたら遠慮なくお声をおかけください」

「ええ、わかりました」



真弓は丁寧にお辞儀をすると、静かに襖を閉めた。廊下を進む衣擦れの音のあと、扉を開ける音が遠くのほうで微かに聞こえた。

その後には何も音がない。いくら耳を澄ませてもねずみの駆ける音すらしない。卓袱台を前に胡坐をかけたまま、大貴は先ほどまで真弓がいた場所をただじつと眺めていた。

真弓の現実離れた歴史。それを頭ごなしに信じることはできない。町が歴史を歪曲しているというなら、村の歴史も歪曲されいるとも考えられる。虐げられたものはその怨みを忘れない。逆に、虐げたものはそのことを忘れがちである。だが被害者は得てして被害を誇張しがちだ。過去にこの村の先祖は何かしらの屈辱を受けたのかもしれない。それを誇張して語り継いだのではないのだろうか。そう考えるのが自然だ。もし別の誰かにこの話をすれば一笑に付されてもおかしくない。

そのはずなのに、真弓の顔が脳裏から、瞼から離れない。話しているときに垣間見た感情の起伏。そして、瞳の色。

社会の利益、最善。これは間違いなく生贄についてのことだろう。あのと時の真弓は何と答えてほしかったのだろうか。どんな答えを求めていたのだろうか。理性が外れるほどに、狂おしいほどに聞こえないように声を荒げて。

考えるが、答えは出ない。多数決は少数を駆逐する。多数の前に、少数は生き残ることができない。

多数が正しいとは限らない。誰もが知っているはずなのに、問題が大きくなればなるほど、人は視線を気にしだし、周りを見渡し同じ方向に進みたがる。それが間違っているとわかってても一度進んでしまつては誰も止めることができない。たとえ、どれだけの被害が出ようとも。

真弓が苦しんでいるのはわかる。語り継がれた歴史は想像を絶するものだ。だけど、やっぱりそれは過去の出来事なのだ。どれだけ重く語り継がれていようとも。自分が体験していないことに感情を向けられるのだろうか。戦争を理解できるのは戦争を経験しないとわ

からない。辛さを、恐怖をどれだけ語られようと、本当に理解することはできない。それは軽視しているからではなく、それだけその事実が重いからだ。

それなのに、真弓の瞳には自らが経験したかのような怒りが込められているように感じた。そして、その瞳は真弓だけじゃない。最初に会ったときの深雪も、一瞬だが同じ色を見せた。今も屈辱を受け続けているかのような、言葉で言い表すのがもどかしいほどの闇。

その考えに、大貴の全身は鳥肌を立てて震えた。今も屈辱を受け続けている。それならば、説明がつく。今も当時の何かが、もしくは別の何かが村民に影響を与えているのなら、真弓や深雪の瞳の色には説明がつく。

震えが足先までいきわたると、大貴は飛び跳ねるように立ち上がった。

ある。村民に影響を与えているもの。村の再開発。

大貴は自分が何のためにこの村に来たのかを思い出した。深雪には村の再開発の取材と言ってある。それに嘘偽りはない。名目ではなく、実際に書いた記事を載せるだろう。だが、村民には知らされていない事実がある。

村の再開発といっても、この村のためになることを役所の人間が決めるはずがない。町から離れ、人口も少ない。村民の多くは老人。ダムを作るにはうってつけであり、ゴミ処理施設を作っても誰からも文句が出ない。出たとしても、かき消してしまえる。

社会の利益のために、再びその身を削られる。それを、黙って見ているはずがない。

そう考えた途端、大貴は自らの状況に恐怖を覚えた。町に怨みを抱いた村民。その中に独りで佇む町の人間。そしてさらに、この村の隠されていた歴史を知ってしまった。こんな人間を放っておくものか？ 格好の標的ではないか？ すべての村民が怨みを抱いているのなら

。深雪の瞳、裕紀の疑問、圭介の態度、真弓の葛藤……。

考えれば合点がいく。こじつけじみているかもしれない。くだらないと笑われるかもしれない。それでも、大貴の全身の震えは止まらない。脳裏に出会った村民の姿が巡る。笑っている人ばかりだ。みんな心地よい笑顔を向けてくれる。それなのに、今となつてはその笑顔を手放しに信じることができない。裏に隠れた顔を見つけようとしてしまう。見えてしまう。

だが、一人だけ、純粹に笑顔を見つめることができる。

愛にはその影が見えない。愛の瞳にも、仕草にも、誰かを怨むようなどす黒い負の感情を見出すことはできない。ただ見えるのは、この村をどれだけ大切にしているのか。それだけだ。愛の祖母を追い出そうとし、結果として殺してしまった。そんな村なのに、愛はこの雨乞いの村を憎んではない。

「あれ？」

何かおかしい。そう考えたときに、反射的に口が動き出した。

「何で愛の祖母が追い出されたんだ？」

よく考えてみれば何かがおかしい。もしも町の住人と関係を結んだのであれば、過去の歴史から追い出そうと考えるても無理はないかもしれない。だけど、愛の祖父が関係を結んだ相手は外国人。町の住人である可能性も、子孫である可能性もない。

戦時中だから追い出そうと考えた。それもやはり変だ。戦時中に外国人と関係を結び、村を追い出すだけにとどめるだろうか？ それは甘すぎるのではないか。殺してしまうぐらいのことがあってもおかしくなさそうだ。それに、過去の歴史から考えて、同じ苦痛を味わった家族を追い出そうと考えるのも、それはそれでおかしい。どちらかといえば、村ぐるみで逃げ出さないように監視したほうが安心なのではないだろうか。

たしか愛が言っていた。この村は他の町との交流を絶っている。交流が薄い、交流しにくいのではなく、交流を絶っている。

意図的に交流を絶っているのか、それとも状況から交流を絶たざるを得なかったのか。どちらにしても、それならば愛の祖父はどう

やっつて外国人と知り合つたのだろうか。

真弓はまだすべてを語っていないだろうし、何かを隠しているのかもしれない。まだ情報が足りない。ただわかつているのは、何か得体の知れないものが、この村には渦を巻いている。多くの思念が絡み合つて、何かを形成しようと動いている。

大貴の身震いが、ゆっくりと静まる。とびっきりの笑顔を見せる愛の顔を思い浮かべた。

明日、愛に会ってみよう。ただのこじつけかもしれないし、本当はなんでもないことなのかもしれない。それを深く考えすぎるから、悪い方向に転がっていつてしまっているのだろう。

大貴は立ち上がつて、襖を開けて部屋を出た。靴下越しに床の冷たさが伝わってくる。それなのに、大貴の額には汗の粒が光っていた。

自分の部屋の扉を開けて耳を澄ませる。今出てきたばかりの部屋にはまだ明かりがともっている。襖の隙間から、一筋の光が暗い廊下に伸びていた。彼はまだあの部屋を出ようとしな。今の話を聞いて何を考えているのだろうか。きっと考えれば考えるほど、悪い方向に転がっているにちがいない。

部屋の明かりが消えた。それと同時に廊下を歩く音が聞こえ、襖を閉める乾いた音。その後に音は無い。ねずみが駆ける音すらしない。慣れるまでに時間がかかったが、今ではこの音が無い恐怖にも順応できている。それでも、好きになることはできないでいた。幼い頃に両親、弟と共に過ごした思い出が後ろ髪を引き続けている。

表情を変えずに開いた扉から中に足を踏み入れ、後ろ手で鍵を閉めた。この扉だけ襖ではなく外開きのドア。ここにだけは誰にも入って欲しくない。無理を言っただけ鍵をかけられるドアに変えてもらった。忍び込む人がいるとは思えないが、それは気持ちの問題。あるのと無いのでは、それだけで心が安らくなる。

真弓はベッドの端にしゃがみこんだ。ポニーテールで結わいていたゴムを外す。長い黒髪がふわっと舞い、額に、肩に流れ落ちた。気丈に吊り上っていた目尻も、今は弱弱しく歪んでいる。瞳からは刃物のような鋭さが消え、見るものを心配にさせる不安定さが映っている。

全身がぐたくたに疲れていた。頭が重く感じる。二時間近くも話し続けていたこともある。だけど、それ以上にこれからのことを思うと憂鬱な気持ちになってしまう。三島大貴にも悪いとは思。彼に落ち度は何も無いはずだ。弟たちは一方的に町の人間を毛嫌いしているけど、すべての人が悪いわけではない。

真弓は枕元に置いてあるクマのぬいぐるみを手に取り、ぎゅっと抱きしめた。

理性的には、わかっている。自分たちがこれからやろうとしていることが、どれだけ愚かなことか。仮に成功したとしても、それで得られるものがどれだけあることか。むしろ得るものは無いといつてもいい。将来的にこの村のためになるのかもわからない。それでも、いくら理性が否定しようとも、心は決まっていた。智美のことは、許されることじゃない。あの時の怨みを忘れたことは、一度としてない。

ふっと視線を上げた。この対角線上に三島大貴はいる。もう寝息を立てているのだろうか。耳を澄まそうとも、物音ひとつすることはない。

この村の歴史を知って、きっと恐怖に体を震わせたかもしれない。村の住民が町への怨みをいまだに育み続けている。そう考えているかもしれない。あの歴史に嘘はない。確かにいくらかの誇張は含まれているかもしれないが、それでも大筋に嘘はない。真弓たちの先祖は、やはり生贄としてこの村に閉じ込められたのだ。

そして、三島大貴はこの村を存続させるための生贄。村の再開発などと銘打っているが、その実、行おうとしているのはこの村の破壊。残された住民たちは、悪化した村の現状に頭を抱えながら生きていくしかない。

この村の住民で過去の歴史を知らないものはいない。それでも、町に対して怨みを抱いている人間は、もうほとんどいない。この再開発計画にも喜んで賛成するものまでいるほどだ。智美の事件があつても、それは変わらなかった。最小限の犠牲として、智美は数えられてしまったのだ。

真弓の手に力がこもった。クマのぬいぐるみが歪み、形を変える。怨みを忘れてしまったのなら、思い出させるしかない。過去の歴史を知り、本当に怒りを覚えることができるのは巫女である自分だけ。先祖の怒りを、巫女の怒りを晴らすのは今を置いて他に無い。村中の怨みを育むには、今を置いて他に無い。

「人が人を殺すとき、人のためにと頭を垂れる」

静かに、真弓は口を開く。

「人が人を殺したのち、それを忘れて諸手を上げる」  
淡々と、言葉を吐き出していく。

「これを怨みと言わざるか、これを怨みと言わざるか」  
歌うように、言葉をつむいでいく。

「忘れし記憶に鐘鳴らし、雨と共に降らせよう」  
顔を上げ、視線を中空に漂わせる。

「恵みの雨など与えるものか、我等の存在を知らしめよ」  
高い声とは裏腹に、その瞳に再び現れた闇。

「四つの人頭柱にし、怨みの欲を育まん」

闇は広がり、暗い淵を見ているかのように真弓の視線は虚ろをさまよう。

「姉の犠牲は己が罪、そなたが無念を晴らすのだ」

口を閉ざした真弓は、怒りというのもおこがましい。闇というのですらまだ明るく、深海ですら浅すぎる深みに落ちこんでいた。

## 10 真弓の歴史（後書き）

一部完です。気持ちとしては三部作のような形で進めたいと思っています。その中の、ようやく一部完です。



## 11 大貴の失踪

まぶしい。

窓の隙間から光が差し込んでいる。大貴は目をこすると、枕元においておいた腕時計を手につけた。時刻はすでに九時。休みの日であればもう一眠りする時間だが、いくら仕事が無いとはいえ、さすがに二度寝をするわけにもいかない。村という地理を考えるのならば、いささか遅いくらいだ。

大貴は布団から体を這い出すと、大きく伸びをした。昨日の話が幾分気持ちを高揚させたのか、寝つきが悪かったものの、その後は夢を見ることもなくぐっすりと眠りこけた。そのせいか全身が気だるく、起きることを拒絶している。それでも無理やりに立ち上がり体に活を入れた。

襖を開け、廊下に出る。とりあえず真弓と会うべきだろう。家主に何も言わずに外出するのは良いとは思えない。対角線の位置にある真弓の部屋に行こうとしたところ、ちょうど昨日真弓と話をした部屋から何やら物音がする。自然と忍び足になり、聞き耳を立てると、どうやら真弓と深雪のようだ。

「歴史……どこまで話し……の……」

「大体は……も弟について……してない」

「……すべきかな……智美について話す……」

近付くにつれてだんだんとはつきりとしてくる。真弓と深雪以外に部屋の中には誰もいないようだ。昨日の確認でもしているのだろうか。

「この村については話していいと思うから、生贄についても包み隠さずに教えてあげていい。知っていても知らなくてもあんまり関係ないでしょ」

「智美のことについてはどうしよう？ 案内するつもりだけど、教えるのは表だけのほうがいいよね」

智美？ 昨日もちらほらと耳にした名前だ。あまり気にならなかったが、何か重要な人物なのだろうか。それよりも、表のほうだけとはどういう意味だろう。

「それは状況によりけり。できれば全部包み隠さずに教えたほうがいい」

「でも、悟くんがなんて言うかな。あんまり喋ってほしくないんじゃないかしら」

「深雪もでしょ」

「そうだけど……」

「結局は村中に知れ渡ることになるんだから、遅いか早いかだけ」「それは、うん」

深雪の沈んだ声を聞いたところで、大貴は襖を軽く叩いた。ノックをした後にふと襖に対してノックをしているのか、と脳裏をよぎったが、中から真弓が「どうぞ」と声をかけてくれた。一瞬間をおいてから、大貴は襖を開けた。

「すいません。寝坊してしまいました」

卓袱台を挟んで真弓と深雪が向かい合っていた。真弓は昨日と同じように巫女装束。無表情な顔で大貴の胸の辺りを見ている。

一方、深雪はジーンズにトレーナーというラフな格好に身を包み、につこりと笑顔を大貴に向けている。あまりにも対照的であり、大貴には月と太陽が一緒にいるようにも見えた。

「深雪さんはいつも真弓さんに会いに来ているんですか」

大貴が腰をおろすと、それに合わせて真弓が湯飲みにお茶を注ぐ。「いつもじゃありませんよ。今日は大貴さんがいるのでお迎えに上がりました」

深雪がいたずらっぽく笑うのを見て大貴ははっとした。昨日帰りに迎えに来るといつていたのを思い出した。その後のことがあまりにも刺激的過ぎて、そのことをすっかり失念していたのだ。

「朝は弱いんです。すみません」

「仕方ありませんよ。編集の方って夜遅くまで仕事しているんです

よね？　ほとんど昼夜逆転の生活なんじゃありませんか」

それは偏見だが、多くの人はそんな考えを抱いているようだ。夜通し仕事をし、朝に少しだけ眠り、そして仕事を再開する。それは一部の面で事実だが、そんな生活を毎日しているわけではない。というより、ほとんど定時で帰れてしまうのが現状だ。

大貴は曖昧に頷くにとどめた。真弓が差し出した湯飲みを両手で受け取る。昨日飲んだのと同じ緑茶だ。

「それより、さっき話が聞こえたんですが、智美さんって誰ですか？」

「もしかして声、うるさかったですか？」

「いえ、そういうわけじゃないです。ただ少し、聞こえただけで少し聞こえるとは、いったいどういうことなのだろうか。よくよく考えてみると、この言葉は日本語として正確に使っていないような気もする。まあどうでもいいことだが。」

「すみませんね。昨日真弓がどこまで話したのか聞いていたんです。それによって今日はどこを案内するか決めようと思ってましたから」  
深雪はそこまで言うのと、横目で真弓を窺った。真弓は眉ひとつ動かさずに沈黙している。

「智美は、悟くんのお姉ちゃんです。私たちとも仲が良かったんですが……」

深雪はそこで口ごもる。もう一度、横目で真弓を確認すると決心したように大貴に視線を向けた。

「三年前、事故で亡くなりました」

「三年前？」

大貴が繰り返すと、深雪は俯くようにして頷いた。

そういえば、三年前この村で死亡事故があったのを思い出した。町でこの村について調べていたときに発見したことだ。確か足を滑らせたの単純な落下事故だと記憶している。新聞記事でもそれほど大きく扱われず、見つけたのも偶然なぐらいだ。だが、その事故のせいで事業を一時停止せざるを得なかったらしい。

「今日はその現場にもご案内します。三島さんの特集にも参考になると思いまし、別の面もよく見てほしいと思っておりますから」

「別の面……」

さっきの表がどうと言っていたことだろうか、深雪の俯いた表情を見る限りでは、あまり気分のいい話ではなさそうだ。真弓は興味なさそうに湯飲みからお茶を啜っている。どうやら真弓から感じる冷たさは性格のようだ。大貴はほっと胸をなでおろした。

「しかし、皆さん弟がいるんですね。二人姉弟ですか？」

「ええ。でも、村全体から見るとそれほど珍しくありませんよ。むしろ人数が少ないことが珍しいですね。田舎ですから、多くの家が四人五人姉弟なんです」

「言い伝えがあります」

それまで沈黙を守っていた真弓が口を開いた。

「この村に住むものは、必ず男と女最低一人ずつ生まなくてはいけない。そういう言い伝えが」

「それは……」

生贄のためなのだろう。子孫を残すために作った掟の一つ。それが今も語り継がれている。

過去から語り継がれていることは、大貴もいくつか知っている。北に頭を向けて寝てはいけなとか、葬式から帰ったら塩をまくんだ。多くは一般的に知れ渡り、すでに生活の一部として溶け込んでしまっている。意味も知らずに実行している人もいるかもしれない。

だけど、語りつかれていることにはやっぱり意味があり、その意味を知るだけでその行動の重さを知ることになる。

子孫を残して、この村は復讐を果たそうとしているのだろうか。それを考えると、大貴の全身に再び悪寒が走る。今この瞬間に背後からナイフを突きつけられるかもしれない。死の謀略を巡らしているのかもしれない。非現実的な考えであるが、非現実的なことが発生したこの地。それを思うと、決して考えすぎではない。大貴は

震えだそうとする体を、両手でぐっと抑えつけた。

「どうしましたか？」

深雪が心配そうに眉をしかめている。

「いえ……」

深雪の顔を見ていると、ほっと心が安らぐ。ただ純粹に大貴を心配しているその顔に負の感情は見られない。昨夜と今、自分が感じている恐怖がただの取り越し苦労に感じてしまう。考えすぎだろう。この村の過去の歴史があまりに重いから、それだけ誤った方向に想像を巡らせてしまうのだ。昨日見た真弓の瞳は、何かの気のせいだろう。

「…嫌な夢を見てしまって、そんなことより出発しましょう。愛さんの定食屋はこの近くなんですか」

「それなんですけど……」

大貴は腰を上げようとして止めた。深雪は言いづらそうに口をすぼめている。見ると、真弓も眉に皺を寄せて考え込むような顔つきになっていた。二人からは戸惑いの気配が流れている。

「どうかしたんですか？」

状況が飲み込めず、二人の顔を見比べていると、深雪が重い口を開いた。

「実は、愛が行方不明になっているんです」

## 12 大貴く定食屋く

「いらっしやいませ」

赤い暖簾。そこには「アシメ」の三文字が書かれていた。定食屋にしては変わった名前だな、と大貴は感じた。

四人掛けの机が三つ、二人掛けの机が五つ並び、カウンター席が六つある。家族で経営していると言っていたが、これが大きいのか小さいのか大貴には判別できなかった。少し昼には早い時間でもあり、中に客は三人しかいなかった。深雪の話では夕方が一番混むらしい。

入ってすぐ声をかけてくれたのは、どうやら愛の父親のようだ。こげ茶に染まった顔つきは遅しく、村の男という感じがした。どうやら愛の母親のほうがハーフなのだろう。とてもじゃないが異国の血が混じっているように見えない。深雪が話したように、愛の行方不明を案じているようには見えない。どこから見ても日常の風景であり、行方不明という非日常は影も形も現れていなかった。

「おお、いらっしやい。深雪ちゃん」

「おじちゃん。私はいつものね」

「あいよ。兄さんは決まったら教えてくんな」

そう言うと、カウンターの前に消えていった。中からは肉の焼けるいいにおいが漂ってくる。深雪に促されるまま、大貴は向かい合わせに座った。

「愛さんが行方不明？」

身を乗り出した衝撃で湯呑みのお茶がこぼれた。それにも気付かず、大貴は深雪の肩をがくがくとゆする。

「いつですか？ 誘拐ですか？ 警察には連絡したんですか？」

「大貴さん、落ち着いてください」

「落ち着けませんよ。なんでそんな落ち着いてられるんですか。行方不明ってこの村で行方不明って何ですか」

「静かにしてください」

がつんと甲高い音が響いた。それと同時に冷え冷えと耳に残る声。真弓が正座をしたまま大貴を睨んでいる。最初の音は卓袱台と湯呑みの接触した音だと気付くのにはしばらくかった。

「愛は平気ですよ」

「平気？ どうして」

「とりあえず深雪の肩を離してあげてください」

はっとして大貴は深雪から手を離れた。湯呑みをこぼしたことに気付き、すみません、と言ってハンカチを取り出しお茶を拭いた。

「よくあるんですよ」

真弓が呆れたように目を細めた。

「よくある？」

「はい。失踪癖とでも言うのか、愛の性癖のひとつです。ふらっといなくなるときがありまして。だからじきに現れます。気にするだけ無駄ですよ」

「私たちも最初のころは大騒ぎしたんですけど、もうなれっこです。苦笑気味に深雪が笑みを作った。頬にできたえくぼがやけに弱い。しい。」

「でも、しかし」

二人の言葉を聞いても大貴はなかなか納得できなかった。二人の顔には心配どころか、またか、とでも言わんばかりの表情をしている。それこそが愛が無事である何よりの証拠でもあるのだが、やはり大貴の不安は拭われない。

「なら、愛の定食屋に行きましょうよ」

と深雪がことさら明るい声で大貴に言った。

もともとその予定だったが、愛がいなければそこに行く理由はそれほどない。愛に誘われ、愛がいるからこそ意味があったのだ。今となってはその辺の定食屋よりも、この村の目玉ともとれる料理を

提供してくれる店に行ったほうがずっと取材になる。

「愛の両親に会ってみてくださいよ。そうすれば、安心するんじゃないですか？」

「安心？」

「ほんとによくあることなんですから」

深雪は形のいい顎に人差し指をあて、子供をなだめるような瞳を向けてくる。

確かに家族が心配していなければ大貴が心配することもないだろう。大貴は部外者なんてものじゃない。部外者という枠組みにすら入れてもらえないかもしれないくらいだ。それに、この村の中で行方不明ならじきに見つかるだろうし、昨日の愛が言っていたように危険なことなんてないのではないだろうか。

「じゃあ、はい、わかりました」

渋々ながら、大貴は腰を上げた。

「じゃあ、トンカツ定食で」

メニューを見て最初に目にはいったものに決めた。暖簾の中から威勢のいい返事が聞こえた。

ほどなくして料理は運ばれてきた。深雪のいつものというのは野菜炒め定食のようだ。

「兄さんが町から来たっていう人かい？」

「はい。三島大貴です」

「兄ちゃんもつと肉食わな。こんなほそちい体じゃあもたねえだろ」

大きく口を開けて豪快に笑うその姿は、ちつとも愛の面影が見えなかったが、町にはない温かさが嫌ではなかった。

「ところでよお、深雪ちゃん。うちの愛を知らないか？ またいなくなっちゃったよ」

「昨日の夜、大貴さんと祠で愛に会ったのが最後です。帰りが途中



まで一緒だったんですが、それからどこに行ったのかは」

「まったく、今日はお客が少なえからいいものを。見つけたらすぐ帰ってくるように言っといてくれな」

そう言うのと再び暖簾の奥に消えた。

「ねっ大丈夫でしょ」

深雪が片目を瞑って見せた。少し下手だが可愛らしいウインクだ。  
「そうみたいだね」

大貴もつられて笑顔を作る。親も心配しないのは少しだけ寂しい気もするが、それはそれぞれの家庭の事情だろう。その家庭の気質もあるし、住んでいる環境にもよる。町でも娘が帰ってこないということで大騒ぎする家もあるが、一日二日家を空けることなど当たり前、という家庭も存在する。だからドライというわけでもない。やはり子を心配しない親なんていないのだから。

そう理性でわかっていても、しこりのように何かがひつかかっている。これはきっと個人的な感情だろう。もらえるはずのプレゼントがもらえなかったときのような気持ちだ。

「いつもこんなことがあるんですか？」

「しょっちゅうつてわけじゃないですけど、たまにあるんですよ。次の日の約束すっぱかして失踪しちゃうときも。前にみんなとの旅行まですっぱかしたことがあるんですよ」

それを考えれば、今日大貴が来ることなんて愛の足を止める要因にはならないだろう。愛としても商売のために社交辞令として言うたにすぎないし、あの一言で大貴が来るという保障すらない。

「残念でしたね」

トンカツを口に入れたまま顔を上げると、深雪が口の端をあげていたずらっぽく微笑んでいた。

「愛に会いたかったんですね」

図星だが、大貴はただひたすら口を動かし続けた。黙っていれば認めたことになるが、口がいつぱいだから喋れないという演技をして。ただし、顔色までは自信がもてなかった。深雪がにっこりと微

笑み続けているのを見ると、どうやら俳優にはなれそうもない。少なくなつた口にまた隙間なく料理を詰め込んだ。

「深雪さん。来てたんすね」

「あら、勝也くん」

暖簾の向こうから顔を出したのは短髪で長身の青年。先ほど出てきた父親をいくらか若くすると、ちょうどこんな感じになるのではないだろうか。父親も勝也も平均よりもはるかに背が高く、勝也にいたってはどこか大人びた外見をしているのに、愛は何故あんなにも幼くなってしまったのだろうか。

「三島さんですね、勝也つす」

前掛けを外しながらこちらに近付いてきた。大貴も軽く挨拶を交わした。

「昨日はあまり話せなかつたつすね。でも姉とは会つたそうで」

「昨日、沼で偶然ね」

「ああ、なるほど」

勝也は納得したように頷くと、近くにあつたイスを引き寄せ腰かけた。仕事はいいのだろうかとも思ったが、大貴たち以外はすでに完食し、店の隅においてあるテレビに見入っている。どうやら今日はよく晴れるそうだ。

「そしたら姉と最後に会つたのはお二人つすね。何か言つてなかつたつすか」

「いや、特には。ここに食べにきなさいとは言われたよ」

「ああ、味どうつすか。この村のもんばつか使つてゐるんすよ」

真弓の料理を食べているときも感じたことだが、この料理はやけに大貴の口にあう。どんなにいい食材を使つていても、本人の口に合わないことはよくあることだ。一口目がどれだけおいしくても、二口目三口目も同じように感じられるとは限らない。郷土料理と言うと、やはりそれはその地方の味付けが使われる。他との交流が少なければなおさらそれは色濃く現れる。だが、この料理を食べていると、どこか町の味に近いような錯覚もおきる。町にある定食屋

を数段階レベルアップさせるとちょうどこんな感じになるのではないだろうか。言葉は悪いが、ありふれた味ともいえる。決して悪い味ではないが、村特有という疑問を覚える。

それでも大貴は笑顔で頷き最後のトンカツを頬張った。

勝也も満足そうに頷き、何かを話そうと口を開いたが、暖簾の中から野太い怒声が飛んできた。小さく舌打ちすると、勝也は中に向かって返事をし、席を立った。

「じゃあ、ゆっくりしてってください」

そう言つと、何やら大声で叫びながら暖簾の奥へと消えてった。

「全然普通ですね」

あまりにも普通すぎる気もするが、それは個人的な希望なのかもしれない。たぶん、偏見も混じっているのだろう。田舎はいつも家族一緒にいるみたいなやつだ。よくわかってから心配もする必要があるということだろう。そして、自分はよく知らないから無用な心配をする。

「安心できましたか？」

「はい。心配かけました」

これは心配かけたというよりも迷惑をかけただな。そんなことを思ったが訂正しないでよい。訂正する必要もないだろう。細かい。

「これからですが、何か見たい場所がありますか？」

すでに料理を食べ終えた深雪は食後のお茶を手に持っていた。勝也が持つてきてくれていたようだ。大貴の前にもひとつ置いてある。顔に似合わず、気が利いている。

「今日は歴史などではなく、今のこの村を見てみたいですね」

本当は『智美』について一番興味を持っているのだが、あまりがつくように聞くのもよくないだろう。深雪にしてみれば身近な人が死んでしまったのだ。あまり根掘り葉掘り聞かれても気分のいいものではない。言わなくても案内してくれるのならば、なおさらだ。「ですので、公園とか、病院とかそういったところを見てみたいで

す」

「じゃあ、お散歩気分で村を回ってみましょう」

嬉々として深雪は話す。知らない場所を回るわけでもないのに、実に楽しそうだ。

「楽しそうですね」

つつい口を突いた。深雪ははつとして口を抑え、申し訳なさそうに肩を竦めた。

「すみません。自分の村ですから、興味を持ってくださるのは嬉しいんです」

歩き回ることには喜びを見出したのではなく、その行動要因に喜びを見出していたのか。なんとなくだが、深雪の気持ちが変わる気がした。自分の故郷に興味を持ってくれるとやっぱり嬉しいだろう。

「それに、あとどれぐらい見ていられるかも、わかりませんから」  
「ああ、そういえば」

深雪は顔を俯かせた。自然と雰囲気重いものが混じる。

再開発事業。内容はまだ伝わっていないが、まず村民のためにはならないだろう。この国にある無駄な公共事業。もしくは、誰にも迷惑がかからない。という名目で行われるゴミ処理施設の設計だろうか。どちらにせよ、村民の言葉など雀の涙ほども気にしているかどうか。この村の景観が失われるのも時間の問題だろう。深雪が悲しがるのも無理はない。

「でも、大丈夫ですよ。わたし、平気ですから」

空元気のなにもでもないが、深雪は顔いっぱい笑顔を貼り付けた。それにつられて大貴も笑った。大貴が考えている以上に複雑な思惑が渦を巻いているのだろう。深雪が何を考えているのか多少はわかるつもりだ。だからこそ、今は何も追及せず深雪に任せよう。「しっかり目に焼き付けますよ。この仕事、ほんとに楽しみにしてましたから」

今度はこちらが安心させてあげます。と言おうかと思ったが、さすがにそれはきざすぎるので止めておいた。

深雪は頬にえくぼを作ると恥ずかしそうに微笑んだ。ちょうどテレビの番組が変わる。それまでの天気予報から沈痛な面持ちのキャスターがニュースを語る。ちょうどいいころあいだろう。大貴は残りのお茶を一気に流し込み視線を走らせ勝也を探した。だが、勝也は暖簾の奥から姿を見せようとしなない。

ふと、愛が前掛けをつけている姿が目につかんだ。あのとびっきりの笑顔を見るつもりでいたのに。そう考えると、やはり胸にしこりは残っていた。

「平気ですよ。そろそろ行きましょう」

そう言うのと深雪は伝票の横に二人分の料金を置いて、さつさと席を立ててしまった。大貴も慌てて席を立つ。男と女なのだから自分が払うべきでは、勝手に出て行ってもいいのか、など言いたいことがいくつもあったが、大貴はさつさと店を出て行こうとする深雪の後を追うのが精一杯だった。ゆえに、ニュースの声など気にもかけていなかった。

大貴と深雪が店を出て行った後、暖簾の奥から勝也が顔を出した。眉間に幾重にも皺がよったその顔からは焦燥感が溢れている。その目はテレビのキャスターをじっと見据えて離れなかった。

「……一旦停止していたものの、再び事業を開始することになりました。すでに現地には数人が派遣されており、早ければ明日にでも機材を運び込む準備をするもようです」

### 13 大貴く吐露く

深雪の横をゆったりとした速度で歩いている。どちらがどちらの速度に合わせているわけではないが、二人とも普段よりゆっくり歩いているように感じられた。深雪の小さい鼻歌が妙に耳に残っている。聞いたことが無い曲だ。

代金を払う、と店を出てから強く深雪に申し出たが、深雪はそれをやんわりと拒絶した。自分が案内しているのだから当然だ、とも言ったが、それでも大貴は納得しなかった。なにより、ここでの出費は経費でまかなわれることになっている。そのことを伝えると、深雪は嬉しそうに手を合わせ、

「じゃあ今日は食べ歩きができますね」

と言つてにつこりと微笑んだ。なんとなくそれで納得させられてしまい、大貴は思わず頷いた。これが狙いだっただのか、とも思ったが、口に出さないでいた。もともと自分が出すつもりでいたのだから、その額が増えようとさして変わりない。やはり、経費で落とすのだから。

しばらく住宅街を歩いている。町に比べると、それぞれの家が大きく、道幅も広い。今は三十センチの幅で家が建つてしまう時代だ。それを考えると、少し贅沢な土地の使い方にも思えてくる。もちろん、他の面で不便なのだから仕方ないのだが。

木造の平屋もあれば、二階建ての鉄筋コンクリートの家もある。設計した人間が誰なのか疑いたくなるほどの、ひどく独創的な家もあった。昨日は薄闇の中であつたためしつかりと判別できていなかったが、こうして見ると、それぞれがちぐはぐな印象を受ける。統一感がないと言えはいいのだろうか。大抵、家を建てる時は、それぞれに隣接する家は似たような造りになるはずだ。同じ業者が設計しているのだから当然と言えば当然だろう。しかし、ここは同じ造りの家がほとんどない。古いから仕方ないと言うわけではなく、最近

建てられた家も多いように感じる。ここだけ見ていると、とても町から三時間も離れた場所にある村とは考えられない。

それを深雪に伝えると、深雪は鼻歌を止めた。

「みんな好き勝手に家を建てちゃうんですね。不便ですけど、全く情報が入ってこないわけでもないの、町に似た家を建てようとする人も多いんです。だから、少しちぐはぐな感じになっちゃうんですよ」

「あれもですか」

大貴は町でもなかなか見かけることのできない、ひどく独創的な家を指差した。とりあえず不思議なことに、入り口がみつともある最近では珍しくも煙突がついているが、何故かまっすぐに上を向いていない。一回転し、煙突の口は下を向いている。あれでは煙がうまく外に排出されない。深雪は思考の沈黙なのか、絶句の沈黙なのか、とにかく困惑しているのは間違いないだろう。表情も引き攣っている。

「あれも、町からの情報ですか」

「あれは……忘れてください」

がつくりと頂垂れるように深雪が呟いた。いくらなんでもあんな家が町に林立しているとは思えないようだ。ほっとしたような、それでいて、そういった勘違いを期待していた自分に少し驚いた。

「あれはあれで……」

一旦言葉を止め、頭の中で言葉を選んだ。

「おもしろいんですけどね」

「まさか、大貴さんの家はあんな……」

「違います」

狙ったつもりはなかったが、うまくはまった突っ込みに深雪が楽しそうに笑う。五月の陽気のような笑い方だな、と大貴は思った。

「今は誰もが右にならえ。それを頭の片隅では嫌だと思いつながら、一番心地よく感じるのも事実。それを思えば、ここの家がいろんな形をしているのは、好感が持てますよ。あの家も、まあ悪くないと

思えます」

「それは何かの記事の引用ですか？」

「いえ、本心ですよ」

「それはそれは……」

深雪は不意に言葉を止めた。大貴が顔を向ける。

「おもしろいですね」

大貴が顔を向けた瞬間を狙って、深雪は答えた。しばらく沈黙が流れてから、二人同時に嘖き出した。笑い声が木霊するんじゃないかと思えるぐらいに、大声で。何が楽しいのか、さっぱりわからないが、それでも楽しかった。空気に酔う、と言う言葉もあるぐらいだ。この雨乞いの村の空気に酔っているのかもしれない。それとも、深雪が醸し出す雰囲気だろうか。

そのまましばらく歩いてみると、だんだんと通りも色彩豊かになり、他の人の話し声も聞こえるようになってきた。繁華街？ が近付いてきているのがわかる。

「繁華街と言っても、」

前を向いたまま、深雪は言った。

「ただの商店街ですけどね。そこのお店の人達が繁華街って言い張るので、そういうことにしているんです」

「気にしませんよ」

ちよつとした冗談だろう。魚屋の店主がお釣りの桁を変えて受け答えるようなものだ。にこやかに笑って流せばいい。そのことを記事にしなかったところで批判が出るとも思えない。それになにより、テーマからしてこのような細かい些事に触れることもないだろう。

「しかし、気持ちがいいですね」

深雪からすれば、今こうして歩いているのも日常の延長なのかもしれない。ただそこに、大貴という存在が紛れ込んだだけのこと。代わり映えない日常のページ。しかし、大貴からすれば、このように町の喧騒から離れることがすでに日常から切り離されている。



非日常とは、なにも異常事態のみを指す言葉ではない。こうして穏やかな時間の流れを感じ取り、その流れに身を任す。こうして自然が多く、心にゆとりのできることも、それは非日常なのではないだろうか。この非日常こそが、元々は日常だったのではないだろうか。「いいところですよ。この村は」

深雪は両手を組んで大きく伸びをした。その反動で胸の前に流れていた髪の毛がふわりと舞った。

「町に行くと、なんでこの人達はこんなに急いでいるのかなって思っんです。みんなせかせかしちゃって、電車の時刻表だってゆっくり見られなかつたんですから」

「田舎から出てきた当初は、同じ考えでしたよ。目の前の光景がすごい勢いで変わっていっためまいを起こしたぐらいですから」

ですよ、と言つて深雪は足元の小石を蹴った。小石は斜めに飛び、脇の側溝に落ちた。

「それに自然が少ないんですよ。緑溢れる公園って文句がついてる場所に言つたんですけど、全然でした」

「この村と比べたら公園がかわいそうですよ」

「でも、なんででしょうね」

ふう、と小さく息を吐くと、深雪は視線を上に向けた。つられて大貴も見上げる。雲ひとつ無い、きれいな空だ。

「なんで、自然がほしいって言うのに、自然を壊そうとするんでしょうね」

それに、大貴は答えることができなかった。横目で深雪の表情を窺う。寂しそうな目をしているのがわかる。それでも、口元は綻んでいた。それが、大貴の胸の真ん中あたりを強くえぐった。

理由は簡単にわかる。お金のためだ。お金を稼ぎたいから、自然を壊す。無駄としか思えない事業を行い、自然を壊す。自然が少なくなると、みんなが自然を欲する。そうすれば、自然を増やすことが増やすことが商売になる。だから町に緑を増やそうとする。やっぱりそれもお金が欲しいからなのだ。

それを軽々しく言うことはできなかった。それ言ってしまうと、大貴自身その考えを持っていくかのように感じてしまう。その理屈がわかること。それだけで罪のように思えてしまう。たぶん、深雪はこんな考えを思いつきもしないだろう。自然を壊すこと。それを思いつくことがすでに異常なのだ。そう。この雨乞いの村では。この、被害者の村では。

「僕の夢は、土地を買って家を建てることなんです」

大貴は空を見上げながらぼんやりとした声を出した。妙に清清しい気持ちだった。頭で考えたことが口を突いているのではなく、まさらかな心に浮き出てきた文字を読み上げているような感じた。

「これから結婚したいとも思ってます。きっと家を買うのも、土地を買うのも十年は先のことだと思います。だから、家は4LDKぐらいいは欲しいなって考えているんですよ」

深雪は不思議そうな顔をしているが、何も言わずに耳を傾けてくれている。大貴は淡々と続けた。

「それって、僕の周りの人みんなが考えていることなんですよ。マイホームって、やっぱり誰にとっても夢なんです。そのために、みんないろいろ考えるんですよ。ここは駅から近いとか、ここは排気ガスがきついとか。その中でも、自然とか緑ってかなり重要な位置にあるんです。都会に近付けば近付くほど、自然と緑もなくなるのに、それでも近くに欲しいって思っちゃうんです」

大貴は自分が何を話しているのかよくわかっていなかった。心の中にもうひとつ口があるような気もする。何も考えていないはずなのに、それなのに紡がれていく言葉は尽きることをしらない。湧き水のように込み上げてくる。

「ある時に、ふっと思っただんです。公園を歩いているときだったかな。すごい緑の多い公園で、きれいな芝生があって、もし犬を飼ったら嫁と一緒に散歩するのもいいなって思っただですよ。それで、庭を作って一面芝生にするのも悪くないなって思っただ時に……」

大きく息を吸って、肩を落とした。落とした肩と一緒に、別の何

かが落ちていきそうな気がして、またぐつと胸を張って空を見上げた。視界の端に山の端が映る。鮮やかな緑、と誰かが表現するのをよく聞く。でも本当は違う。赤も茶も黄色もたつぷりの色が混じってはじめて”緑“になるのだ。

「そういえば、自分の土地に家を建てても、土地いっぱい木を植える人はいないな。誰か他人のために公園にする人はいないな。そう思ったんです。当たり前のことだ。土地を買ってなんで他人のことを考えるんだよ。本気でそう思いました。そう思ってから、すごい、虚しくなっただです。自分のことしか考えていないなって。確かに土地を買って家を建てないで木を植えるなんて、聞いたことのない話です。自分で考えた時も、突拍子もない話で笑っちゃいました」

大貴は力なく笑った。さっきの深雪の寂しげな表情と微笑。失われていくものを愁いているものの、自らの力の無さに自嘲する。そんな心情の深雪に自らの心情を吐露している大貴はどのように映るのだろうか。静聴している深雪は、今何を思っているのだろうか。「そうやって、当たり前だって考えることが、すでに駄目な気がするんです。土地を買って、公園を作って、緑を、自然を増やしてあげる。立派なことなのに、誰もやろうとしない。どこか他力本願で、自然を壊すことに憤慨しながら、自分は何もしようとしなない。ここにくるまで、なんとも思ってたのに、今、すごく……辛いです」

気がつけば、足が止まっていた。さっきまで清清しく感じていた雲ひとつ無い空も、今では虚しいだけ。何も無いその空は、大貴の無力を表しているようにも見えた。

顔を深雪に向けることができない。深雪の顔を見れば、そこには何がしかの答えがあるはずだ。大貴の心情に答える何かが。それを見るのが怖い。すべてを吐き出した今、大貴には何も残っていない。かすかなそよ風が、大貴には暴風にさえ感じる。

「……いいんじゃないですか？」

雲を切り裂くような澄んだ声。鼓膜を心地よくすぐり、脳に染み渡っていく。その声が深雪のものだとわかるのにしばらくかかった。

ゆっくり顔を上げた大貴の前には、穏やかな表情をした深雪がいた。

「私は、大貴さんの考えが間違つてると思いません。確かに自分で動こうとする人って、立派だと思います。すごいです。でも、動かない人はひどい人なんですか？ 何も考えない非情な人なんですか？ 何もしないことが罪なら、この世の中は容疑者だらけですよ。私だって、そうです」

また、深雪は寂しげな表情に微笑を貼り付けた。その裏に何があるのか、大貴には見当がつかない。それでも、きっと深雪はなにか重いものを背負って生きているのだろう。

「大貴さんみたいに考えられるのが、それだけです。すごい。そんな風に周りを見れるなんて、なかなかできません」

「でも、町にいたらこんな考えは一笑に付してしまいましたよ。こうやって直に村の空気に触れたから考えられたことです」

この村に来なければ、奪われる恐怖に晒され続けているこの村に来なければ、きっと考えられなかった。この感情は同情に近いのかもしれない。それは深雪たちにとって一番されたくないことではないだろうか。同情して、憐れんで、それでいいだろう。深雪たちがそれを望んでいるとは、とても思えない。そんな感情を吐露している大貴を、深雪は何故すごいと言えるのか、大貴には全くわからない。

「ここに来なければ、考えられなかった。きっとここを離れたら、この考えも無くしちゃうんじゃないかと思えます。その程度の考えなんです。被災地の写真を見て、悲しんで、涙を流して、でも日常に戻ればその感情を忘れてしまう。何度も忘れないと誓っても、すぐに霧散してしまう。それが、情けない」

「なら、」

深雪は大貴の背に回った。力をこめて大貴の背を押す。

「大貴さんは、できることをやってください。見つけてください。目前で形になって差し出されれば、きっと大貴さんにもわかるはずですよ」

「……だけど」

「もういいですよ」

大貴の言葉をぴしゃりと深雪は遮った。

「余計なことをいろいろ考えようとするから、結局何もできなくなってしまうんです。ですから、今は自分のお仕事のことを考えてください。大貴さんの仕事しだい、なにかが変わるかもしれないんですよ。それですごくいいことなんですから」

背中に回った深雪は大貴の背を押しながら駆け足になる。自然、大貴もそれにつられて駆け足となる。後ろを向きながら前に進むのは首が不自然になるが、その視界の端に深雪の笑顔が見えた。先ほどのまでの寂しげな表情に微笑ではない。そんな感情の鱗片すら窺えない。あるのはとびつきりの笑顔。

「……そうですね」

その笑顔を見たら、大貴の中にうずくまっていた何かが、にやりと姿を消した。残ったのはただ清しいだけの青。そしてとびつきりの笑顔。

ふっと浮かんだその笑顔。不思議とその笑顔が大貴に引つかかった。何かが違うような。収まるべきところに収まっていないような。三角の枠を用意したはずなのに、四角の図形が浮かんできているような。

「と、深雪さん、ちょっと、歩きにくいです」

でも、すぐにその疑問はなりを潜めた。なんてことはない。考えるのはやめよう。とにかく今はできること。それだけを考えよう。顔を前に戻した。大貴の顔も笑みが張り付いている。だが、とびつきりの笑顔を浮かべていたはずの深雪の顔に、笑みはない。前を向いた大貴がそれを知る術はない。深雪の表情を見たら大貴は何を

考えたのだろうか。

複雑そうに眉をひそめ、窺うような視線を大貴の背中に送っている。その表情はいくつもの感情を表しているように思えた。

疑惑、不審、尊敬、後悔、憤怒……どれもが正解であり、どれもが間違っているような気もする。どれかひとつに限定することはできない表情。大貴と出会った時にみせた暗い瞳。それすらも窺える。つまり、深雪は混乱しているのだ。どれが自分の感情であるのかもわかっていない。

何が深雪を混乱させているのかは、わからない。だが、この村で唯一のイレギュラー。大貴が関わっていることに疑いはないだろう。回りだした歯車は、止まることはない。だが、そこに異物が放り込まれれば、歯車はいともたやすく動きを変えるだろう。

歯車は、僅かに動きを変えた。

## 14 大貴く商店街く

繁華街と言ったが、なるほど、確かにただの商店街といった方がいいかもしれない。左右には、魚屋、八百屋、肉屋。ドラマでしか見たことのないような店舗が軒を連ねている。それでも、人の数はそれまで訪れたどこよりも多かった。油断すれば袖が触れ合ってしまう程度には。雨乞いの村に対して過大な偏見を持っていたわけではない。かといって、雨乞いの村の基本的なデータは頭に入っている。人口から考えると、店を営業するのも難しいように感じられたが、見る限りではそんな心配はなさそうだ。

「人が多いですね」

と大貴は率直な意見を述べた。ここが村だから、というわけではなく、普通に賑わっているような感じがした。昨日深雪がコンビニやファミレスもあると言っていたが、これなら納得ができる。ここまでの道のりで人に会わなかったことに疑問を感じるほどだ。

「愛さんの定食屋があんなところにあるのが不思議に思えますよ」

「あそこはあれで賑わってるんですよ。今日はお客さんが少なかったようですが、赤字経営ではないみたいです。味を気に入って毎日食べに来る人もいるんですから」

「確かにおいしかったです。たぶん、町でもつうじるんじゃないかな」

大貴が答えると、深雪は誇らしそうに胸を張った。

「あの店名の由来はなんなんですか？ アシメだなんて」

「そうですね、私も気になってるんですけどよくわからないんです。愛のお父さんが決めたらしいんですが」

「アシメだと、髪型のことなんですけどね」

町でたまに見かける髪型だ。アシメトリーの略であり、左右非対称を意味する。部分的に長さを変えたり、全体的に変えたりとバリエーションは様々だが、とりあえず飲食店の店名で使用しているの

は見たことがなかった。もしかしたら別の意味があるのかもしれないが、大貴が知っているのはそれだけだ。

「聞いたことあります。変わった髪形ですよ。左右で頭の重さを変えるなんて、ふらついたりしないんでしょうか」

「……………」

髪の毛を重りのように話す深雪が少しおもしろかったのと、大貴の前髪がまさしくアシメトリーになっていることに気付いていない深雪がおもしろく、大貴は声を殺して笑った。深雪自身、髪型に気を遣っているが、やはりそこまで他人の視線を気にしていないのだろう。見せる相手といえば、村の住人。いわゆる家族のようなものだ。張り切って髪型を作ることもない。

「どうしたんですか？」

「いえ、この村の人口はどれぐらいですか？」

大貴は無理やり話をこまかした。かといって深雪はそれに気付いた様子はない。

「町の資料だと千人程度だと見知っていたんですが、どうもこの状況をみると、それが半信半疑です」

生贄のことも載っていなかったし、と続けようと思ったが、それは口を閉ざした。

「正確にはわかりませんが」

と深雪は前置きをした。

「千人では足りないと思います。もうご存知ですから隠しませんが、この雨乞いの村は生贄の村です。私たちの先人が生きていくためにはやはり人数が必要でした。幸い、この周辺は食べるものに困ることはありませんでしたので、必要なのは労働力です。そのため、この村では人数を増やす政策が実施されました」

「政策だなんて、なんだか国のようですね」

「大貴さんは隔離されたこの状況をどうお考えですか」

「……………」 辛い現状だなと

「そうではありません」



深雪は力なく首を振る。

「いくら町から離れているといっても、同じ国内ですよ。それなのに、どうしてここまでこの村の情報が外に漏れていないか、わかりませんか？ 歴史はともかくとしてです。大貴さんが感じたように、人口すらも間違った情報が流れています。それがどうしてかわかりませんか」

言われてみるとそうだ。いくら不便だからといって、町から離れているからといって、これほどまでに情報に食い違いがあるのはおかしい。大貴も違和は感じていた。町にあった資料とは雰囲気が違うな、と。

紙の上の印象と肌で感じる印象が異なるのは当然だから。そう考えて気にしていなかったのだろうか。それでも、よくよく考えてみるとこれは異常だ。

雨乞いの村の情報が外に漏れない。町の情報と差異が生じている。これだけならまだ考えられる。町の情報が更新されなければ、現在と過去が一致しないのは当然。過去において真実の情報であっても、現在と一致しなくてもなんら不思議はない。

だから、この場合において不自然なのは、村の情報が流れていないのに、町の情報はこの村に流れていることだ。まだしっかりと村を探索していないためはつきりとは言えないが、ところどころに村としては不釣り合いなものがある。愛の定食屋にしてもそうだ。どこか町を連想させるような味があった。かといって、これもそんな感じがしたというレベル。あのメニューだったからそんな気がしたのかもしれない。これだけでそうだと判断するのは牽強附会だろう。

だが、この村の住居は、村に似つかわしくない。町との交流を絶っている、確か愛が口を滑らせていた。ならば何故これほどまでに町に近い建物が存在するのか。

大貴の表情から察したのだろうか。深雪は真面目な顔つきで口を開いた。

「この村は、意図的に情報の漏洩を最小限に抑えている。そして、

町に対して誤った情報を流しているのです」

「……………」

「それでいて、町の情報は逐一収集しようとしています」

「何のために、そんなことを？ 情報の漏洩を防ぐのは まあ  
納得できます」

おそらくは、雨乞いの村の歴史を外に流さないため。誤った情報を流すのも、隠蔽のためだろう。

「ですが、情報を集めるのにどんな理由があるのですか？ 下手に接触すれば、それだけこの村の情報が向こうに流れやすくなる」

それならば、殻に閉じこもっていたほうがずっと安全だ。

「なんだか、これでは」

「深雪ちゃん」

弱弱しいが、はつきりとした声が大貴の言葉を遮った。

声は駄菓子屋の奥からした。ずっと昔から経営しているのか、店の雰囲気が全体的に古ぼけている。見る限り店内は整理されているが、どことなく埃っぽい印象を受けた。

声の主は店の一番奥。畳の上に正座したおばあさんの口から発せられたようだ。顔には深い皺が刻まれ生きてきた年月が長いことを物語っている。一体いつからそこにいたのか、背景に同化してしまうのではないかと思うぐらい、そこにいることがあまりにも自然だ。駄菓子屋に老婆。それは、大貴が抱いていた村のワンシーン。

「どうしたんだい？ 暗い顔をしているじゃないかい」

深い皺によって瞼が塞がっているようにも見えたが、どうやらはつきりと見えているようだ。その声も、年不相応に若々しい。

「そんなことないよ。梅おばあちゃん」

「そうかい？ あたしははつきり愛のことで悩んでいるかと思ったよ」

「ご存知なんですか？」

思わず口を出した。大貴の声を聞くと、ゆっくりとした動作で梅は顔を大貴に向けた。

「ああ、あんたが町からの人かい。なかなか男前じゃないか」

けったいな髪をしているがね、と梅は微笑んだように見えた。

「愛がまたどこかに行ってしまったんだろ？ なに、いつものことだから心配するでないよ。すぐにひよっこり現れるさ」

「そう…ですか」

「昨日、私たちと一緒に沼に行ってたんだけど、それからわかんなくなっちゃったの」

「あの子もまめだねえ。愛に会ったら伝えといてくれるかい。すまないことをしたねって」

「愛はそんなこと気にしてないよ」

深雪は呆れるような笑顔をみせた。

「愛が沼に行くのは、ただ自分のおばあちゃんを尊敬してるからじゃないかな。愛はそんなこと言わないけど」

「若い者がいなくなるのは寂しいことだよ」

表情を変えずに梅は脈絡のないことを言った。それについていけず、大貴は頭に疑問符を浮かべた。

「年寄りは見送られるのが一番」

皺だらけの顔に寂しげな色がかかったようにも感じた。どちらに話しかけているのかもわからない。独り言のようにも感じる。

「見取る気なんて、さらさらないからね」

深雪に視線を向けると、何やら難しい顔をしている。深雪もうまく理解できないのだろうか。

その時、深雪の口が動いた。ともすれば見逃してしまうほどの小さな動き。そこから声は発せられなかったが、その口の動き。それだけで、大貴は深雪が何を言おうとしたのか読み取ることができてしまった。

見なければよかったかもしれない。たいした意味があった言葉では無いのかもしれない。大貴の勘違いなのかもしれない。でも、大貴には確信を持って理解できてしまった。何故その言葉を発するのは理解できないけれど、深雪の表情には、それ以上に適した言葉

が見つからなかった。

最後に深雪がにつこり笑って、梅に背中を向けた。大貴もその背中に続く。

「梅おばあちゃんはすっごい物知りなんです。いつもあそこに座ってるだけなのに、この村のことなんでも知ってるんですよ」

「……そうですか」

大貴は曖昧に頷くだけ。大貴の頭の中には、さっきの深雪の言葉が繰り返されていた。

「何を考えてるんですか？」

深雪が大貴の顔を覗き込んでくる。

大貴は尋ねようか尋ねまいか、一瞬迷い視線をさまよわせた。ここでこれを尋ねてはいけないような気がする。口に出さず、言葉を形作るにとどめた深雪の所作からそれは明らかだ。知ってはいけなかったのかもしれない。それでも、今の深雪の穏やかな表情は、さっきの言葉を否定する。あのような言葉を口にして、そのように穏やかな表情でいられるはずがない。それならば、尋ねないほうがよい。尋ねたとしても、笑われるか複雑な表情を見ることになるだけだ。大貴はそう結論付けた。だが、深雪に限らず、この村は何かを隠している。梅によって中断されてしまったが、深雪の言葉を聞く限りでは。

「……いや、さっきの村の話を少し考えていたんです。ですが、腰が折れてしまったなって思っで。後でまた話してもらえますか」

「そうでしたね。すみません。ええとどこからでしたっけ」

「いえ、今はゆっくり村を見て回ります。とりあえず、」

大貴はある一軒の店を指差した。お団子のようなものが網の上に置かれている。普通の団子でないことは確かだ。緑色をしている。どうやらこの村でしか売られていないもののようなのだ。

「あれを、食べてみたいです」

大貴の苦笑した顔を見て、深雪は驚いた顔をし、そしてにつこりと笑った。

「うちの名物の一つですよ。すっごくおいしいんですから」

そう言って、大貴の腕を引っ張るようにして店に向かった。

この場である話の続きをされても、きっと理解することはできないだろう。深雪の言葉が気になって、脳を揺さぶられている。二つのことを思考するには、脳みそが足りない。適度に噛み砕いて、自分なりに咀嚼しないと何かを考えることはできない。

でも、全ての話が終わったとき、いったい何が起こるのだろうか。真弓の話を聞いた段階では、この村は復讐を心に誓っていると考えていた。自分は狙われているのだと。だけど、村の様子を見る限り、自分は歓迎されているようにも感じる。それが演技とはとても思えないが思えない。とてもじゃないが、復讐を考えているようにも思えない。

それに、深雪の言葉。梅の言葉に対する解答。

確かに、大貴は見た。深雪の口が、四つの文字を形作るのを。

「ごめんね」

## 15 悟く墓

ここに来ると嫌でも記憶が蘇ってくる。三年前のこと。あの日の姉の姿が今も目の前に現れてくるようだ。実際に何度も幻をみた。その中で、いつもいつも姉を失う。

周辺を木々で囲まれた荒れた地。半分削り取られたような丘、その前には悟の背丈ほどの岩。周りには誰もいない。悟ただひとりだ。足元には悟が摘んできた花、その隣には線香が置かれている。細く白い煙が立ち上っているがすでに半分が白い灰に変わっていた。指先は土で汚れている。だけどその土を拭うつもりはない。いつものことだがその土を拭いたくはなかった。馬鹿だと思われるかもしれないが。

姉はきつとこう言うだろう。誰も悪くない、ただ運が悪かったただけだ。きつとそう言うて形のいい眉を下げて苦笑するだろう。子供の頃からそうだった。何をするにしても、いつも運が悪いと言っていた。それは後ろ向きでいつも親に注意されていたけれど、嫌いじやなかった。むしろもつと見ていたと思った。だからだろうか、いつも姉の前では失敗ばかりしていたように思う。わざと躓いてみたり、わざとバケツの水を頭から被ってみたり、わざとスポンを後ろ前にはいたりもした。

いつもいつもその表情をしてくれたわけではなかったが、それでも何回かはその表情を見せてくれた。そして、運が悪かったのねと言ってくれた。姉は、世界のすべてだった。いつしか悟はそう考えていた。

それだからこそ、引つ込み思案な性格になってしまったのかも知れない。依存していたといってもいい。ただ単純になかなか親離れできない子供だったのだ。悟の場合、それが姉であっただけのこと。それを何度悔やんだらうか。もしも悟が姉の後ろに隠れるような子供でなかったら、きつとこんなことにはならなかったかもしれない。

ない。あの時、この役割を引き受けていたのが悟であつたら、ここに横たわったのは姉ではなかったかもしれない。それは悔やまれる。自分を何度情けなく思つただろうか、何度体を痛めつけただろうか、時を戻してくれと何度願つたことだろうか、そして、町のものを殺してやろうと、何度思つたことであろうか。姉を殺した要因のひとつに、悟は間違ひなく入っている。それは変えようのない真実だ。だが、直接手を下した人間は他にいる。他でもない、町の人間。この村の怨みの対象。それに、この村に住むものも怨みの対象だ。姉が殺されたにもかかわらず、何故町の計画に賛同するのか悟には理解できない。姉の死を仕方がないもの、許容されるべき死だとも考えているのか。あれほどの死に様を目にしといて、何故そんなことを口にできるのか。

これからしばらくして、ここに深雪が来る。悟にとって、姉の死の真相を教えてくれた人間。姉の無念を伝えてくれた人間。だが、この村の中で悟が最も怨んでいる人間だ。

赦さない。そう口にして、悟は小さく口ずさみ始めた。それは悲しげで寒々しい曲調だが、今の悟の表情にこれ以上ないぐらいはまっていた。意識しているわけではないだろうが。

ある歌詞で、悟は歌うのを止めた。ゆっくりと顔を上げると、天に向かつて、天に届けと願っているのか、小さくか細い声で囁いた。「おのが、つみ……」

## 16 大貴と暮る

「このクレープがおいしいんですよ」

商店街も終わりに差し掛かった頃だ。深雪が指差すのは映画館の横にでも隣接されていてそうなクレープ屋。色とりどりの外装がこの村には似ても似つかない。メニューもかなり多い。村特有の野菜クレープ等もあるが、町に置いてあるクレープ屋のメニューと大差がないようにも思える。

「おすすめは……聞くまでもありませんね」

これまでに大貴と深雪が食べたもの。団子、ゼンザイ（に似ている）せんべい（歯ごたえのみ楽しもう）ソフトクリーム（野菜味）蕎麦（言うまでもない）……とにかくこの村で収穫される野菜をふんだんに使用している。この味付けは当然だろうと考えていた。自然に囲まれたこの村でこの味付けを思い浮かばないほうがよほど不自然である。

はじめのほうは大貴も喜び勇んで注文していた。しかし、野菜はすべてにおいて万能ではない。うまくバランスがとれたものもあったが、多くは残念としか言いようがなかった。注文をとる店員が笑いをこらえそうになっている姿が不思議でならなかったが、もう理解できた。おそらく、この村で野菜味を注文する人は少ない、むしろ皆無なのではないだろうか。

「ええ、もちろんです」

そう言うのと深雪は再びクレープ屋の主人と談笑をはじめた。バナナチョコクレープと野菜クレープを頼んでいるのが風の流れて聞こえてくる。大貴は少し離れた位置でぼんやりと眺めることにした。これまで深雪が野菜味を注文しなかったこともそれを裏付ける。村をよく知るためと言って野菜味を勧めてくれたが、もしかしたら遠まわしな嫌がらせを受けているのかもしれない。

店の主人の視線が何度かこちらを向くことから、町のこと、もし



くは大貴のことを話しているように思える。想像した以上に人口が多いとはいえ、やはり深雪が知らない人は誰もいないようだ。この店に行っても親しげに声をかけられていた。

「ねえ」

大貴は突然背後から声をかけられ、思わず振り返った。だが声の主は見当たらない。左右を見たが、大貴に注意を向けているものは誰もいない。

「こつち」

その声は足元からした。視線を下げてみると、そこには十歳に届くか届かないかぐらいの少年が大貴を見上げていた。大貴の腰ぐらゐまでしかない少年は物珍しそうに大貴を見ている。快活そうな少年だ。

「町から来たの？」

「……うん、そうだよ。珍しいかな」

大貴は少年の目線に合わせるように屈んだ。少年の手にはお菓子の袋が握られている。中身は駄菓子のような。

「ねえ、町にはゲームがあるんでしょ。お店でできるって聞いたよ」

「そうだよ。ゲーム好き？」

「うん」

少年は子供らしく力いっぱい頷いたが、すぐにつまらなそうに目を伏せた。

「でも、ぼくゲームってよく知らないんだ。やったことないし……」

「そっか」

それも仕方がないことかもしれない。これだけ町から離れているのだ。ゲームはおるか、テレビがすべての家に備え付けられているかも怪しい。少なくとも、真弓のところでは見ることがなかった。

「じゃあいつもどんなことして遊んでるんだい」

大貴は顔に笑みを作って尋ねた。今にも泣き出しそうな少年は見るに耐えない。少年はきょとんとして大貴を見上げると、両手を広げて考えている。

「えつとね、かけっこでしょ、なわとびでしょ、てつぼうでしょ、おみせやさんごっこでしょ」

聞きながら大貴は微笑んでいた。自分が幼い時はそんな遊びばかりしていた気がする。確かにゲームをしていた記憶もあるが、それ以上に走り回っている記憶のほうが多かった。いつもいつも飽きもせずと同じ遊びを繰り返し、それでもひたすらに楽しかった。あのときに流していた汗は今よりもずっと気持ちよかった。シャツが体に張り付いている感触を心地よいと感じられたのもあの時期だけ。

「あとね、おうた」

「うた？」

「うん。おうた遊び」

男の子の遊びにしては珍しいなと大貴は思った。この少年には走り回っているのが似合っているような気もする。

「へえ、どんな歌を歌うんだい」

「先生がおしえてくれるおうたなんだ。ぼくすつごく上手なんだよ」と言つて少年は得意げに手を広げた。

「ずっと前からあるおうたなんだって。先生が言つてた」

民謡か何かなのだろうか。かといつて少年に聞いたとしてもはつきりしないだろう。この村に古くから伝わっている歌なら興味深い。学校で教わっているのなら有名な歌なのだろう。

思案していると、少年が何かに反応するように後ろを振り返った。少し離れたところに少年と年代ぐらいの子が手を振っている。その子も手に袋を提げていた。

「たっちゃんだ。ぼく行くね。ばいばい」

少年は大貴に向かって手を振ると、一目散に走り去っていった。もう一人の子と一緒に颯爽と駆け出していくと、すぐに姿が見えなくなった。去り際に少年がある歌を口ずさんだ。その歌はひどく寂しげに聞こえたが、あれがその歌なのだろう。

両手にクレープを持った深雪が小走りでこちらに駆け寄ってきた。「すみません、遅くなっちゃって。どうぞ、野菜味です」

「ああ、どうも」

「店員さんが助かるって言っていましたよ。野菜味は村の人は飽きてなかなか頼んでくれませんから」

飽きているのか呆れているのか迷うところだ。これを記事にするときはどうすればいいだろうか。特集の主題から外れているとはいえ、嘘を書くことはできない。だが率直な意見を述べると、どうしても村の印象が悪くなってしまう。

「これで大体食べ尽くしましたね。でも、時間がかなり余っていました」

そう言った深雪のクレープは、すでに半分ほどに減っていた。これまでにかんりの量を食べていたが、やはり女の子は誰でも甘いものは別腹なのだろうか。みるみるうちにクレープの城が崩されていく。大貴も申し訳程度に野菜味にかじりついた。幸いにして、食べられる味だ。食べたい味ではないが。

「時間が余る分にはいいですよ。足りなくなるよりはずっと」

「そういうわけにもいかないんですけどね」

深雪は曖昧に濁すと、残りのクレープを一息に口に放り込んだ。「それにしても驚きました。今までのイメージが変わりましたよ。思っていたよりもずっといろいろなものがあるんですね」

「この村のいいところですよ。気に入りましたか？」

この質問に大貴は何も答えず、一度クレープに視線を移してから顔に笑みを貼り付けた。この反応になぜか深雪は満足したようににつこりと微笑んだ。

「そういえば、不思議ですね」

大貴は意図的に話題をそらした。手の中のクレープはいつこうに減る気配をみせない。たぶん、これから。深雪のクレープはすでに無くなっていた。

「同じ店が無いんですね。どの店も一軒しかない」

深雪と多くの店でいろいろなものを食べるのと同時に、多くの店をのぞいた。電気屋、魚屋、雑貨屋、コンビニ（儲かるのか？）、

梅がいた駄菓子屋。

どの店も一軒しかないのだ。魚屋は一軒だけ。そこ以外に魚屋はない。飲食店も洋食や和食といった区別はあるものの、和食が二軒あるということはなかった。もちろん、居酒屋も一軒しかなかった。町に暮らしている大貴からは考えられないことだ。場所によっては角を曲がるたびに居酒屋に出くわす。

「それにも理由があります。他の村を見たことありませんからよくわかりませんが、競争しないためです。みんなで持ちつ持たれつしないと商売なんてできませんから」

「それもそうですよね。そういえば深雪さんは畑仕事って言ってますが、何かお店をやってるんですか？」

「いいえ。さつき八百屋さんがありましたよね。そこのお店の野菜の多くはうちのなんです。それに他の飲食店で出しているのもそうです」

大貴は思わず苦笑した。決して間違っではないが、この村で飲食店というところか場違いな気がしたからだ。

「どうかしましたか？」

「いえ、続けてください」

「……まあそんなわけで、うちは作るだけです。商売の才能がないんですよね。でも、野菜はおいしいんですよ。絶対町の野菜なんかに負けませんから」

深雪は語気を強めて胸を張った。それまでの可憐な雰囲気から一変したその誇らしさは、大貴をどぎまぎさせるのには十分だ。深雪の迫力に圧倒され、視線をそらしながら曖昧に頷いた。大貴としては町の野菜に対してプライドは持っていないし、むしろ村の野菜のほうがおいしいと思っている。もしかしたら、野菜味を執拗なほどに勧めたのはこういう理由からなのだろうか。逆効果だと教えるべきかどうか迷うところだ。

「ところで、今はどこに向かっているんですか？ もうだいぶ商店街から離れてきましたけど」

さっきまでの活気はすでに無くなっていた。擦れ違ふ村民の数も減り、しだいに村の中心から遠ざかっているような印象を受ける。実際遠ざかっているのだろう。建物の数も極端に減り、わずかばかり土地が荒れはじめていた。

「……この村で、一番重要な場所です。きっと、大貴さんのお仕事に一番役に立つ場所だと思います」

先ほどとはうって変わって神妙な顔つきで深雪は言った。

「よく見てくださいね」

「一番重要な場所なんですか」

呟くように大貴は言う。

「でも、なんでそんな大事な場所がこんなところにあるんですか？ そんな場所なら村の中心にあるような気もするのですが」

「私たちにとつて一番重要な場所なんです。村民の多くは、あまり近付こうとしません」

「私たち？」

「その場所に着いたら、すべてお教えします。この村の秘密も、歴史も」

それきり深雪は黙り込んでしまった。おいそれと追求することもできず、大貴も口を閉ざした。二人並んで黙々と歩く。

周囲には何もなくなつた。建物や村民はもちろん、田畑ですら見えなくなっている。林とまではいかないが、木々が林立している。ほとんど手付かずの場所だ。足元は雑草が生い茂り、もはや道と呼んでいいのかもわからない。だが深雪は迷いのない足取りで進んでいく。この場所に何度も訪れているのだろうか。深雪の進む場所はいくらか地面が固められ歩きやすくなっている。

村の中心から離れているのは当然だが、この方向だと町に近付いているように感じる。それでも、このまま町に行けるわけではないが。

「着きました」

深雪が歩みを止めた。それまで歩いてきた場所に比べるといくら

か拓けた場所だ。離れた位置に半分削り取られたような小高い丘がある。最近削り取られたわけではないが、さほど古い跡でもないようだ。その丘の前には赤茶色の岩が地面に突き刺さっていた。

「実はこの場所はあまり村から離れていないんです。子供が遊びに来られるような距離です」

「えっ、そうでしたか？　かなり時間がかかっていますよ」

腕時計を見ると優に一時間は歩いている。

「今の道は誰も通らないような道を通ってきました。本当は学校の裏を少し入った場所にあるんですよ。近くはないですが、親が心配するほど遠くもないので小さい頃に秘密基地だつて騒いでたんです。子供の秘密の遊び場なんです」

ばれてるんですけどね、と言つて深雪は頬にえくぼを作りながら苦笑した。

「でもあのことがあつて、ここにはほとんど誰も寄り付かなくなりました」

「あのこと？」

深雪は大貴の問いには答えず、ゆつたりとした足取りで丘に近づいていった。それに大貴も従う。よく見ると丘の崩れ方は自然な崩れ方ではない。斜面は急だが、この程度ならダンボールを使つて滑り降りることもできるだろう。そんな小さな丘で土砂崩れなど起こるものなのだろうか。

深雪は丘の前、地面に突き刺さつた岩の前でしゃがみこんだ。

「今日も、来てたんだね」

地面に手をつきながら呟いた。大貴からは深雪の背中しか見えず表情はわからないが、その声は小さくかすれて大貴の耳に届いた。深雪の周りに目をやると、その部分だけ綺麗に雑草が抜かれ手入れされていた。いや、深雪の周りというよりその岩の周りなのだろう。その部分だけ地面もならされており、かすかに線香の香りが漂っている。深雪が置いたものではない、小さな花も岩の前に置かれていた。

「今日も、来ていた？」

「悟くんです」

この質問に深雪は返事を返した。するとこの花や線香も悟が置いたものなのだろう。しかし、これでは、

「お墓、なんですね」

「はい」

深雪はゆっくりと立ち上がると、これまたゆっくりと振り返った。

「ここは悟くんのお姉さん、智美のお墓です」

## 17 大貴と智美

二人の間をやわらかい風が吹き抜ける。頬をなでるその風は心地よく内面をもなでていく。揺れる木の葉は軽やかなメロディーを奏でているように耳に響き、微かに香る線香に鼻腔をくすぐられる。すでに太陽は傾きだし、周りの木々だけでなく、二人の顔にも陰影を作り出していた。

どれほどの時間が流れていたのだろうか。深雪は寂しげに目を伏せ、大貴は智美の墓標の岩を一心不乱に見つめている。岩の周りの雑草は綺麗に取り除かれている。かなり最近土をならしたのだろうか。空気に触れていない焦げ茶の土がむき出しになっていた。

「……智美さん」

大貴が呟くと深雪が視界の隅で頷くのがわかった。

それまでも何度か耳にしていた名前。それでいて、そのことに触れてはくれなかった。気にはなっていたが、気がつくと話が逸らされついに聞けずじまいになっていた。今朝も深雪と真弓はその話題に触れているのが思い出された。表、というのはどういう意味だろう。

「村の人は、誰もが歴史について知っています。一番よく知っているのが真弓。程度はどうあれ、大貴さんが昨日知った知識を村のみんなは知っています」

大人も子供も、と深雪は付け足した。

「話が飛びましたね」

「ゆっくりと、すべてお話します」

どうやら話を逸らすつもりはなさそうだ。大貴は手振りで先を促した。

「おそらく大貴さんはこの村が復讐を心に誓っている。そう考えていませんか？」

この問いに大貴は少し戸惑った。確かに大貴は真弓の話を聞いて



そう考えていた。この村はいまだに復讐を誓っている。町に怨みを抱いていると。しかしその気持ち達が徐々に薄らいでいるのも事実だ。今日村の中を歩いて出会った村民。その顔からは一応に笑顔を見て取ることができた。誰も復讐を抱いているように見えない。

それでも、大貴は小さく頷いた。それを見て、深雪は続ける。

「復讐を心に決めていた時もありました。その結果、真弓のようにしきたりに縛られている子もいます。でも、今この村の多くの人は復讐を忘れていきます。むしろ、町に好感を抱いている人がいるくらいです」

「いいことなんじゃありませんか？ 復讐を考えるよりも、ずっと」

深雪は、そうかもしれないね、と言って力なく微笑んだ。これに大貴は少し拍子抜けした。大貴はあえて能天気を装って答えたのだ。もしも深雪が復讐を誓っているのなら、この言葉に何らかの反応を示すはずだと考えてのことだ。村民から復讐心が感じられなかったが、深雪からはそれを感じ取ることができたから。

「この開発計画が、村のためになるんですか？」

この問いに、大貴は口をつぐむしかなかった。深雪は知っているのだろうか。この計画の真意を。大貴自身詳細を知っているわけではないが、それでも村のためになるかどうかぐらいわかっている。

大貴の反応を見て深雪は小さなため息をついた。

「町は素晴らしいところです。この村から出て町を歩いた人間なら、誰でもそう思います。自分たちが住んでいる場所がどれだけ不便なんでしょうって。大貴さんだって、この村がどれだけ不便な場所にあるかわかりますよね。でもいくら便利になるからって、よく考えもせずに手を叩くのはよくないと思うんです」

「……その通りですが」

「人によつては町が村民を殺す、なんて考えている人もいます。私が、私はそれがあながち的外れといえないような気がします」

「深雪さんは開発計画に反対なんですか」

「……ええ、どちらかといえば」

そう言って、深雪は智美の墓標に目を向けた。

「特に、あの日以来は」

「あの日、ですか」

深雪の視線と話の流れから大貴はその先に想像がついた。

「智美が、死んだ日です」

やはり、と大貴は思った。深雪の目が暗く沈んでいくのがわかる。

「三年前、この村で事件があったのを知っていますか？」

「はい。確かそれが原因でこの計画もここまで遅れをとったとか」

「あれは地質調査と称して、町の役人がここでダイナマイトを使用しました」

深雪はじつと大貴と目を合わせた。

「それに巻き込まれたのが、智美です。智美はこの岩の下敷きになって、死にました」

言い終わった深雪の瞳は、あの時の暗さを湛えていた。闇というのですらまだ明るく、深海ですら浅すぎる深み。それは最初に見せた色。深雪と、真弓が持っている色。

「……事故だったんですか」

大貴はそう言うのがやっとだった。唇が震え、口内では唾液が粘りつき開閉を妨げている。深雪の瞳の色を恐れているのか、それとも別の何かなのかわからない。大貴は息を吸い込み、背筋を伸ばした。

「そうです。事故でした」

あっさりと、大貴が拍子抜けするほどに深雪は認めた。だがそれだからこそ、深雪が嘘をついていると大貴は見取った。

「火薬の量を誤ったようです。その結果、智美が巻き込まれました。智美は今の私のような役割を買って出ていたんです。つまり、案内役のようなものです。どうやらここは町と村をつなぐ新しい道路を建設する予定の場所。にするつもりらしいです」

不気味なぐらい深雪は淡々と語っている。その言葉に覇気はなく、苦々しげでもある。

「智美も地質調査ということで案内したのですが、すでにいくらかの下準備を整え工事を始めるつもりだったのです。それに巻き込まれて、智美は死にました」

「……智美さんは、悟くんのお姉さんですよ」

深雪の弟が裕紀、愛の弟が勝也、真弓の弟が圭介、となると残るは悟だ。あの時は遠目からでよくわからなかったが、あの四人の中では一番おとなしそうな印象を受けた。その時はその程度の印象だったが、今ではその印象が不自然に思える。

「言いたくはないんですが、それでは、智美さんはこの計画のせい  
で」

殺された。大貴はその言葉を飲み込んだ。口に出すと取り返しのつかないことのように感じられたからだ。それに、口に出さずとも深雪には通じた。深雪も眉間に皺を寄せ、苦悶の表情を浮かべている。

「……そう、考えている人もいます。それでも、この村の上層部はそんなことを考えていません。見方によっては確かにそう見えてしまいます。でも、やっぱり事故なんです」

何故だかわからないが、深雪はそれに固執しているように感じられた。是が非でも事故にしたいかのよう。それを語る深雪はそれまでとは違う。村を案内するように喜々としているわけでもなく、無邪気な笑みを振りまくわけでもなく、かといって暗い瞳に身をやつしているわけでもない。

いや、身をやつしていることに疑問の余地はない。まるで自分を責めるかのように、事実を否定するかのよう。微かに呼吸が乱れているのがわかる。

「この事業が三年も遅れた事件というのは、それだったんですね」

「ええ」

大貴が話を進めると、深雪も呼吸を整えようと静かに深呼吸をした。

「ですが事業再開は決定したようです。それは大貴さんがこの村を

訪れたことでもわかります。それに、村のものの反対意見も多くはありませんね」

「それで、いいんですか」

「えっ？」

「それでいいんですか。事業が再開されても」

大貴は自分が言っていることを理解している。それが自分の本来の仕事から矛盾していることに。自分の本来の仕事はこの事業についての記事を書くことだ。つまりは、この事業の促進効果も期待されている。

「再開されれば、多くのものが失われるんじゃないですか？ 深雪さんが大切にしているものも、他の人たちが大切にしているものも、それでもいいんですか」

大貴の脳裏には深雪の寂しげな顔が浮かんでいた。思い起こしてみると、深雪は気がつくと言った寂しそうな表情をしていた。無邪気な笑みもたくさん見てきた。それでも、その寂しそうな表情は他のどんな表情よりも、ずっと深雪に沁みこまれていた。

「それに、智美さんだって」

「いいんです」

小さく、だがきっぱりとした声で深雪は言う。

「もう決まったことです。私は、もう決めましたから」

「でも、」

「大貴さんは大貴さんのできることをしてください。これはもう、私の力ではどうしようもない。ただ、それだけです」

そこに見えた深雪の表情は、やはり寂しげであった。深雪はゆっくり目を閉じると、何かを回想するように息を吐いた。長い睫が光っているように見える。泣いているのだろうか。

深雪はくりと背を向けると、すたすたと歩き始めた。その先には古ばけたベンチがある。深雪の意図を察し、大貴もベンチへと足を向けた。三人掛けのベンチ。もうどれだけ使われていないのだろうか。もとの色がわからなくなるぐらい、それは風雨に晒され朽ち

ている。直接座るのに抵抗がありそうなものだが、深雪は迷わずに腰かけた。大貴は少し迷ったものの黙って隣に腰かける。

「すみません。また辛気臭くしてしまつて」

「気にしないでください。それよりも、まだこの村で語っていないことつて」

「ええ、それじゃあどこから話そうかな」

「この村が町との交流を絶つているところを教えてくださいませんか」  
商店街で話していたことだ。有耶無耶になつていたが、これはずつと氣になつていた。交流が難しいのではなく、交流を絶つている。そうですね。わかりました」

大貴の顔を直接見にくいのか、深雪は視線をまつすぐに向けている。大貴もそれに倣つて深雪の横顔から目を外した。

「政策のようだ。大貴さんはそう言いましたね。それはあながち間違つていないんです。この村は独自の文化を築いてきたといつても過言ではありません。それは交流がなかったからだけではありせん」

「といたしますと」

深雪は中途半端に沈黙を保った。どうやら言いよんどんでいるようだ。

「これも昔の掟が影響しています。というよりこれから話すことは掟の名残だと考えてください。真弓の役目が生贄の選出から神社の維持に変わったのと同じです」

「もちろんわかつています」

話してください、と言つて大貴は話を促した。

「……過去この村は隔離され、多くのものが生贄に捧げられました。それは怨みとなつて、町がこの村の存在を忘れても村に残り続けました。しかし、この村に復讐を実行するほどの力はありません。身分の低い者たちが作つた村です。当然に教養も十分ではありませんでした。大貴さんならどうしますか？ 力の強いものを相手にするときは」

思いがけない問いを振られ大貴は眉をひそめた。

「どうすると言われても…地の利を利用するとか、勝っている部分で勝負するとかじゃないですか」

「個人ならその方法は通じるかもしれませんが。必ずしも強いものが勝つわけでもありませんからね。ですが行うのは勝負ではなく、復讐。ただの喧嘩ではありません。正直、先祖たちがどのような復讐を果たすつもりだったのかわかりませんが、彼らが採ったのはまさに政策でした。彼らは村民ひとりひとりに役割を与えたのです」

「役割？」

「はい。そしてそれぞれに確実に実行させました」

それは、どういうことだろう。言葉は違うが、それはどこでも行っていることではないだろうか。大貴がこの村に来ているのだから、記事を書くためだ。その役割が与えられ、そしてそれを確実に実行しなければならぬ。それほど常軌を逸しているわけではない。

「もちろん。ただの役割ではありません」

大貴の心情を読み取っているのか、深雪は大貴の疑問を打ち消した。そして、理解しがたい事実を大貴は突きつけられた。

「この村をひとつの生物として考えるとわかりやすいと思います。この雨乞いの村をどこまでも成長させるために、村民は役割をこなしていく。もちろん、この成長というのは復讐を果たすための力です」

「…よく、意味がわかりませんが」

「簡単に言いますと、この村のすべてを復讐のために費やそうと考え、そして実行したのです。私の家系は先祖代々畑仕事を役割として与えられました。そして、愛の家計は先祖代々定食屋を役割として与えられました」

「それが、復讐になるんですか」

畑仕事や料理で復讐を果たせるのなら、これほど簡単な復讐はない。予想通り深雪はかぶりを振って続けた。

「これは村民を選別した結果です。村が大きく、強くなるためには

村民が訓練するだけではありません。戦でも、勝つためには策を練り、兵糧を蓄え、士気を上げます。ゆえに、もつとも適正とされた職業をあてがわれたのです。もちろん、運動能力が優れていた家系は、訓練をしていたそうです。しかし時代の流れと共に、復讐よりも村の維持に重点が置かれるようになりました。訓練をしていたものたちは、時代の流れによって新たに生まれた職業に就くことになりました。鳶や土木業者、クレープ屋などです」

だから、この村に同じ店はないのだ。それぞれが与えられた役割を担っている。もちろん、時代の流れと共にいくらかは職種が増え（当時にクレープ屋があるとは思えない）規模も変わっているのだらう。

それでも、解せないことはある。

「深雪さん。なら何故この村は交流を絶っているのですか。今でも積極的に交流をしているようには感じませんよ。それなのに、何故町の文化がこの村に入っているのですか」

文化というほどではないかもしれないが、クレープ屋や奇妙な家。あれらを村独自に考えたとは思えない。それに村だけで完結しているにしては統一感にあまりに欠けている。ちぐはぐなつぎはぎのような印象を受ける。つまり、町の情報はこの村に流れている。それも昨日今日ではない。

「さつきも考えていました。この村には町との共通点が多いですが、それでいてどこか違う。村に町の情報が流れているのは確認するまでもありません。しかし、町に村の情報は流れていない。それこそ人口ですらも」

いつしか大貴は正面を向くことを忘れていた。顔ごと体ごと、深雪を凝視している。体が前に乗り出さないよう、自らを抑えているほどだ。瞳には深雪を逃さぬように、威圧するような力をこめているのが自分でもわかった。

「それも、役割です」

はつきりと、さも当然のこのように深雪は言った。おそらく大

貴の疑問を予想していたのだろう。深雪の頭の中では、これから話すこともすでに順序だてて整理されているに違いない。そんな風は大貴が考えるほどに、深雪は平静な表情を貼り付けていた。

「村の情報を町に流さないこと。これは村民全員が課せられた役割です。当然のことながら、敵にこちらの情報を教えてはなりませんから」

深雪の「敵」という言葉を聞いて、大貴の胸が痛んだ。その敵の一人に、自分は入っているか。そう尋ねてみたかったがぐつと堪えた。

「そして、村民の一部に課せられた役目に、町の情報を把握してくるといふのがあります。この役目を課せられた村民は、山を越えて町に侵入して情報を得てきました。これは任務、運命と表現したほうがいいかもしれません」

平静な顔で話していた深雪が、そこではじめて表情を変えた。その表情は意図的というより、隠そうとしているのに現れてしまった、という感じた。

嘆いている。そんな印象を受ける。悲しいとか、寂しいとかいうのではなく、嘆き。

「村の中だけで、町を超えることはできません。鎖国の縮図といていいと思います。ただひとつ違うのは、私たちはあの愚かな政府と違い、敵から多くのことを吸収してきたということです」

「まさか、そんなときにも…」

「はい、その時代にはすでにこの制度が確立していました」

これedyouやく合点がいった。これほど町から離れていながら、この村は村らしくない。ところどころに町としての空気を感じ、それでいて町ではない。村としての空気を感じることもできるが、やはり村ではない。

どこかちぐはぐな、噛み合わない違和感。それは的外れではなかった。シーソーのように安定しない居心地の悪さはこれであったのだ。そして、もうひとつの謎もこれで解ける。



「閉じこもっていたわけでは、ないんですね」

重い口調とは裏腹に大貴は苦笑していた。この話題を口にしようとした時から身構えているのがわかる。真弓と話しているときも、自分を取り乱していた。その大貴の声の質の変化を感じ取ったのか、深雪は微かに瞼を震わせた

「町に侵入したのは、どんな人たち、どんなことを目的にしていたんですか」

「……はじめはとにかく復讐のつもりでした。でも、すぐに自分たちの無力に気付きました。当然と言えば当然ですよ。それまで生きるのにだって精一杯だった人たちなんですから。それに気付いてからは、村を強くする方向へと変化し、いつしか生活をより潤す方向へと変わっています。だから、今ではほとんどの人が町に行きまです。定期バスもありますから、以前のように山を越える必要がありませんからね」

「ということは、定食屋の店主が町に行っても不自然は無い。という事ですね」

「そうですね」

ここで深雪はようやく大貴のほうを向き、不思議そうに頭を傾けた。思考を辿るように目をくりりと回す。

「町の味に似ていましたか？」

心持ち自身が無さそうに深雪は言う。大貴はかぶりを振った。

確かにそれもある。これは町で通じるだろうなとは考えていた。

よくこんな味を村の中で出せたものだ。逆を言えば、何故村の味がこんなにも表れていないのだろうと。だが、それではない。それはきっかけにはなったが、本当に知りたいのはそれではない。もうそんなことどうでもいいとさえ思っている。

「町に出れば多くの人と知り合いますよね。今まで知り合ったことのない人たちとも」

「そうですね。私もはじめは戸惑いましたが」

「例えば、どんな人がいますか」

大貴が何を言いたいのかまだ把握できず、深雪は口ごもった。それでも言葉を選ぶようにゆっくりと口を開く。

「料理人なら、たくさんのお店で料理を食べますから、やっぱりそれ関係の人が多いいと思いますけど。それに、何も料理だけではなく、他の、町の雰囲気味わおうと考える人もいるので、全く関係のないところにもいきます。ですから、はつきりとは」

「なら、」

唇を湿らせ、おそろおそろ言葉を押し出す。

「外国人と知り合うのはもちろん。恋仲になるのだって、できますよね」

湿り気を帯びたような声は、それでも深雪の耳にしっかりと感触を残した。蒼白とまでいかないが、間違いなく動揺しているのがわかる。大きな瞳をそれまで以上に見開いている。

「愛の祖父が恋仲になり、そして村民は二人を追いつくとした。これがどうにも理解できない。二人の恋路を邪魔するのであればもっと別の方法を考えるんじゃないですか」

さらに、これまでの深雪の話を聞いていて確信することができた。「この村は町に情報を漏らすまいとしていたはず。それなのに、なんで追いつくとしたんですか。愛の祖母がこの村に入ったのは事実なのでしょう？　なら、村についていくらか知っていたんじゃないですか。それこそ、歴史についても」

深雪は沈黙したまま大貴の問いに答えない。だがそれこそが答えのようなものだ。おそらく愛の祖母はこの村の歴史を知ってしまったのだ。そしてここからはさらに想像によるが、愛の祖母は村から出ようと考えたんじゃないだろうか。歴史を知り、恐怖したのではないだろうか。大貴がそうであったように、自分が復讐の対象となつていてと考え疑心暗鬼に陥ってしまったのではないだろうか。

「愛の祖母は、本当に自殺だったんですか」

太陽はすでに傾き西の空に隠れ始めている。残り火のように世界を赤色に染めている。それは人間も例外ではない。深雪の顔は太陽

の光を受け赤く染まっているはずだ。それなのにその顔は白く、能面よりも蒼い。大貴の目はじつと深雪を見据えている。それは睨んでいるといってもよかったかもしれない。それほどに大貴はこの問いの回答を求めている。

「そして、殺したのは誰なんですか」

その言葉がきっかけだったのか、深雪の瞳から雫が零れ落ちた。なんの前触れもなく、それは頬を流れ、顎を伝い、地に落ちた。

「す、すいません」

深雪は慌てて顔を隠し目元を拭った。静かに流れ落ちた雫は染みのように地面に跡を残していた。ここは乾燥しているのかな、などと大貴は考えていた。いや、考えたかどうかもわからない。今の大貴の心は罪悪感が溢れていた。深雪が何故涙を流したのかわからない。その涙が何を意味しているのかわからない。それなのに、大貴は自分がやってはいけないことをしたような、超えてはいけないラインを超えてしまったような、そんな居心地の悪さを感じていた。ただその染みの跡をぼんやりと眺めていた。

「私も、その時のことはよく知らないんです」

背を向けたまま深雪は言った。

「ただ、大貴さんの言っていることが、的外れだとは、思いません。やはり、この村には私たちですら知らないことが、たくさんあるんです」

深雪が本当に知らないとは思えない。しかし、これ以上突っ込んで話すこともできない。あの涙を見た後では、何をするにしても、大貴がこの村にいることでさえ、それは罪のように思われてしまう。それでも、知りたいこと、知るべきことはたくさんある。

今朝、真弓と二人で何を話していたのだろうか。今話したことは表の話なのだろうか。それとも裏の話なのだろうか。真弓はともかく、深雪はすべてを話すのに抵抗があるようだった。悟が気にするとはどういうことだろう。梅に何故あんな言葉を返したのだろうか。あの言葉に一体どんな意味をこめていたのだろうか。そして、おそ

らく愛は真実を知らされていないのだろう。祖母は自殺したと、そう教えられている。周りに騙されて、この村を大好きだと言っていたが、それすらも作られた感情。雨乞いの村という偽りで固められた村の創造物。

そう考えると大貴の奥底からふつつとにじみ出てくるものがあった。それは底にたまった泥が揺さぶられ水面に現れてくるかのように、それまでの清らかな水を簡単に黒く濁してしまった。それまでの罪悪感も霧散し、代わりに沸いてくる濁った感情。その中で、愛が笑っている。

彼女がどんな思いで笑っていたのか痛いほど伝わっていた。本当にこの村のことが大好きで、きつとこの村の誰よりもこの村のことが大好きで、とびっきりの笑顔をみせていた。それなのに、その笑顔は作られたもの。真実を知らないからこそ笑っていられる。それを見て誰も何も思わないのだろうか。愛を騙し続けて何も思わないのだろうか。そう、今隣に座っている深雪も、何を思って愛を今まで見ていたのだろうか。

「愛さんを騙しているんですね」

言葉に棘がこもっていることが自覚できた。それでも、そんなの気にならなかった。誰にでもいいからこの感情をぶつけてしまいたかった。コップの水がいっぱいにたまり、表面張力でやつとこさこらえている。少しでも力が加われれば取り返しのつかない水が零れ落ちてしまう。

「そんなつもりなんて、ありません」

「ならどんなつもりなんですか！」

歯を食いしばり怒鳴りつけていることに気付いたときは、もう遅かった。深雪が目丸くし大貴を見上げている。大貴はこれ以上ないぐらいにこめかみに力をこめ、自分でも信じられないぐらいに深雪を見下ろしている。奥歯はきりきり鳴り、拳を握り締めている。そのまま勢いに任せ二の句を継ごうと口を開きかけたが、ふっと大貴の動きが不自然に止まった。

深雪の瞳から再び飽和寸前まで涙が溜まっていた。いや、もうすでに流れ落ちている。先ほどの静かな涙とは違い、それはほとんど洪水のように勢いよく流れている。深雪はそれを隠そうともせず、ただ流れるがままにし、じっと大貴を見上げていた。

「……………っ…あう」

涙はとどまるところを知らず、ついに深雪は嗚咽を漏らし始めた。腰を曲げ小さく丸くなっている。自分の細い体を大貴が心配になるぐらいに両手で抱きしめている。それは必死で全身の震えを抑えているようにも見える。それでも抑えきれない震えはその小さな肩に表れていた。子供が家の隅で泣いているように弱弱しく、すぐにでも壊れてしまいそうだ。

「深雪さ」

「そこをまつすぐ！」

大貴の言葉を遮り、深雪は叫んだ。指を差したその先を大貴は目で追う。深雪の態度の変化にほとんど反射的に視線を向けた。その先は来たところとは違い人が通れるように草が刈られている。

「すぐに村にいきます。学校の裏から出てこれます」

「…えっと」

「ひとりに、してください」

ほとんど懇願のような深雪の叫びに、大貴は抗おうとも思わなかった。ただただ頷き、次の瞬間にはもう体がそちらに向かっていた。思考が麻痺していたのかもしれない。それとも、深雪の涙に我を忘れてしまったのかもしれない。はたまた、慣れない濁った感情に支配された副作用であつたのかもしれない。

どれであつたとしても、それに大きな違いはない。この光景を藪の中から隠れ見ていた少年がいたのを大貴はおるか、深雪も気付くことはなかった。その少年は二人が離れていくのを見届けると、さつと音もなくその場を離れていった。

## 18 深雪と失敗

体の芯が重い。体全体は空気のように軽いのに、体の真ん中に何か重い塊が居座りそれが体全体を押さえつけている。その塊を支えるのに、人間の体では力不足だ。

三島大貴は言葉通りに去っていった。背中を見ていないが気配でわかる。顔は上げられない。上げようとしても涙がとどまるところをしれず溢れ出してくる。自分は失敗してしまった。三島大貴を守れるのは自分だけ。それなのに、失敗してしまった。彼を殺そうと全員で考えた。すっかり練った。それぞれの役割を全うしようとした。でも、気付いてしまった。こんなことに、何の意味もないことを。

真弓のように先祖の無念を晴らそうとも思えない。

愛のようにただ純粹に村を守ろうとも思えない。

どれだけ辛い目にあってもそれは過去のことではない。今の時代とは違うのだ。真弓は亡霊に憑かれている。

いくら町の情報を仕入れても、どんなにみんなが頑張っても、町の利便性に比べればこの村なんてたかが知れている。その現実を愛はわかっていない。町の魅力に気付いていない。

そう思いながら、自分が一番時代に適応していると考えながら、そんな自分を毛嫌いし、純粹な二人を羨んでいる。そうなることができない自分を嫌悪している。あのまざまざしい光景を一番近くで誰よりもはつきりと見ていたはずなのに、いまだに決心できない自分を侮蔑している。

町のものを怨んでいるのは本当だ。あの光景はとても人間の手で実行できるものではない。実際、それらは獣のように映った。全身に怖気が走り、それを淡々とこなしていくそれらに恐怖した。

三島大貴がこの村に来たときも、きつと心の内に獣を忍ばせているのだらう。そう思っていた。あの時の町の人間と姿をダブらせ、三

島大貴にただならぬ怨みを抱くことができた。自分は計画通りに実行できる。怨みをきつと晴らしてくれる。そう信じることもできた。なのに、この人は悪人ではない。話してみても、今日一日村を歩いてみてわかった。三島大貴の心の内に獣はいない。そうわかってしまった。誰に話してもわかってくれないうことだけれど、深雪にははつきりとわかってしまったのだ。そして、本物の獣を飼っていたのは自分たちだったと。

思えば、深雪はこの計画に消極的だった。三島大貴に、というより町の人間にこの村の歴史を教えようと提案したのは深雪だ。皆は反対したが、深雪は町の情報収集のためだと、町に伝わっている村の情報を知るためだと皆を納得させた。しかし、本心はそうではなかった。深雪は少しでも罪の意識を消したかったのだ。教えることで三島大貴が死を意識すれば、すこしは楽に死ねるだろうと。もしかしたら自分たちに同情し、力を貸してくれるのではと。そんな淡い期待をこめていた。あの時、三島大貴は自分の心情を吐露してくれた。それをくだらないといって笑っていたが、あんな風に周りをおいやる人がこの世にどれだけいるのだろうか。この人ならこの村の境遇に涙して、手を貸してくれるのではないだろうか。この村を救ってくれるのではないだろうか。そして、自分を救ってくれるのではないだろうか。そう思った。

でも、それはもう無理だ。自分は失敗してしまった。三島大貴は知ってしまった。愛の祖母が本当は自殺ではないと。それ以上先を知っているとは思えないが、それを知ってしまっただけでも、もう彼は生きてこの村を出ることはできない。いや、出すわけにはいかない。もしもその事実を公表されてしまったら、それこそこの村は終わりだ。きつとこの村は消滅してしまう。村民の多くがこの村を恐れて離散してしまう。もう、実行するしかないんだ。

深雪は息を大きく吸い込み立ち上がった。三島大貴が消えた方向を睨みつける。それは自らを鼓舞する行動であつたに違いない。しかし深雪の瞳から漏れ出てきたのは、ただただ溢れんばかりの涙。そ

れこそ、真弓も愛も持っていない深雪の純粋な感情だった。



## 19 大貴く勝也く

深雪の言うとおりに道を歩いていると、程なくして学校の裏手に出た。学校の中からは子供が残っているのか、楽しげな声が聞こえてくる。もうすぐ日が暮れる。授業ではないのだろう。

ようやく頭を冷静に戻すことができてきた。歩きながらも考えていたが、やはり深雪は愛の祖母に関して知っている。何が起きたのかまだわからないが、それでも知られては困る真実なのだろう。それは大貴に知られて困ることなのか、それとも村に知られて困ることなのか。どちらにせよ、まだ深雪は、というよりこの村は多くを隠している。

智美の事件にしてもそうだ。今朝、真弓と二人で話し合っていたときの「表だけのほうがいいよね」とはどういうことだろう。真弓はすべて話すことにためらいはなかったようだが、深雪は当惑していた。今聞いた話は表の話になるのだろうか。ならば裏の話とはどういうことなのだろう。あの話の辻褄は合っている気がする。町の人間が既成事実を作ろうとしたが、爆薬の量のミスか何かしら手違いが起きたのだろう。それに智美は巻き込まれた。仕方ないとも思える一方、町の人間が殺したと捉えることができる。これ以上変わりようがないように思えるが、それでも、やはり何か違う。これ以上変化がないからこそ、怪しい点がないからこそこの話は真実ではないのだろうと確信できた。

校庭でも多くの子供が遊んでいる。町ならこの時間にはもう家路についているであろうが、まだまだ遊び足りないのか子供たちは帰る気配を見せない。あちこちで楽しげに声をあげている。その中で校庭の出口でひとり佇む男子がいた。その顔には大貴も見覚えがあった。

「圭介くん」

話しかけたつもりはなかったが、圭介は声に反応して顔を上げた。

大貴に気がつくと目を丸くして表情を強張らせた。まるで幽霊でも見ているかのような驚きようだ。圭介がいたことに軽い戸惑いを覚えていた大貴だが、そのような表情を見せられては近づくに近付けない。一定の距離で立ち止まり話しかける機会を窺った。だがその必要はなかった。圭介は舌打ちをするとすぐに背を向け歩き去ってしまった。

明らかな圭介の態度に微かな苛立ちを感じつつも、その対応こそがふさわしいように思えてしまう。もしも自分がこの村で生まれていたら、町から来た人間をどう思うだろうか。そして、村のためにならない事業のために近しい人を殺されたらどう思うだろうか。理解できるなんて、彼らの気持ちがわかるなんて言葉を口にすることは傲慢だろう。それでも圭介の態度こそ異分子にはふさわしい対応のように感じた。

ぼんやりと圭介の背中が見えなくなるまで眺めてから大きく息を吐いた。

「これからどうするか」

誰にともなく呟く。予定だと今日は深雪と村を探索し、村についてさらに込み入った話を聞くつもりでいた。それに一段落がつけば後は真弓にその内容を補足してもらおう。そのつもりだったが中途半端に時間が余ってしまった。それに話をすべて聞けたとも思えない。とにかくこれまでの話の内容を整理する必要があった。あまりに突飛な内容だからか、すべての情報が頭の中で点在し收拾がつかない。頭を冷やすように大きく息を吸い込み、あえて圭介とは違う方向に足を向けた。

この村、雨の村ではなく雨乞いの村。その実体は、生贄によって作られた生贄を生産することを目的とした村。そして、町に対して復讐を誓っている。村が安定しだした当時、復讐を実行しようとするもののそれを断念。力を蓄えるために時機を窺った。時の経過により復讐は村のお題目として掲げられていたかもしれないが、いっしか村を維持することに重点が置かれるようになっていった。そし

て、今では復讐を口にするものは少ない。

しかし、昔の名残が今もこの村に復讐の爪痕を残している。それこそが『掟』生活の一部となってしまうもしかしたら気付いていない村民もいるかもしれない。真弓が神社に閉じ込められているのもそれが原因となっている。いくばくかの自由はあるのだろうか、それでも彼女は家族と離れて暮らすことを義務付けられている。誰も参ることはない、雨の神を祭る張りぼてのような神社に。

役割も掟の一部と考えてもいいだろう。この村民それぞれがどのような役割を担っているのか把握しきれないが、村民はこの世に生を受けると同時に選択権を失う。いや、生まれる前からすでに運命付けられているのだろう。先祖代々引き継がれてきた役割を引き継いでいく。それに疑問を抱いてはいないのだろうか。唯々諾々と他者から与えられた運命に準じているのだろうか。

そんな村民すべてを管理するようなシステムにも、もちろん完璧ではなかった。もしかしたら綻びはほかにもあるのかもしれないが、大貴に知る術はない。ひとつだけはっきりとしている綻び、それは愛の祖母の事件であろう。愛はこう語った「村を追われそうになっただけ、最後はおばちゃんが命を張ってじいちゃんを助けてくれたんだ」きっと愛はこれを真実と疑っていないはずだ。だが真相は深雪の反応でわかる。そしてその事実はこの美談を打ち崩してしまうのだろう。

ふと足を止めると、大貴は自分が身投げ沼に向かっていることに気付いた。思考に集中していたわりに、迷いの無い足取りで進んでいた自分に驚く。そしてかぶりを振って苦笑した。もしかしたらと考えているのかもしれない。あそこに行けば愛がいるのではないかと。

そんな考えに気付いてからも、大貴の足取りに変化はなかった。むしろ思考に偏っていた意識が戻り、先ほどよりも足に力が入っていたかもしれない。期待感が大貴の胸を支配しだしているのに気付いてはいたが、頭の中ではそれを否定してもいた。

森が見えてくる位置までくると、大貴の心臓は跳ね上がりそうになる。薄ぼんやりとしているが、森の入り口に人影が見える。遠くで男か女かもはっきりとしないが確かに人が立っている。こんな時間にこんな場所にいる。大貴は意識して歩く速度をゆるめた。そうしなければ走り出してしまいそうだったからだ。だが、その必要はなかった。近付いていくにつれぼんやりとしていた輪郭が徐々にはつきりとしてくる。それは明らかに女性ではない。男のそれもかなり長身に位置している。その男は何をするでもなくただ森の入り口に立っていた。男の周りには何も無い。ただひとりぽつんと立ち尽くしている。大貴の接近に男は気付く素振りも見せない。大貴は男の視線の先を追ってみたが、あるのは暗い森の入り口だけだ。

「姉ちゃん……」

風の流れがその男の呟きを大貴に届けた。その声は大貴も耳にしたことがあった。

「勝也くんか」

背後から声をかけると勝也は不自然に一瞬間をあけ、ゆっくりと振り返った。

「…三島さんじゃないっすか、どうしたんですか？ 深雪さんは？」  
「途中で分かれてね、勝也くんこそどうしてこんなところに？ 何か言ってみたいけど」

「いえ、俺はなにも言っていないっすよ。でも変ですね。昨日こ来たんじゃないんですか？ 何か調べ忘れたことでもあるんっすか」

「いや…」

質問にうまく答えられず口籠もった。理由を挙げれば、愛に会えるかもしれないからとしか答えようがない。だが、愛に会えるなんて希望的観測でしかなく、それで勝也が納得してくれるとも思えない。何よりそんなこと口が裂けても言いたくはなかった。

「そう、祠は見えてなくてね。昨日は暗くなってきたから沼までしか見なかったんだよ。それで深雪さんの案内が終わった後に来てみたんだけど、やっぱりまた暗くなってきたな」

「そうっすね。あそこは慣れてても危ないんっすよ。ほら、ゴミた  
くさんありますから」

「そうか、残念だな」

「それに見ても仕方ないと思いますよ。たいしたところじゃないで  
すし」

勝也は自分の肩を回して深く息を吐いた。その仕草にはいくらか  
の疲労が見てとれた。自分の肩に手を置いた勝也の指はきれいに手  
入れされていた。さすが料理人だなと思わせる。

「俺帰りますけど、三島さん神社まで送りますよ」

思いがけない勝也の申し出に大貴は断ろうかとも思ったが、お願  
いできるかなと答えた。よく考えてみれば神社までの道筋をはつき  
りと覚えてはいない。勝也はニツと口角を上げると、行きましよう  
と言って大貴を促した。

遠目からでも勝也はかなりの長身だったが、並んでみるとそれは  
より実感できた。大貴は決して低いほうではないが、それでも勝也  
は頭ひとつ分大貴よりも高い。どちらかといえば西欧風の顔立ちを  
している。姉弟なんだなと思い、大貴は苦笑した。

「どうしたんっすか」

「いや、今日は何であそこにいたんだ」

苦笑交じりに大貴は聞いた。

「もしかして愛さんと交代で掃除してるのかい」

「いや、あれは姉貴の役割なんっすよ。たまに姉貴いなくなるんで  
代わりに俺がやってるだけっす」

役割、と言う言葉を聞いて大貴は一瞬眉を顰めた。さすがにこれ  
は掟の名残ではないだろう。愛の祖母が死んだのだって、村の歴史  
から見れば最近のことだ。少し敏感になっているのかもしれない。

「そうか、姉さん思いなんだね」

「そんなことねえっすよ。それが当たり前なだけっす」

「いや、それを当たり前だと思っただけっす。動けるのがすごいんだよ。そん  
なこと当たり前にはなかなかできないからね」

大貴は勝也が照れ笑いでも浮かべているのだろーと思っ顔を見上げた。だが、意に反し勝也に笑みはなく。それどころか訝しげに眉間に皺を寄せていた。

「それが俺の役割、というより、俺たちの役割なんすよ」

「俺たちの、役割？」

「聞いてないんすか」

勝也は信じられないというように目を丸くした。何が勝也をそれほど驚かせているのか大貴には理解できない。本当にと勝也は念押しまでしてきたが、やはり大貴に心当たりはなかった。勝也の言葉に対し首を振った。

「役割のことは聞いているよ。でも、そのなんていうんだ」

「姉が弟を助ける」

「そんな感じかな。それが役割とは聞いてないな。重要なことなのかい」

勝也は顎に手を添え思案するように低い唸り声を上げた。

「もしかして、歌についても何も聞いてないっすか？」

「歌？　もしかして学校で習っている歌のこと？」

商店街を歩いているとき、確か少年がそんなことを言っていた気がする。学校で習って、それで遊びでも歌っているとか。少年が口ずさんだあの寂しげな歌を勝也はいつているのだろうか。

「そういえば深雪さんには聞きそびれていたよ。勝也くんは知っているのかな。学校で習うと聞いたけど」

「はつきりと覚えてないっすね。あれ教えてもらったのももうかなり前のことだし。真弓さんなら知っていると思いますよ。なんたつてあの歌、怨みの歌ですから」

「怨みの歌……」

背中に氷を投げ込まれたかのような寒気を感じた。

「もしかしたら圭介も知ってるかもしれないっすけど、小学生ぐらいのことっすから。でも妙ですね。本当に深雪さんから聞きませんでしたか？」

「ああ、聞いてないよ」

再び念を押した勝也に大貴は適当に頷いた。だが、大貴は心ここにあらずといった感じだった。怨みの歌。それを小学生の頃に習った。それは、幼い頃から復讐心を植えつけようという試みだろうか。そして、今も続けられている。この村に復讐心を持っている村民は少ない。真弓や深雪も言葉には偽りはないのだろう。それでも、この村は、この雨乞いの村は、やはり復讐のために生まれ、存在している。村民がどれだけ復讐を忘れようとも、すでに別の形に生まれ変わり、復讐は村民の傍で佇んでいる。それは気付かぬところではなく、常に自らの正面に。

「聞いてますか？ 三島さん」

「あ、ああすまない。なんて言ったかな」

「さっきのことですよ。姉が弟を助けるって役割のこと。ほんと、何で深雪さんがこれ言い忘れたのかわかんないな。これが一番重要だと思うんだけど」

「これが、かい」

「俺たちが生まれたときからずっと姉を守れって言われ続けてるんです。それはどんなことがあっても、俺の親にいたっちゃ死んでも守れなんていうんですから」

知らなければいい家族だと思う。弟が姉を守る。この現代でどれだけの人間がこの考えを胸に刻んでいるだろうか。今そんなことを口にすれば、それは嘲笑の的でしかないだろう。教壇に立つ教師が言葉にしても、どれだけの人間が耳を傾けてくれるか。

この村民はそれを実践している。口だけでなく、実行している。これも『掟』なのだろう。生贄を絶やさぬように家族を作る。そしてその中の女子は生贄として捧げられる。そんな苦難を生きていたからこそ、その考えを本能として感じ取っているのではないだろうか。悲しみと、憎しみから生まれている掟ではあるが、復讐心が弱まっている今はこれほど素晴らしい掟はない。時の経過と共にこのように生活の一部として溶け込んでほしいものだ。そう大貴は切に

願った。

「ここからならもうわかりますか？」

ちようど昨日愛と別れた場所だ。ここまですれば後は一本道だったはずだ。

「ああ、大丈夫だ。ありがとう」

「いえ、いいですよ。俺もついでしたんだし。あと一応真弓さんにも聞いてください。俺の話、あんま正確じゃないっすから」

「わかった。ありがとう」

勝也は頭を下げると昨日の愛と同じ道を通り、角を曲がって見えなくなった。それを確かめて大貴も神社へと足を向けた。明日にはこの村を出て行くことになる。それが早かったのか遅かったのか大貴にはうまく判断がつかなかった。村を去ることに安堵感を抱きつつも、どこかに残念な気持ちもある。どちらが本心なのかと問われれば、それはどちらもだと答えるだろう。機会があれば再び村を訪れるのも悪くないな。そんなことを考えながら、大貴は真弓のいる神社に向かっていった。



## 20 大貴く見えたその先く

神社の階段を上り、鳥居をくぐる。もう完全に太陽も落ちきってしまい、赤いはずの鳥居はやはり暗闇に包まれている。ふと、明るいときに鳥居をまじまじと見ていなかったことに気付いた。もったいないきもする。明日はちゃんと見ておこう。

昨日と同様、真弓は本殿の前でほうきを持って佇んでいる。その隣にはこれまた昨日と同様に圭介がいた。圭介がここにいることを意外に思ったが、よく考えてみれば真弓と圭介は姉弟なのだ。もしかしたらこれは圭介の日課なのかもしれない。何か話し込んでいたようだが、大貴に気付くと圭介は口を閉ざしてしまったようだ。大貴には気付いているが視線を向けようとしない。これが二人の交わせる数少ない交流の時間であるとするなら、すまないことをしたような気がした。声をかけようかと手を軽く挙げたが、大貴から避けるように圭介は歩き出してしまった。ここまで徹底されているといつそ清々しい。真弓がこれまた昨日と同様「ママによろしくね」と声をかけた。圭介は曖昧に頷くと、結局大貴には一瞥もくれることなく階段を下りていった。

「お疲れ様でした。本日は少し遅くなりましたね……………なんですか、その手は」

真弓が訝しそくに大貴の手を見ていた。中途半端な位置で止まってしまったため、大貴の手は招き猫のようにこまねいているようになっていた。引っ込めようにもここまできたらいい言い訳も思いつかない。咄嗟に、

「ニヤー」

と言ってみた。

結果は見るまでもない。むしろ全身の肌で感じられる。真弓の視線が痛々しい。これまでも視線は冷たかったが、今はその視線が恋しい。

「……では靴を脱いでついてきてください」

無視だった。それは清しいまでの。言及されても困ったものだが、かといってこれが最上の対応というわけでもない。といつてもこの場合の最上の対応がどういったものなのか頭を捻ってしまう。とにかく、今は真弓の言うとおり以後ろに従うべきだろう。

そう結論付けて靴を脱いだ。靴下越しにひんやりとした冷気を感じる。やはり心地よい。

「圭介くんとのお話を邪魔しちゃったみたいで、すいません。せっかく水入らずだったのに」

先ほどのマイナスを取り戻すわけでもないが、先に行く真弓の背中話しかけた。

「昨日もでしたけど、毎日あそこで話しているんですか？ 圭介くん」

「毎日というわけでもありません。あの子もあの子で用事がありますので、それに私もここで寝そべっているわけでもありません。気になさることもありません」

ぴしゃりと放たれるように話を終えてしまった。振り向く気配も見せず、足早に進んでいってしまう。昨日はまだそれなりに気遣ってくれていたようだ。人は失くしてみてはじめてありがたさに気付くというが、それが身に染みて理解できた。無言のまま廊下を歩き、居住スペースの三和土を跨ぎ、洗面所で手を洗い、気がつくと昨日真弓から話を聞いた居間で向かい合って食卓を囲んでいる。

「あれっ」

思わず口から言葉が零れてしまった。会話を諦め、ただ黙々と真弓の背中を追ってここまで来たが、いったいどうしてこんな状況になっているのだろうか。昨日は殺風景に見えたこの居間も、何故だか華やかに見える。それは目の前に広がる湯気の立ち昇っている温かい料理、対面に巫女姿で茶碗にご飯をよそっている真弓の存在が影響しているに違いない。

「どうぞ」

「あつどうも」

差し出された茶碗を反射的に受け取った。ほくほくと米の一粒一粒が光っている。大貴の家で炊いている米とは一味もふた味も違うのだろう。

「おいしそうですね」

「村から取れたものです。ではいただきますよう」

「はい、いただきます……」

流されそうになった。あまりに自然すぎてそのまま手をつけそうになった。まあ手をつけてもいいんだろうけれど、とりあえずこれだけは確認しとかねば。

「真弓さん。ええと、なんで今日は一緒に？」

「昨夜は先に済ませておりましたので。今夜は少し遅くなってしまいました。何か不都合でも」

「いえ、そんなことはないです」

顔の前で手をぶんぶん振った。

「ちょうどよいので、今のうちに質問もなさってください。圭介から聞きましたが、あの場所を見られたのでしょうか」

「ちょうどよかった。それまで会話すらも、というより目を合わせるのも躊躇わせる雰囲気を漂わせていたが（自業自得かもしれないが）そちらから振ってくれるのならこれ幸いだ。大貴は居住まいを正し、とりあえず漬物に手を伸ばした。絶妙な塩気だ。

「智美さんの事件、町では単純な転落事故としか記されていませんでした。この村に来るまではそれを疑ったこともありません。しかし、こうまで村と町に情報の食い違いがあればとても信じることができません。それなのに、深雪さんはこの事件をただの転落事故だと言い張りました」

大貴の脳裏には深雪の悲痛な顔が浮かぶ。今思えば、深雪は淡々と語っていたのではない。歯を食いしばり、表情を殺していたのではないだろうか。

「きつと、事故というのが表の理由なんじゃないですか？ 朝の話

を聞いてしまったのは申し訳ないですが、裏の理由が、隠された真実があるのでしょう。それは何ですか？」

真弓は大貴が話している間も黙々と食事を進めていた。話を聞いていたのか心配になったが、大貴が話し終わると手を止め、ふうと自然なため息をついた。

「深雪は話さなかったんですね」

話さなかったというより、話せなかったといった感じだったかもしれない。かといってそんな細かいところに言及しても仕方がないので大貴は首肯した。それを見て真弓はゆるゆると首を振った。

「何を考えているのかしらね。あの子は」

「え」

「深雪が話さなかったことを私から話すのはどうにも気が引けますが、仕方ありませんね。本当は深雪が自分から言うべきことだと思うのですが。ここまでくれば誰が話しても同じでしょう」

いったいあの子はと真弓は呟き、もう一度ため息をつくとき味噌汁を一口啜る。

「裏の話というより、あの事件の真相と言うべきですね。これを知っているのは村民の中でも本当に限られた人だけです。どうか他言しないでください」

はじめて真弓が口止めをした。これまでどんな話をしていても、どれほどこの村の秘密に触れようと口止めをするようなことはなかった。村民にすらも伝わっていないということは意図的に隠蔽されている、または改竄されているのだろう。しばらく沈黙してから大貴は重々しく頷く。

「話してください」

じつと大貴の目を試すように見据えてから、真弓は口を開いた。

「あの事件の結末は、無残なものでした。私は直接現場を見ませんでした。智美は岩に潰され、もはや原型を保っていなかったと聞いています。悟くんは発狂寸前のように怒り狂っていたそうです。警察官の制止を振り切ってまで智美に縋ろうとしたぐらいですから」

大貴は悟の姿を思い出そうとしたがあまりうまくいかない。一度しか、それも遠目からだったのもあるが、それほど印象に残らない外見だったのだろう。

「それからしばらくして町からは事業の中止が宣言され、事故の詳細も知ることができました。それは納得ができるものではありませんでしたが、嘘ではないだろうな、と皆を理解させるには十分なものでした。私自身納得はしていませんでしたが、やはりこの事件は事故なのだろうと。これで終わりなのだろうと考えていました。しかし、それからほどなくして深雪が私に相談を持ちかけたんです」

気付けば、真弓は苦虫を噛み潰したように表情を歪ませていた。あまり表情を変えない真弓にしては珍しくはつきりとした表情。それは紛れもなく憎悪を表している。そう、昨夜見せたあの時と同じ。「事故以来、深雪は塞ぎこんでいました。親しい友人が亡くなったのだから仕方ないと、私は単純に考えていましたし、たぶん誰もがそう考えていたと思います。ですので、その時の相談も智美のことだろうと簡単に想像がつかしました。実際、深雪の相談事は智美のことでした。しかし、」

一拍おいて、真弓は瞳の色を変える。あの時に見た闇というのですらまだ明るく、深海ですら浅すぎる深みを備えたそれに。思わず大貴も背を伸ばす。

「深雪は人生の終わりを見たような瞳で私にこう語りかけたのです。怖いよ、真弓。そう、私に言いました。これを聞いて私も何かあると思い、深雪に尋ねました……さすがに、私も絶句しました。智美が殺された瞬間を見た、なんて深雪が口にしたときは」

真弓の口元には薄い冷笑が浮かんだ。その笑みには冷酷さ以上のなにかが滲み出ている。瞳の色は変わらず、中空にある何者かを睨んでいるようにも見えた。

見方を変えれば殺されたように見える。この事件は確かにそうだが、そんなことをいつているのではないことぐらいわかる。ならば言葉通り智美は殺されたのだろう。背筋に冷たいものが流れるの

を感じながら、何か言つべきだろうかとも思つたが、口内は粘つき開くことができない。

「あの日、深雪は町の工事関係者が地質調査と称して工事の下準備をしているのに気づきました。そしてすぐに智美に知らせ、智美は止めに入つたんです。最初は町の間人も適当に流そうとしていたのですが、段々お互いにエスカレートしていき、智美を殴りつけてしまったそうです。勝手に工事を開始し、それを止めに入つた女性に暴力を振るつた。こんなことがあれば、開発事業を行うのは無理でしょう。さらにその工事会社もただではすみません。だから、」

「まさか」

ごくりと喉が動く。唾ですら飲み込むのに苦労する。その先を聞きたくなかつた。耳を塞ぎたい気持ちだ。だが、聞かないわけにはいかない。それがどんな答えであつても。

「智美を事故に巻き込まれたと偽装工作を施し、殺したんです」

眉間に皺が深く刻まれている。真弓の肩はふるふると震えていた。恐怖や悲しみではないだろう。抑えきれない憎悪が全身からにじみ出ているのがわかる。時が解決するものはたくさんある。内面の痛みというのは時が風化してくれるものだが、それでも真弓の裡には確かな傷痕がまだ残っているのだろう。それは三年間、風化はおろか形を変えて新たな傷を残しているのかもしれない。

予想はしていた。深雪の拳動から事故ではないと予想し、この結論まで想像することはできていた。

「でも、」

大貴は言葉に詰まりながらも、粘つく口を動かした。

「でも、何故それを公表しないのですか？ そうすれば間違いなく工事は中止に追いこともでき、この村を守れます」

「証拠がないんです」

「証拠つて、深雪さんが見ていたんじゃないですか？ それで十分でしょう」

真弓は力なく首を振った。

「深雪が話したのは事件から一ヶ月後です。でっち上げたと思われるでも仕方ありません。それに状況は完全な事故でした。工事関係者からもケガ人を出し、警察も頭から事故と決めてかかったため十分な調査もされませんでした。おそらく裏で取引が行われたのかもしれない。せめて深雪が事件後すぐに証言してくれたら何かが変わったのかもしれませんが」

手詰まりだったんですと真弓は苦笑した。その苦笑は諦念を表しているように見えた。

「深雪を攻めるつもりはありません。あの子にも理由がありましたから。私だって、智美が殺されるところを直接見ていたら立ち直れたかどうか、自信がありませんよ」

「すみません、少し、考えなしでした」

「いえ、お気になさらず。ですが先ほども申しましたが、他言はしないでください。あくまで参考程度にお考えください」

「わかっています」

大貴は神妙に頷いた。言われるまでもなく、こんなことを他言するつもりはない、というかしたくない。村の中で他言すれば、それは憎悪を増やすだけ。町に対する復讐が現実化しかねない。町で他言すれば、それこそ危険だ。下手をすれば智美と同じ末路を辿るかもしれない。なるほど、深雪の言うとおり、もうどうしようもないところにきていた。

「深雪さんは、まだ苦しんでいました」

「知っています。ですが、こればかりは本人が乗り越えるものです。それに、多かれ少なかれ村民は悩みを抱えています。深雪だけが特別なわけじゃありません」

「……………」

言葉が出ない。真弓の言うことはどこまでも正しいと思う。反対するつもりもない。いくらか冷たいのではと思わなくもないが、それは部外者が口に出すものでもないだろう。ここで生まれ、ここで育ち、誰よりも掟に縛られている真弓だからこそわかるものがある

に違いない。なら、大貴にできることとは一体なんなのだろう。圭介の言うとおりに村を守る記事を書くべきなのか、開発事業を促進させるような記事を書くべきなのか。どちらにせよできることはたかが知れている。もう、大貴が口を出すべき地点はとくに過ぎているのだろう。たぶん、この村に来たときには、もう。

場を保つためにおかずを適当につまむ。それで場が和むとも思えないが、何もしなければ自分の無力を突きつけられているようで虚しかった。機械のようにただ黙々と栄養を体内に詰め込む。

「ああ、そうだ。さつき勝也くんに会いましたよ。姉思いですね」「この村では当然のことですよ」

「勝也くんにもそう言われました。祠の掃除って大変そうですね。あんな場所にあるんですからなおさら」

「そうですね。愛も大変だと思っていましたけど、これからは勝也くんが頑張ってくださいですよ」

いい姉弟だな。心底そう思う。圭介は圭介で真弓を大切に思っているのだろう。だからこそ、大貴に対してあれほどの冷たい態度をとる。裏返しの感情なのだろう。それならば、甘んじて受けてあげるのも悪くない。

「ひとの」

「いま、なんて？」

透き通った儂い声。すでに箸をおいた真弓は大貴に視線を向けていたが、その瞳は大貴のもっとずっと向こうを映しているようだった。

「古くから伝わる、言い伝えのようなものです。正確に知っているのは、私ぐらいなものです。村民には歌として伝わっているはずですよ」

そう言つと、真弓は歌いだした。くつきりとした真弓の歌声は、耳に確かな手応えを残していく。どこまでも遠くに届きそうなその声に大貴は全身を囚われているような感覚を味わった。音の支配とでも言うのだろうか、全身の感覚で音を見て、嗅いで、味わって、



そして感じる。

この村に着いてからのすべてがフラッシュバックのように正確にはつきりと目の前を通り過ぎていった。だからこそ、このときにしてやっと大貴はすべての情報を冷静に見て取ることができた。冷静に、なんの偏見も持たずに、心を揺さぶられることもなく。だから、真弓が歌っている歌詞を聴いて、気付いてしまった。

「ありがとうございます」

真弓の歌が終わるのを待つて大貴はすぐさま立ち上がった。

「少し疲れてしまったみたいで、すみませんが、先に休んでもいいですか」

有無を言わせぬ口調になってしまったのは、少しでも情報を整理したいからだ。自分が辿り着いた答えに身震いが起こる。真弓の返事を待たずに、大貴は襖に手をかけていた。

「かまいません。お休みなさいませ」

背中から真弓が声をかける。その時にはもう襖を開いていた。真弓の言葉に適当に相槌を打ち、居間を出ると、後ろ手で襖を閉めた。自然と足早になりあてがわれた部屋へ向かう。部屋にはすでに布団が敷かれ、どうやらいくらか掃除もなされているようだ。大貴は迷わず布団に潜り込むと、必死で全身に多い被せた。心臓の音がこれほどまでに大きいことにはじめて気付いた。それでも気持ち落ち着けるためには十分効力があつたようだ。そのまま大貴は眠りにつく。

夜が更けていく。静かな夜が、耳に痛い。

## 21 大貴く仮初めの巫女く

気持ち悪い。

昨日よりもいくらか早く目が覚めたような気がする。外の光が朝特有の透明感を持ち、襖越しにやわらかい光が飛び込んでくる。普段なら、今日もいい天気だとしても叫んで布団を干しにいくのだが、外の清しさと裏腹に、大貴の胸中には嵐が居座ったかのように穏やかではない。すさまじい寝汗で全身がべたついていて不快さもあるが、やはり昨夜を思うと穏やかな気持ちでいるのは無理というものだ。大貴は布団の上で胡坐をかき、ゆっくり深呼吸をする。冷たい空気が肺を満たし、冷静な思考力を与えてくれる。二度三度と繰り返すうちに霧が払われるように昨夜のことが鮮明に思い出されていく。

こじつけのようではある。崩れかけたブロックの城のようにすわりが悪い。否定しようと思えば、その要素は一ダースでも用意できそうだ。それでも、これは決して安易に排除できるものではない。排除してしまうのはあまりに危険すぎるというのもあるが、排除したくないとどこかで考えている。これこそ安易過ぎるかもしれないが、ひとりの人間の命がかかっているかもしれない。おそらくは、それ以上になるかもしれない。とにかく、すぐにここを発たねばならない。動くのは早いほうがいい。

急ぎで布団をたたみ、押入れにしまう。物が少なかったのが幸いし片付けには手間取ることにはなかった。最後に部屋全体を見回す。本当に殺風景な部屋だ。人が生活しているとはとても思えない、つまらないというよりも欠けているといった印象を受ける。あながち的を射ているかもしれない。ここはもう役目を終えている場所なのだから。

そっと襖を開き廊下に足を踏み出す。真弓はもう起きているのだろう。人のいる気配はおるか、物音ひとつ感じることはできないが、

大貴の組み立てた筋道が正しいのなら真弓は大貴よりも早く起きていなくてはならない。

予想通り、真弓は居間に座っていた。お手本のように背筋を伸ばし、髪はポニーテイルにしている。前には湯呑みが湯気を上らせている。予想していたとはいえ、いくばくかの期待感もあった。真弓が寝ていれば、予想も外れてくれる。安易に排除することができると。だが、早朝であつても真弓に服装の乱れすらも見ることはできない。昨夜と同じ巫女装束。ともすれば昨夜からずっと座り続けていたのではと疑いなくなるほどだ。ただひとつ昨夜と違うところといえば、僅かばかり目を見開いていること。大貴と目が合つと、さらに眉に皺が寄つたようにも見えた。

「おはようございます。よく眠れましたか」

「ええ、おかげ様で」

「それはよかつたです」

次の瞬間にはもとの端正な顔に戻ってしまった。その一瞬の表情の変化をどう捉えるべきか、邪推してしまうのはよくないと思いつつも、やはり最悪の展開を浮かべてしまう。最悪の展開こそが、大貴の推理なのだが。

「しばしお待ちを。すぐにお茶をお淹れいたします」

「ああ、平気です」

腰を上げかけた真弓を手で制した。

「早いですが、もう発とうと思つてゐるんです」

「ゆつくりしていても構いませんよ。ご予定では、発つのはお昼過ぎのほうでは」

「そうなんです、向こうに残してきた仕事を思い出したので」

少し強引な気もするが、これならば真弓も無理に引き止めることはないだろう。一宿一飯の恩を仇で返しているようなものかもしれないが、気に留めている余裕はない。この村でひとつだけ残った疑問を知り、確認を済ませなくてはならない。もしも大貴の推理が間違つていればその時に額が擦り切れるまで謝罪しよう。真弓は気に

していないかもしれないが。

「それでしたら、そこまでお送りします」

思ったよりもあっさりと真弓は引き下がった。そして、大貴の返答を待たずに真弓は玄関へと向かっていってしまった。引きとめようかとも思ったが、これを引き止める理由はない。大貴はそのまま真弓の先導のまま玄関へと向かった。

「深雪から言伝を預かっています」

背を向けたまま真弓は言った。

「昨日はすみませんでした。しっかりと説明できたかも不安です。今日は用事があつて行かれませんでした。機会があればお会いしましょう。とのことですよ」

「そうですか」

大貴は漠然と、もう会うこともないだろうなと考えていた。なんの根拠も無い妄想だが、それと同時に自信を持って断言することもできた。

「気になさらないください。お世話をおかけしました。そう伝えてください」

社交辞令として返したつもりだったが、真弓は足を止め、ふっと振り返った。ふわりと舞うような動きから微かな香水の匂いが漂い、それが大貴の思考を一瞬遮った。瞳の奥を覗き込んでいるかのようにじっと視線を動かさない。

「…わかりました」

視線の交錯は長くもなく短くもなく、真弓の小さな一言で終わりを告げた。

「ご自分で言うのかと思いましたが。その気はないのですね」

再び背を向けた真弓が呟くように言う。なんとなく試しているような響きを感じ取れたが、そこには言及せず、大貴は何も答えなかった。答えないことこそが、たぶん答えになつていただろう。

「私はここを離れるわけにいきませんので。帰り道はわかりますか」  
「ええ大丈夫です。お世話になりました」

「いえ、おかまいもせず」

最後まで言葉の片隅に冷たい印象を感じた。結局、これが大貴に對してだけなのか、それとも不特定多数に向けられているものなのかはつきりしなかった。だが、深雪と話しているときの真弓に冷たさを感じることはなかった。それも仕方ないと、大貴は見られないようにため息をつく。所詮、大貴は部外者でしかない。近付こうと考えること事態が間違っているのだろう。それでも、大貴は最後にひとつだけ悪さをしてみたくなった。真弓の反応を見てみたかった。「真弓さん」

振り返って、真弓と真正面から対峙する。思えば、何時間も向かい合わせで対峙したが、自分から目を合わせようとしたのは初めてかもしれない。真弓は変わらないの無表情だ。

「素敵な、香水ですね」

につこりと笑ってさらに正面から見据える。

「似合っていますよ」

それまで一度として女性としての一面を見せていなかった。もしかしたらそれこそが真弓に冷たい印象を与えていたのかもしれない。だが、その微かな飾りを大貴は見逃さなかった。

視線の先には、目を丸くし、言葉を失ったまま佇んでいるひとりの女性がいた。気付かれるとは思っていなかったのだろうか。放っておけば、いつまでも立ちすくんでいそうだ。その頬はたしかに朱色を帯びている。

「また、会えるといいですね」

根拠のない妄言を放って、大貴は真弓から離れていく。もう、振り返るつもりはない。

真弓の最後の表情は、きっと女性の恥じらいだろう。巫女とされて仮初めの神をただひとりで祭るようになってから、真弓はそれを隠さねばならなかったのではないだろうか。それが巫女としての役割を担う上では、最適の選択であつたに違いないだろう。それを真弓は後悔しているのだろうか。それとも、役割を果たす上での致し

方ない犠牲と考えているのだろうか。それはもうわからない。だが、巫女となつてからは意味を無くした香水を捨てることができなかつた。それを思うと、やはり真弓も犠牲者なのだろう。

それが、大貴の見た最後の真弓の姿だつた。

## 22 大貴く希望と絶望く

最初は何も感じていなかったと思う。目の端、記憶の端に紛れ込んでいたそれは、脳を揺さぶるほどのものではなかった。脳の片隅は危険信号を出していたのかもしれないが、それは優先順位のずつと下方に収まってしまっていた。なんとなく探ってみたそれは、川の流れを逆にしてしまうほどの荒波であった。

この村は謎に満ちている。そう確信したのはいつだったであろうか。浮かれた観光気分が抜けていったのは初日、真弓の話聞いた後だろう。何かあると感じたのは、愛が失踪してから。それから風上から風下へ、大貴はある方向へと導かれているような気分を味わっていた。その足で歩いていたつもりだが、それは見えない何かに引っ張られていただけだった。

そう確信できたのは、遅まきながら昨夜。真弓の歌を聞いた後だ。何故ここまで気付くことができなかったのか不思議でならない。振り返ってみれば、いくつもほこぼれはあったはずだ。おそらく綿密に計画を練っていたのだろうが、所詮は机上の空論。この隔離された場所では予想外の事態は起こりにくいかもしれないが、現実に行うすれば必ずミスは出る。それは見えていても気付かないような些細な出来事であるが、気付いてしまったら大きな出来事になる。真弓は初日、こう言った。

『全員が全員というわけではありませんが、多くのものが身を投げました。愛の祖母がこの沼に身を投げたのは、これが理由です』

身投げ沼について語ったときだ。愛について触れたのはここだけ。別になんてことはないことだ。愛の祖母があつた沼に身を投げたと、この村が噂を流しているのなら、それはなんてことない。真弓がそれを知っていること、そして身投げ沼の話題にその話題をくっつけ

てくるのも不自然ではない。

だが、真弓はいつ愛のことを知った？ 大貴が身投げ沼に行ったことは伝えたが、愛に会ったことを伝えただろうか？ 深雪も神社まで大貴を送ると、真弓と話することなく帰っていったはずだ。知るチャンスは、なかった。

もし真弓が愛の日課を知っているのなら、大貴と深雪が鉢合わせしたと考えたのかもしれない。それを予想して愛を話題に出したとも考えられる。それに大貴の口ぶりから判断できたのかもしれないが、愛の祖母の話をした覚えはない。それだけは確信と言える。仮に大貴が愛と会ったことを想像できたとしても、赤の他人である大貴に自分の身内の人間の話をするだろうか。そんなことを予想できるだろうか。

できるわけではない。

なら、どうして真弓は愛の、それも祖母の話題を出した？ 口ぶりからも大貴が知っていることを前提のような話し方だ。当然、町にそんな記録は残っていない。第一、そんな記録が残っているのならこの村の歴史は大衆の眼前に晒されているはずだ。いくら真弓が鋭くとも、これは不自然だ。

なら、真弓は何故この話題を出した？

考えれば考えるほどに、ただひとつの回答に導かれていく。いくらあらゆる可能性を潰し、回答を否定して、逆に肯定しても、ただひとつの回答に収まってしまった。

真弓は知っていた。というより、真弓だけでなく深雪も愛も圭介も勝也も裕紀も悟も知っているはずだ。愛が大貴に何を話して、何を話さないのか。いつ話して、どこで話すのかも知っていたのだ。それだけじゃない。大貴がどこに行き、誰と出会って誰と話すのかも知っているはずだ。

この考えを裏付けるものはいくつかある。まず、深雪が遠回りしたことだ。智美の墓に行く道は二通りある。近い道と遠い道。あの時、深雪は迷わず遠い道を選び大貴を案内した。何故学校の裏から



行かなかったのか。道案内無しでも、土地勘の無い大貴でも簡単に行けてしまう場所ならば、当然近い道を選ぶはずだ。遠い道を選んだのにはやはり何か理由がある。

これは確信していえることではないが、深雪は悟を避けていたのではないだろうか。あの場所に着いたときに、悟はいなかった。だが悟の存在を表すものは残っていた。線香と花。線香はすでに白くなっていたが、その場には微かに匂いが残っていた。大貴と深雪が到着する少し前まで、悟はあの場にいたに違いない。だからこそ深雪は時間をずらしたのだ。

牽強付会かもしれない。それでも、理由はある。深雪は智美の殺される現場を目の前で目撃している。裏を見れば、深雪は智美が殺される現場にしながら何もなかったということになる。これを悟が知っているのなら、悟が深雪に対していい印象を持っていないことは容易に想像できるだろう。

『時間が余ってしまいましたね』

もしかしたら、本当は近い道に行くはずだったのではないだろうか。時間が余ってしまったから遠い道を選んだ。そう考えられないだろうか。悟とは鉢合わせしないために。悟がどこにいるか把握していたからこそ。

もうひとつ、昨日の勝也の反応だ。深雪が歌について話していないことに異常なまでに反応していた。確かに古くから伝わる歌を教えなかったのは深雪のミスかもしれない。勝也が一番重要なことと考えることなら、きっとそうなのだろう。だが、勝也の言葉には疑問が残る。

『はつきりと覚えてないっすね。あれ教えてもらったのももうかなり前のことだし。もしかしたら圭介も知ってるかもしれないっすけど、小学生ぐらいのことっすから』

一番重要なことだ。だが、その歌を覚えている村民が多くないことを勝也のこの言葉が表している。それも誰が覚えているかすら定かではない。それなのに、深雪が知っていることは確信し、それを話さなかったことに目を丸くする。

早計かもしれない。だが、大貴は確信している。根拠のない確信ではあるが、すべての点をつなげる線はこれしかないと思っている。すると、ここでひとつ疑問が浮かび上がってくる。

何故、愛は失踪したのか。

すべてにおいて意味があるのなら、この愛の失踪にも意味があるはずだ。一番の争点はここでもある。愛は生きているのか、いないのか。もしも自分の意思で失踪したのなら、それは何の理由があるのだろうか。深雪や真弓の言うとおりに気まぐれでいなくなったのかも知れない。以前に何度もあったのは事実だろう。そうでなければ愛の親の態度に説明がつかない。勝也に対して死んでも守れと誓いを立てさせるほどのだ。村では煙たがる人もいるそうだが、だからこそ両親は愛を寵愛しているのだろう。それに、失踪することがわかっていいるのなら、自分の店に大貴を招待するだろうか。いくらでも否定できるが、やはり不自然だろう。

ならば、失踪したのが自らの意思でなければどうだ。誘拐か監禁されているとは考えられないだろうか。それに対する理由とは、誰がどんな理由で愛をさらっていったのか。

愛に責任を取らせようと考えてのことではないだろうか。愛は自分の祖母が村のために死んだと思っている。しかし、真相は違う。愛の祖母は村の人間に殺されているはずだ。そうでなければ深雪の反応に説明がつかない。愛に村を純粋に、大切に思う気持ちを植え付けさせ、そして復讐の材料にしようとしている。そうでなくとも、愛の命を狙っていることに間違いはない。昨夜の真弓の言葉が思い出される。

『愛も大変だと思っていましたが、これからは勝也くんが頑張ってくださいよ』

沼の清掃を勝也が代わっていたことについての感想だと思い、そのまま流れたが、この時点で愛は自分で失踪していることになっているはずだ。誰も心配する必要がないと、よくあることだとそう言っていたはずだ。

思っていた。これから。

これは愛がもう戻ってこないことを意味しているのではないかならば、愛はどこにいるのか。そして、まだ無事にいるのだろうか。

気がつけば大貴は走り出していた。気持ちばかりが急いで、足が空回りしているようにも感じる。周りの景色の動きが遅い。何度も足がもたついたが、無理やり引きずるように動かした。

ついた場所は、身投げ沼の入り口。肩で息をしていたはずが、それを前にすると呼吸が止まる思いを味わう。昨日と同じ場所のはずなのに、それは異界への入り口のように感じられる。空には雲ひとつ無く、どこまでも光を降り注いでいるはずなのに、そこだけスポットライトが当てられていないかのように存在を喪失されていた。

ここに来たのは確信があつてのものではない。だが、可能性はあると思う。ひとつに、ここは誰も寄り付かないということ。人間ひとりぐらい隠すには問題ないだろう。ふたつは、勝也だ。勝也は昨日祠の掃除をしていたはずだ。だが、その手には何を持っていただろうか。初日に愛と会ったとき、愛は軍手をつけ、その先は土に汚れ、ゴミ袋まで提げていた。それに対し、勝也は料理人を思わせるほどきれいな手をしていなかっただろうか。つまり、勝也はこの掃除をしていない。

なら、勝也は何をしにここに来たのか。勝也は確かにこう呟いた。

『姉ちゃん』

勝也はごまかしていたが、大貴の耳にはしっかりと届いていた。ここでそのように呟く理由に、何があるだろうか。選択肢は限られる。

大貴は意を決し、森の中に足を踏み入れた。

外で眺めていたよりも、中はずっと暗い。深雪と入ったときは薄暗かったが、今は太陽がぎんぎんに光を注いでいる。人が使わないと家はすぐに傷んでしまうというが、それと同じ原理なのだろうか。この暗さは、光が届いていないからという理由だけではなさそうだ。歩けないほどではないが、完全に太陽が落ちてしまえば体のどこかを傷つけてもおかしくない。大貴は足元に気をつけながら、それでも足早に進んでいった。

ここに愛がいれば、大貴は町に連れていくつもりでいた。どのような理由があるにせよ、愛は命を狙われている。そして、大貴も。

何故この村の秘密を話してくれたのか疑問に思っていたが、答えは簡単だ。話しても、この村から出さない。または殺してしまえばいい。そうすれば秘密は守られる。初日に感じた恐怖は、決して間違いはなかった。この村民のほとんどが復讐心を無くしているのは事実だろう。しかし、智美に関わりを持って人間は違う。あの真実を知り、泣き寝入りをするとは思えない。この状況で大貴にどのような役割を演じさせるつもりなのかはつきりしないが、無事ですむと楽観することはできない。なんらかの役割を期待されていると考えるべきだ。

もしもここに愛がいるのなら、誰にも気付かれずに町に連れて行くことができる。ここは町にいくことができる数少ない道のひとつだ。正規の、バスを使って帰ろうとすれば待ち伏せされるかもしれない。だがここなら時間はかかるが気付かれずに帰ることができる。町に帰って、できることなら事業の中止を進言しよう。大貴ひとりの意見でどれだけ影響を及ぼせるかわからないが、それが最良の選択だと思う。この村に対しても、町に対しても。雨乞いの村は、まだ表舞台に出るべきではない。

沼を通り過ぎ、さらに奥へと進む。ここからは大貴も知らない道だ。注意しながらも心臓が早鐘を鳴らしているのを感じる。期待と不安が入り混じったその音色は、早く鳴り止んで欲しいと望みながら、いつまでも直面したくないという矛盾を孕んで裡に響く。白かったはずの靴は、もうもとの色がわからないほどに薄汚れてしまった。

離れた位置にぼんやりと浮かび上がるものがある。大貴はさらに足を急がせた。そこにあったのは、祠だ。

なるほど、確かに祭られているというにはいささか寂しすぎるだろう。家に置いてある仏壇のほうがよっぽど立派だ。雨風をしのぐための屋根はない。いくら木々が生い茂っているとはいえ、完全に遮断することはできないのか色の変色が激しい。もとはくつきりとした焦げ茶をしていたのだろうが、すっかり薄くなってしまうている。それでも、ここを大切に思っている人間がいることには違いない。それを思うと、鼻の奥が熱くなってくる。

頭を振り払い、周辺を見回した。綺麗に雑草を抜いてある場所もあれば、まだまだ手付かずの部分もある。この一帯だけはゴミひとつ落ちてはおらず、寂しくもあるがありがたみも同時に感じる。どんな思いで愛がここを訪れていたのか、想像することはできない。情けないがこれまでの人生の何がしかに愛を位置づけるには、大貴の経験は乏しすぎた。

それでも草を掻き分け、歩き回って愛の痕跡を探した。時折ある小さな水溜りが別の何かを彷彿とさせる。幾度となく手を伸ばし、その色を確認するたびに冷や汗をかいた。

一帯すべてを搜索しては再び同じ場所を探す。それをどれだけ繰り返したろうか。大貴の耳に梢の擦れあう音が届いた。いや、それは誰かが草を掻き分けて進む音。

「愛さん？」

言葉に出してから、しまったと思った。愛がこっちから来るはずがない。音がする方向は、大貴が通ってきた道だ。愛ならばとつく

に見つけているはずだ。音の主は一度止まったかと思うと、今度はまっすぐにこちらに向かってきた。こちらに向かってくる。声ではれたようだ。

咄嗟に、大貴は音を立てないよう、細心の注意を払いながら茂みに身を潜めた。音の主はまだわからない。茂みに隠れたこともあり、向こうからこちらは全く見えなくなった。何か目的がなければこんな場所に来ないだろう。ならば、その目的を持っているのは誰だ。それは、かなり絞られるのではないか。

音はどんどん近付いてくる。迷いなくその足取りは迫ってくる、と同時にその人物が荒い息遣いをしているのにも気付いた。その息遣いを聞いて、大貴はその人物が誰か知ることができた。

予想通り、草を掻き分けて現れたのは、勝也だ。肩で呼吸しており、その顔には不安と焦慮の色が窺える。左右を見回しながら舌打ちをしているのまでわかった。もしかすると大貴を探しに来たのかもしれない。いや、そんな生易しいものではないだろう。捕らえに来たと思ったほうがいい。体格からして、見つければ大貴に勝ち目はないだろう。速さなら勝ち目があるかもしれないが、この場所では逃げ切れるとも思えない。とにかく、勝也がいなくなるまでやり過ぎしかない。

身をさらに屈ませ、体をよじろうとした。音は出なかったはずだ。細心の注意を払ったはずだ。それなのに、勝也の目は大貴を捉えた。全身から熱気が消えたように感じた。勝也の目の妖しい揺らめきが、大貴を離さない。その目の色はそれまでに見たことがない不思議な色をしていた。怒りでもない、驚愕でもない、悲しみでもない。なんの色なのか大貴には判別することができなかった。

だが、今はそんなことどうでもいい。とにかくこの場を離れなければならぬ。

踵を返し動き出そうとしたが、その瞬間、世界が反転した。脳天を突き抜けるような衝撃を受け、足元に茂っていたはずの草が目の前に広がる。頬に触れたそれは、思ったよりも冷たくて心地好かった。

視界が上方から徐々に赤く染まっていく。なにが起こったのか理解できない。朧な視線を勝也に送ったが、勝也は何もしていない。離れた位置で呆然としている。額を生暖かいものが流れていくのをはつきりと感じ取れた。少しでも離れようと体を引きずるが、その時視界の端に妙なものが映った。

小さなスコップ。その先からは水が滴り落ちている。暗くてよく見えないが、粘りけのあるそれは、スローモーションをおこしているかのように、ゆっくりと大貴の目の前に小さな溜まりを作る。意識を失う直前、見上げたそこには、どんな光よりも輝いて見えるがどんな光よりも弱い。少しの風でかき消されてしまいそうな儚い金色の髪の毛。

愛の悲しげな顔が、大貴を貫いていた。

## 23 勝也く差し伸べた手、絡まらない指く

「ごめん、姉ちゃん。こいつ突然走り出したから見失った」

愛は勝也に目もくれず、足元で倒れている大貴に視線を注いでいた。うつぶせに倒れている大貴はピクリとも動かない。不安になつて勝也は膝をつき脈を確かめてみた。人差し指と中指に確かな振動を感じる。

「好きだつて……言ってくれたのにな」

「あ？　なんて？」

見上げると、愛は指に自分の髪を巻きつけていた。巻きつけてはもどし、また巻きつけてはもどし、さらに巻きつける。勝也が見ていることに気付くと、ぱつと髪から手を離れた。

「平気よ。あたしの力でそんな簡単に死ぬわけないでしょ」

つんと間違いを認めたくない子供のようには愛は顔を背けた。それと同時にスコップを勝也に向ける。

「だいたい勝也が見失ったりするからでしょ？　この責任は勝也にだつてあるんだから」

「そりゃ悪かったよ。だけどよ、いきなり走り出すんだぜ、しかもこいつ速いし」

「尾行が下手だったんじゃないの？　やっぱり勝也のミスじゃない」

「んなわけねえつて」

「どうだか」

そこにいる愛は、いつも通りの愛だった。いつも勝也が見ている愛だった。子供みたいな体格をして、それをかなり気にしていて、だから勝也にはいつも厳しい物言いの。こんな状況でもそれは変わらない。それを勝也は嬉しく思う反面、逃げ出したくなる自分を必死で抑えていた。

「それに、遅いか早いかだけよ」

その通りだ。遅かれ早かれ三島大貴は死ぬ。それも最大級の不名



譽を背負ってもらうことになる。むしろ何も知らずにこの場で死んだほうが幸せなのかもしれない。死ぬのに幸せもくそもないかもしれないが、少しばかりの救いがあるかもしれない。たとえば、本人が気付かなくとも。

「しかしよ、こいつは何でここに来たんだ？」

勝也は気になっていた疑問を口に出した。予定ではバス停あたりまで一人で歩かせ、頃合いを見計らって襲う予定でいた。そのために大貴が神社を出るときから尾けていたのだ。

「こいつ、予定よりもかなり早く神社から出てきたんだよ。そしたらいきなり走り出しやがって」

「あたしを探しに来たんじゃない？」

「姉ちゃんを？」

「なんか探してるみたいだったのよ。とにかく驚いたわ。いきなり入ってきてその辺歩き回るんだから。昨日も来たんでしょ？ あんたのことみて思いついたんじゃない？」

勝也は言葉に詰まって視線をそらした。それを見て愛は大仰にため息をつく。

「ダメね、あんたは。危なく逃げられるところだったじゃないの」

「そうだけだよ。あんなことだけで、よくわかったよなこいつ」

「思ったよりも頭がいいのね。もしかしたら、あたしらの計画も気付いてるんじゃない？ じゃなきゃこんなところに来ないだろうし」

「そうかもな。こいつ、結構わかってるみたいだ。昨日の夜の態度があからさまに変だったって、真弓さんが言ってたぜ」

今朝、真弓は香水をつけていた。勝也はなんとなくそれを思い出していた。

勝也が子供のときから真弓はたった一人、あの神社で暮らしている。記憶に残っている真弓の瞳は、いつもどこか冷たい色を湛えていた。勝也たちへの口調がいくらやさしくても、その瞳だけは偽れない。あそこで歴史を語り継ぐたった一人の巫女。それはもう洗脳

といってもおかしくない。なくなった復讐心も、真弓だけは刷り込みのように幼い頃から植えつけられていたと聞く。

ある時、何をしていたときは思い出せないが、勝也は何気なく聞いたことがあった。

「真弓姉ちゃんって、まだ復讐を考えてるのか？」

ずっと小さかったところで、まだ神社に遊びに行っていたころ。年齢ははつきりと覚えていないが、とにかく小さかったころだ。おぼろげながら掴み始めていた雨乞いの村の歴史を披露したかったのかもしれないし、ただ、ふと思いついたことが口から出たのかもしれない。言葉を選んで喋る間柄ではなかったら、たいした理由はなかったのだろう。

真弓は長い髪の毛を揺らして振り返った。この時の真弓は、勝也同様に今よりも幼い顔をしていた。

「何でそんなことを聞くの？」

勝也は答える。

「だって、真弓姉ちゃんって巫女なんだから。だったら考えてもおかしくねえよ」

「勝也君はどう思っているの？」

「俺？ 別にわかんねえよ。復讐なんていつても、もうずっと昔なんだろう？」

「そうよ。ずっと、昔のこと。でもね」

真弓は言葉をためて、一度目を閉じ、再び目を開けたときには、その色は変わっていた。当時の勝也では思いつく色がなかった。ただ、真つ暗闇の廊下を進むような、そんな恐怖が全身を襲っていた。「でもね、それが私の役目なのよ。役割なの。この村の本当の意味を失わせない。この村で唯一、たった一人しか受け継ぐことのできない重要な役割なの。ずっと昔から、私の血筋に与えられてきて、一度たりとも、果たすことのできていない役割なの。勝也君の役割はなんだったかしら」

「……俺は、店を継ぐことだけど」

「そう、あなたの家は定食屋。それを継ぐこと。それに、あなたには新たに愛を守ることも与えられている。それは決して、愛を可哀想に思っているからじゃない。きたるべき時のために、私が果たすべき役割、悲願を達成するためのひとつの鍵でもあるの。それが使われるかどうかは別。でもね、あの過去を、愛に知られてはいけない。他の村民に知られてはいけない。わかるでしょう」

諭すような優しい言葉。勝也は黙って頷いたが、勝也の背中には冷たい汗がびっしりと珠のようになって流れ落ちていた。ぬぐってもぬぐいきれないほどに。

いい子ねと言つて、真弓は庭に視線をそらした。

「私だけはね、忘れてはいけないの。廃れさせてはいけないものつてあるでしょう？ 村の忠実な歴史は、守られなくてはいけないの。もう必要のないことかもしれないけれど、でもね、もしもこれが無くなつてしまつたら、この役割を終わりにしてしまつたら、私は何をするために生まれてきたのかしらね」

「……嫌なのか？」

「嫌じゃないわ。でもね、ときどき叫びたくなるときもあるの。恥ずかしいことだけれどね。それでも、こうやってみるとわかる。ああ、私の役割はこれなんだつて」

その時の真弓の目は庭を見ているはずなのに、もつとずっと遠くを見ているように思えた。勝也は何も言えず、ただ真弓の視線の先を見ようとしていが、勝也には何も見ることができなかった。

後になって、たぶん、あの先のものが見えるかどうか、それが真弓と自分たちとの違いなんだろうと思うようになった。どれだけ目を凝らそうとも、勝也には見ることができない。真弓に尋ねればきつと、見えないほうがいいというかもしれないが、勝也は真弓と同じ景色を見てみたかったと、ほんの少しだけ思う。だから、あの神社に行くたびに勝也は目を凝らして見てしまう。真弓が見ているその先を。一度として、見えたことはないが。

その真弓の役割も今日で終わる。真弓が役割を果たすわけではないが、役割の根幹を担うことになる。真弓の心が何を思っているのかわからない。もしかすると、役割を果たさずにいることのほうが幸せなのかもしれないが、ただ、今日の真弓は巫女ではなく、ただの女性だった。それは、そう思っているのだろう。

「姉ちゃん」

その時の真弓の姿が、目に焼きついて離れない。巫女の仮面から垣間見えた真弓は、今までよりも、ずっと綺麗だった。そのまま時間が止まってほしいと、願ってしまうほどに。

だからなのだろう。勝也は限りなく時を止めることに近いことをしたくなった。真弓を、巫女ではなく、これからもずっと女性でいてもらいたくなった。

それに、愛も、もうこの村に縛られることはない。

今なら、まだ間に合う。計画の全貌を知っているからこそ、確信することができる。ここでなら、計画はまだ白紙に戻せることを。新たに計画を作り直すことができることを。

「姉ちゃん、こいつと、町に行けよ」

「えっ」

愛は鳩が豆鉄砲を食らったような顔になる。そんな顔を見ると、ますます子供っぽく見えてしまう。そういつと、きつとこんな状況でも愛は怒るのだろうか。

「ここに俺とこいつがいるのは、まだ誰も知らない。今ならばれずに抜けられるはずだ。この先まっすぐ。姉ちゃんが見つけたルートだろ。俺は誰にも言っていないから、きつとまだ誰も知らないはずだ。だからさ、」

「馬鹿だね、勝也」

愛はやわらかい笑みをみせた。出来の悪い子供を見るような目で、勝也を見上げている。勝也の胸ぐらの位置から見上げているはずなのに、愛はずっと上のほうから勝也を見ているような気がした。

「もう、今さらだよ。ここまできて逃げるなんて、できるわけない

じゃない。あたしがいなくちゃ、この計画は成り立たないんだから。それに知ってるでしょ。あたしはこの村が大好きなんだって。この村の外で生活するなんて考えられない。あたしができる最大の恩返しだよ」

「知ってるさ。姉ちゃんがこの村が好きなことなんてさ。でもよ、それは」

それは作られた感情なんだと。知らないからこそ、そんな顔をして笑えるんだと。

「姉ちゃんは知らねえだけなんだよ……」

それ以上言うてはいけない。そう理性が叫んでいながらも、欲求に抗うことができない。奥歯を噛み締め、胸が熱くなったとき、勝也は勢いよく顔を上げた。

「あね」

「知ってるよ」

勝也の言葉はあっけなく遮られた。愛の小さな手が勝也の胸に当たられていた。

「ごめんね。こんなに辛そうになるまで、騙しててね。でもね、あたしみんな知ってるの。おばあちゃんが自殺したんじゃないってこと」

愛はにつこりと笑った。呆然としている勝也に向かって、につこりと微笑んでみせた。まったく裏表のない、誰よりも、純粹な笑顔で。

「その、先もね」

「ごめんねとそう言うて、愛は勝也を優しく突いた。

「みんなに、本当に少しの人だけが知ってて、あたしに気を遣ってくれたのも知ってたよ。だから、本当は調べるべきじゃなかったのかもね。でもね、あたしどうしても知りたかったの。おばあちゃんがどうして死んじゃったのか。たまに、あたし調べてたの。内緒でね」

勝也は思い出した。愛がよく失踪することを。

なんとなく気まぐれな姉だからそういうこともあるだろうと、気にすらしていなかった。家に帰ってきたときに尋ねても、おいしそうな山菜を見つけたただの、星が綺麗で見上げていたただの、テントの中で寝てみたかったただの、その程度のこと。最近は何をしていたのかも聞いていない。

「ほんとうに、ごめんね。勝也」

「……ばか、そんなの、俺の台詞だよ」

泣きたくなった。心のどこかで愛のことを哀れに思っていた。それと同時に、きっと美化していた。この悲しい物語を背負っている自分自身を。

作り笑顔なんかじゃなかった。いつもいつも、怒っているときですらも優しくかった。この村を大好きだと言って、自分の髪が大好きだと言って、やっぱり笑った。背が低いことをちよっぴり気にしていて、一部の村民の視線を少しだけ悲しく思っていて、智美が殺され、この作戦を考えた時も、率先して犠牲になることを選んでくれた。この感情を利用しようと、決して愛には真実を漏らしてはいけないと、こそこそと画策もした。

でも、そんなことをする必要などまったくなくて。そんなことをしなくても、わかってきていた。偽りで固められたこの村ですら、大好きだといってくれた。祖母が殺されていたとわかってても、祖母がこの村を嫌悪していたとわかってても、笑ってくれた。そして、その先を知っても、変わらなかった。

「だめ！」

近付こうとした勝也に、愛は鋭い声を発した。木々が震えるほど、空間に響き渡る。

「近づいちゃ、だめ」

それでも、愛は笑っていた。左右にツインテールにされた金髪をなびかせて。

「勝也には勝也の役割がある。あたしにはあたしの。わかるでしょ？」

「でも、でもよ」

「ごめんね、辛い思いをさせるね。でもね、あたしはこの村、なくなつてほしくない」

愛は眉根を下げて泣き笑いの表情をみせる。辛いんだろう。愛だつて、辛いじゃないわけがない。それなのに、笑ってくれる。勝也のこゝとを、最後まで弟のことを考えてくれる。

わかつている。そんなことはわかつている。ここで、この一步を踏み出せば、きつと覚悟を失う。前に進まずに、一步後ろに置いていつてしまふ。それは勝也だけではない。愛も、そう思っている。だから、ここでおしまい。

でも、

「じゃあさ、笑ってくれよ」

「えっ」

「そしたら、もう、いくよ」

涙を流さないように、必死で押さえるけれど、体の中に油を注ぎこまれたような熱さが全身を駆け巡る。体内が燃えているのがわかる。汗が押さえられるものではないのと、同じだ。

顔を伏せて、下から見られているのだから、上を見たほうがいいのかもしれないけど、でも、上を見たら、顔を見れないから。情けない顔を晒すことになるかもしれないけど、晒しているけれど、最後の、最高の顔を見たいから。視界が曇らないように、しっかりと目を拭つて。

「しょうが、ないな」

安くないよと言つて、愛は口元を隠して小さく笑うと、一度目を閉じた。そして次に顔を上げたときには、無邪気な、とびっきりの笑顔を見せてくれた。もろくて、儚くて、手に乗せた砂よりも捕まえることが難しいけれど、

二度と、忘れない。

「うん」

勝也は背を向けた。もう限界だった。そのまま、ゆっくりと離れる。この期に及んで、勝也の足はいうことをきかず、少しでも気を抜こうものならすぐに方向転換しようとする。それでも、愛の笑顔を思い出して、一步一步進む。勝也の顔は見る影がないぐらいにぼろぼろで、上を向いていても、流れ落ちてくるものがある。止まらないし、それを止めようとも思わなかった。

勝也は自分の弱さを呪った。強くなることのできない自分を呪った。守るべき姉を自ら谷底に落とす決意をしたことを……。そして、愛の強さを羨ましく思った。最後の瞬間までも笑ってくれたその強さを。

勝也の背中を愛はどのように見ていたのだろうか。喜びだろうか、憎しみだろうか、悲しみだろうか、誇りだろうか、羨望だろうか、期待だろうか、恐怖だろうか……。

愛は村民でありながら、村民ではない。それと同時に、町の住人であることも赦されない。時には自分を見失ってしまうのではないかと思える境遇でも、愛はまっすぐに前を向いていた。

それでも、最後の最後に、ほんの少しだけ後ろを振り返っても、それを誰が責められようか。誰よりもこの村を思っていて、誰よりも他人を思いやっていた愛が、誰よりも疎まれ、最後には利用されている。

そんな中でも、愛はまっすぐ前を向いていたのだ。愛を救おうとしてくれた人を拒絶し、勝也の差し伸ばした手を振り払うほどに。それは、愛が何物にも代えがたい、望みでもあつたはずなのに。

だから、愛は泣いた。大粒の涙を零して、ひたすら泣いた。



## 24 圭介とそれぞれの想い

姉貴は後悔しているのだろうか。

圭介は漠然とそんなことを考えていた。

この計画を実行に移していたこの数日間、真弓の表情は穏やかなものだった。他人にはわからないかもしれないが、弟だからこそわかるものというのは存在する。安らいでいたのだろう。ようやく解放されると、呪縛から逃れられると。

いや、そうじゃないか。

圭介は耳につけたピアスに触れた。いくらか冷たくなっている。先ほどまで心地よかった夜風も、いい加減冷たくなってきた。もうそろそろ、すべてが終わる。もしかすると終わっているのかもしれないが、それでも、もはや本当の意味で後戻りなどできない。

真弓は、真弓にとって巫女というのは、呪縛ではなかった。その役割は真弓にとっての救いだったのだろう。今更ながら、それを理解することができる。

この世界、どれだけの人間が人生に誇りを持って生きているだろう。きっと多くは考えるだろう。自分がいなくても世界は回ると、自分の代わりなど吐いて捨てるほどにいます。だが、真弓の代わりはいない。巫女の代わりをできる人間は、この世に誰一人としていない。世界に必要とされている人間。それが、世間において蔑まれる行いであつたとしても、人によっては救いとなるだろう。少なくとも真弓にとつて、それは救いであつたのだ。最後の最後、ほんの少しだけやりたかったことを思い出したのかもしれない。それでも真弓に迷いはなかった。それは圭介にとって、口に出したりはしないが、ほんの少しだけ悲しいことだったのだが。

「そろそろ中に入ったほうがいいんじゃない？」

本殿の扉が開いて、中から裕紀が顔を出した。弱弱しい微笑を浮かべている。裕紀の内心を、圭介は手に取るようにわかる。誰も彼

も、後悔無しにこんなことをしていない。

「ああ」

裕紀の言葉に従い、圭介も本殿の中に入った。扉を閉めると、本殿の中は小さなランプがひとつ。ちろちろと風の流れに従って影を揺らす。悟と勝也も各々黙り込んで腰を落としている。表情は窺えないが、その内心は裕紀同様に慮ることができた。何もいわず、圭介は適度な距離をとって腰を落とした。

昔は雨の神の像でも祭っていたのかもしれないが、今ではただっぴろい空間が広がるだけ。それでも、隅々まで掃除は行き届いている。誰も参ることのない神社。それを生まれたからずっと守り続けていた姉貴は、いつもここに入っては何を思っていたのだろうか。

その部屋の隅。糞虫のように横たわる影が動いた。ようやく起きたようだ。圭介は裕紀に視線を向けると、裕紀は頷いてそれに向かつて歩み寄った。

「起きましたか」

裕紀は横たわったままの三島大貴に語りかけた。その様子を圭介はぼんやりと眺める。裕紀の口調には冷ややかさがこもっているが、三島大貴を軽蔑しているわけではない。裕紀は自分自身を軽蔑しているのだろう。自分が立てた計画が、自分の姉を殺すことになってしまったのだから。

「こ、ここは？」

「本殿です。中に入るのは始めてでしたよね」

三島大貴が沼に現れたことにはかなり驚いた。それでも勝也が機転を利かせてくれたようだ。異変を感じ、圭介が駆けつけたときには、三島大貴は両手足を縛られ、地に伏せていた。その後の行動を思案したが、そのまま日暮れを待ち、リアカーでここまで運んだ。村民の行動は把握しているため気付かれることはない。途中で目を覚ませば厄介なことになりそうだと考えたが、幸いなことに三島大貴は一度として目覚めることなく神社にまでたどり着いた。

「平気だったぜ」

神社にたどり着き、一息つくとな勝也は言った。

「こいつは、姉ちゃんに何も言っただねえよ。姉ちゃんと会う前に、俺が殴って止めたからよ」

「そうか、ならいいんだが」

正直それが一番の不安要素だった。愛があの実実を知ってしまったら、この計画は一気に崩れ去ってしまう。昨日の段階で三島大貴が真実に近いところまでたどり着いていることは悟から聞いているゆえに警戒はしていたのだが、詰めが甘かった。

「悪かったよ。俺と悟が深雪さんもこいつも監視してたんだから、もつと警戒しとくべきだった」

三島大貴がこの村に現れてから、悟が圭介のどちらかが必ず後を尾けていた。だから昨日、三島大貴があの実実に至った段階ですぐに取り押さえることも考えたのだが、その考えは裕紀によって棄却された。三島大貴は神社を去り、その身を村民に晒さなくてはならない。些細なことではあるが、それは重要な計画の一部でもある。結果的に自滅する形になったのだが。

「気にすんなよ。危なかったが、うまくまとまったことだし、むしろ俺らにとつちや都合よくなったぐらいじゃねえか」

「まあ、そうではあるな」

話している間中、勝也はそっぽを向いたままだ。今にもポケットからタバコを取り出しそんな風情を醸し出しているが、勝也は喫煙者ではない。変わりにポケットから出てきたのは小さなタオルだ。額に当てると、勝也は大きく息を吐くと、肩を落とした。

「しかし、よく気付いたよね。そんなにヒントがあったとは思えないんだけどさ」

「全部は知らねえみたいだぜ。ばあちゃんが自殺じゃねえってここまでだ」

「まあ、そうだよな」

圭介も息を吐いた。どうやら思っていた以上に疲れているようだ。役目の大部分が終わり、ようやく疲れが表層化してきたのだろう。

肉体的によりも、精神的にひどく参っているのがわかる。

「俺だってその先は言われないと気付かなかったしね。いくら頭の回転が速くても、あれには気付かないか。それに、向こうの常識に縛られていたら、こんな考えできるわけないか」

「俺だってそうだ。じいちゃんがばあちゃんを殺したって言われても、全然ぴんとこなかったしよ」

「ピンとくるやつのほうが、どうかしているさ」

愛の祖母は、愛の祖父に殺された。それが良い悪いの二つで判断するのなら、やはり悪いことになる。圭介はその瞬間に立ち会っていない。というより生まれていないのだから当然だが、愛の祖父は泣いていたそうだ。泣きながら、自分の妻を殺したそうだ。

それを真弓に聞いた後、厳しく口止めされた。巫女になってから、真弓は感情を表に出すことは無くなっていた。怒ったり、泣いたり、笑ったりすることがあっても、それに中身は伴っていない。仮面のような表情しか見せなくなった。幼い時はまだ無邪気に笑っていたと思う。遠い昔の記憶の中、真弓は圭介に笑いかけてくれている。

いつだっただろうか。圭介が神社を尋ねたとき、真弓の顔から感情は欠落していた。笑っているはずなのに、遠くを見ているような心ここにあらずといった風情があった。最初は気にしていなかったと思う。そんな日もあるさぐらいに楽観的に考えていたが、欠落した感情はその日以降戻ってくることはなかった。その日を境に、真弓は人としての何かを失った。

今ならわかる。真弓はその日、雨乞いの村のすべてを知ったのだろう。きっと、愛の祖父母のことも。だから、その行動は一種の自己防衛のものだったのかもしれない。感情を持っていたは、耐えることができなかった。役割を全うするためには、感情を棄てなくてはならなかった。だが、そのときの圭介はそれが理解できなかった。理解できなくとも、納得すればよかったのかもしれないが、そんな物分りのいい子供ではなかった。

圭介はどうしても真弓の感情を元に戻したかった。そのための手

段として、圭介は荒れるという手段をとった。面倒そうに歩いたり、親のタバコをくすねて神社でふかしたりもした。待ち針でピアスの穴を真弓の目の前であけてやったりもした。

その結果、真弓は感情を表に出してくれた。真弓は、耳から血を流す圭介を見ながらこう言った。

「困らせないで」

笑っているように、泣いている顔で。

今となつては遅いことだが、やはり圭介はもっと早くに気がつくべきだったのだ。真弓は感情を殺したことに。感情を殺して、殺したことすらも忘れようとしていたことに。誰よりも苦しんでいたのは真弓であり、誰よりも過去に囚われていたのもまた真弓であったことを。

圭介は耳のピアスに触れた。これは戒め。愚かだったあの頃を思い出すためにも、自分を律するために印として残した。あの日以来、姉貴を姉貴としてみることをやめた。それが良かったのか悪かったのか今でもわからない。ただ、後悔はしている。もしもあのまま愚かなままでいれば、感情を殺そうとする真弓を元に戻すことができなければ。もしかすれば違う結果になっていたのではないかと思わずにはいられない。

「でもよ、あいつがこのことに気付かなければ深雪さんは止めてたかもな」

「……そうだろうな」

悟は智美さんの墓標の傍で話す二人の会話を盗み聞きしていた。その時の深雪の様子ではどうもそうらしい。二人を尾行していたとはいえ、会話すべてはさすがに把握できていない。把握しきれていない部分でどの程度の信頼が生まれていたのか知れないし、三島大貴という人間が立派な人間なのかもしれない。もしかすると味方になる可能性があるのかもしれない。

それでもあの掟だけは知られてはならない。身内の不始末は身内がつける。当たり前のようにも思えるが、事実、この村の多くの家

族はあまり意識せずに子供に教えている。だがこれはどのような行為を強要され、どんな結果を招くことになるうとも逆らうことはできない掟。愛の祖母を祖父が殺した理由はこの掟にある。もしもこの掟が、日常生活に溶け込んでしまっているこの掟の真の姿を村民が知ってしまったら、村民はこの村を離れるだろう。過去とは違い都会に行くのは容易であり、都会で暮らさずとも他の村へ行く事だって可能だ。そうなれば、この村は機能しなくなってしまう。復讐を果たすことはできなくなってしまう。

いや。

圭介は復讐を重要視していない。圭介の背筋を伸ばし前を向かせているのは真弓の存在のみ。真弓が巫女だから。真弓が復讐を果たすことを役割としているから、圭介は復讐を果たすために邁進する。圭介が真弓に対してすることのできる唯一のこと。

「勝也はどう思っているのさ」

「何がだ？」

「三島大貴についてだよ。君は彼が死ぬべきだと思っているのか？」

死という言葉に勝也は眉をひそめたが、あっさりと勝也は答えた。

「おまえと一緒にだ。死なないにこしたことなんかねえよ」

「……そうだね。なら、何故止めなかったのさ。誰にでもこれは止めることができたのに、どうして止めなかったんだ」

深雪は三島大貴と誰よりも会話をすることができた。三島大貴がこの計画に不適當だと全員に報告すればよい。それが偏見や欺瞞に満ちていたとしても、それは誰にもわからない。

悟と圭介は二人を尾行していた。この計画には智美の復讐という重要な側面もある。悟は尾行の結果、三島大貴がこの復讐に適していないと判断し、計画を中断するよう進言することもできる。圭介も同様だ。仮に深雪と意見が食い違ふことがあったとしても、もともと計画に対して積極的でない深雪が二人の計画に対する否定的な言葉を拒絶するわけがない。些か疑問を覚えるかもしれないが、口裏を合わせることだろう。

愛はそのまま失踪してしまえばいい。愛の存在がなければこの計画は実行できない。三島大貴が町に戻るまで姿を消していれば、計画を実行することはできない。だからいつでも計画を中断できるように愛を拘束せず、誰にも悟られずに逃げることのできるゴミ沼に潜んでいたのだ。

勝也は最後の最後。三島大貴を捕らえなければいい。三島大貴の体格がいいわけではないが、成人の大人一人を捕らえるとなればそれなりの力が必要だ。勝也の力が絶対に必要というわけではないが、村民に目撃される危険は増すだろう。

真弓は歴史を語らなければいい。適当に町の人間が好みそうな歴史を語り、満足させるだけでいいのだ。だが、どうやら真弓は最初からこの計画を中止させるつもりはなかったようだ。引き返すことができないように、三島大貴に対し初日の夜に生贄について語ったことからそれが窺える。

明確な機会がないのは裕紀だが、深雪に対し中断を進言する。または深雪に代わり村を案内する役割を請け負えば可能だ。計画した張本人であるためわざと自分にその機会を与えなかったのかもしれない。

裕紀は言った。

「誰にでも止められるから、誰も止めることはないよ」

事実、その通りの結果となった。授業において解ける問題に手を挙げない心理に似ているだろう。誰かが止めてくれるかもしれないという浅はかな期待がその手を挙げさせることを婉曲的に封じている。

圭介の問いに、勝也は答えなかった。もともと答えを期待していなかったから、そのままそこで会話は終わった。ただ、勝也は誰かが手を挙げるのを待っていたわけではないと思う。勝也はただ、愛が手を挙げるのを待っていたのではないだろうか。圭介は真弓が手を挙げることを望んでいたのと同様に。

裕紀が三島大貴と話しているのが耳に入ってくる。傾けるまでもなく何を話しているのかはわかる。自分たちの計画について残らず話しているのだろう。もはや隠す理由もない。どうせ明日まで生きることができないのだから。

本殿には観音開きの扉以外には換気用の小窓が一つだけ。それには木の格子がついている。その隙間から夜空を眺めることができた。空は刻一刻と変化を続ける。星は次第に移ろい、山々は染まり枯れる。親は子を育て、子が親を支える。当たり前前の情景。町が捨て去っていった遺物でも、この村では当たり前のようにそれを眺めることができる。

それを支えてきたのがこの神殿。雨の神。

この村の民にとって、雨の神はこの村から多くの命を奪い去っていった。それでも、かけがえのない、何物にも変えることのできないものを残していつてくれたのではないだろうか。拝むことはできない。崇めることもできない。だが、心の片隅に置いておくことはできる。雨の神がいるとするのならはこの状況をどのように考えているのだろうか。再びこの村に復讐を生み出そうとしている圭介たちの行動を。

ふと風の流れが変わった。室内に澱んでいた空気が一掃されるように風が渦を巻き圭介の前髪を揺らす。緊張のためか額に滲んでいた汗に風が触れ心地よく体を冷やす。どこか遠くで荒々しく土を踏み音が聞こえる。野良猫が喧嘩でもしているのだろうか。

違う。

それに気付いたのは圭介だけではない。全員がほぼ同時に異変に気付いた。皆が一様に目を向けた先。本殿の扉を荒々しく叩く音が耳に響いた。



## 25 大貴く歪む真実く

ここは、どこだろう。

頬にひんやりとした感触が伝わる。微かに香る古い木の匂い。これはどこかで嗅いだことがある。体を動かそうとするが、全身が疲れているのか、うまく動かない。もしかしたら疲れすぎて床に倒れこんでしまったのかも知れない。これでは明日の仕事に差し障りそうだ。

頭を動かそうとすると激痛が走った。それと同時に、一気に思考がクリアになる。

違う。

まだここは雨乞いの村だ。沼にいつてから、それからどうした？あの後からどれぐらい経って、ここはどこだ？

「目が覚めましたか」

重くなった瞼を開くと、そこには裕紀が感情のこもらない目で、しかしその顔はいつもの微笑のまま大貴を見下ろしていた。

「気分はどうですか？ まあ、もうどうでもいいことですけど」

「……ここ……は？」

「本殿の中です。もう一步のようでしたね。頭のいい人だ。かなり焦りましたよ」

その言葉とは裏腹に、まったく感情の起伏が感じられない。ぼんやりと薄く靄がかかったような視界が鮮明になっていく。大貴が倒れているのは板貼りの部屋。道場を連想させたが、道場ならばあるはずの神座や道場訓が設けられていない。二十人は入れそうなスペースに家具といったものは小さなランプを除くと何一つとして置いていない。生活感が欠如しているというよりも、生活すらしていないように感じる。ただのお飾り。雨の神。

昔はここを生活スペースとしていたという話だが、その片鱗すら窺うことができない。掟の縛りが弱くなったことで過去と、雨の神

と決別したいとでも考えたのだろうか。それでも掃除は行き届いている。部屋の隅にうつ伏せで倒れているが、埃っぽさは一切感じられない。

改めて部屋を見回してみると、裕紀以外にも人影が見えた。明かりの加減で見えなかったが、圭介に勝也と悟だ。悟は壁にもたれかかり膝を立てると、その間に顔を埋めていた。泣いているのだろうか、肩が小刻みに震えている。圭介はこの部屋にあるただひとつの、格子がはまった窓から外を眺めている。勝也はこちらに背を向けたまま胡坐をかいていた。後ろからでもわかるぐらいにその背筋はピンと伸び、何かを待ち構えているような堂々としているように見えたが、それと同時にひどく背中が小さく見えた。言うなれば、大貴に勝也の態度は虚勢のようにしか映らなかった。祭りの後の無気力感のようなものがそこにはたちこめている。

「もうすぐすべてが終わりますよ。少し窮屈でしょうけれど我慢してください」

そこでようやく大貴は自分が拘束されていることに気付いた。猿轡や目隠しをされていなかったのがせめてもの救いだが、それでも両手は後ろ手に縛られ、自由に動くことはままならない。それ以前に頭の傷のせいで動く気もしないが。

「すべてが、終わる？」

「そうです。僕らにとつては始まりですけどね」

意味ありげに裕紀は言うど、少し離れて床に胡坐をかいだ。

大貴は何とかして拘束を解こうともがいてみるが、きつく絞められたそれは逆に大貴の腕を傷つけるだけであり、動くたびに頭にも鋭い痛みが走る。

「聞きたいことがあるんじゃないですか」

そんな大貴を尻目に、裕紀はどうでもよさそうに、だがその口元には微笑を浮かべて話しかけてきた。

「何でもお答えしますよ。もう隠す意味がありませんから」

につこりと、この場には場違いなほどの笑顔を裕紀は浮かべる。

少し前までは無邪気な笑顔と心地良くも思っていたが、この笑顔には底知れぬ、恐ろしさがある。

「……………」

「どうしたんですか？ 何もありませんか？」

「…………… 君たちは、復讐を考えているんだろ？」

こんな状況になると大貴は予想がついていた。予想がついていたからこそ、大貴は逃げ出したのだ。もしもあの時、大貴が一人で逃げることを選んでいたならば、このような状況にはなっていない。だがひとつの、ただ一人の予想外が、大貴の歯車を狂わせた。この状況、限りなく大貴は不利だ。というより、もはや絶望的に近い。「気付いていましたか。まあ、そうだろうとは思っていましたがね。それに気付いたのはいつですか？ 予定だと行動に移されるほど感づかれるとは考えていなかったのだ」

この場には不釣り合いな、無邪気な知的好奇心。裕紀はそれが本当に不思議でならないのか、腕を組み唸り声を上げた。

「僕の予定だと、いつて半信半疑。確信を持つほどのミスはなかったはずなんですけどね」

大貴の考えを知ってか知らずか、裕紀は人差し指を顎に当てた。その考える仕草は、深雪もやっていた仕草だ。何故だが、ふつつと込み上げてくるものを感じた。

「あれだけこの村の歴史を吹聴したんだ。綻びはいくつもあったさ」  
ひとつひとつは小さかったかもしれないが、積み重なれば、繋がればそれは大きな穴になる。計画など、所詮は机上の空論。紙の上では完璧であれ、そんなものを完璧にこなせる人間がこの世にどれだけいるか。

「何よりも、深雪さんが一番大きかった」

大貴と一番接触時間が長かったからだろう。いくつも無造作に綻びは散らばっていたが、深雪のおかげでいくつかの点を線で結ぶことができた。さらに深雪が作った綻びは、勝也、真弓にも繋がりを持たせてくれた。

「やっぱりね」

大きく、それもわざとらしく裕紀は肩を落とした。額を押さえる  
と頭を左右に力なさそうに振る。

「だから、僕がやるべきだったんだよ。もう今更なんだけどね。そ  
れに結果的には限りなくいい方向にむかっているし」

「やっぱりって、気付いていたのか」

「そりゃそうですよ。圭介と悟から聞きました」

圭介と悟。

ここで作ってくるには不自然ではないだろうか。その二人は大  
貴がほとんど絡んだことがない。悟にいたっては一度顔を見ただけ、  
それも遠目から。かといって圭介も話というほどの話もしていない。  
悟に比べて会う回数が多かったという程度だ。裕紀が大貴を騙して  
いるとも考えられるが、この状況で大貴を騙す利益が向こうにある  
とは思えない。なら、やはりあの二人が大貴の何かを知っているの  
だろう。

「この二人に、何度会いましたか？」

意味ありげに、裕紀の頬が吊りあがる。試しているのだろうか。

二人とも会った回数は少ない。悟とは学校でしか会っていない。

それも遠目から。圭介とは神社で二度会ったが、後は悟と一緒にい  
るときだろう。それぐらいしか……………

違う。圭介とはもう一度会っている。深雪に智美の墓を案内しても  
らった時。学校で会っている。あの時はすぐに去っていつてしまっ  
た。ただ単に嫌われているだけかと思っていたが、そうだ。なんで  
圭介はあんなところにいたんだ。それにあの時の表情は嫌っている  
というよりも、驚いていたはずだ。圭介も何か考えがあつてそこに  
いたと考えるべきなのか。とすると、なぜあそこに。

「そうか」

会った回数の多さではない。少なさにこそ着目すべきだったんだ。  
「監視、していたのか」

「ええ、そうです」

「智美さんの墓にいたときもか」

裕紀は頷いた。あの時の光景を悟と圭介、位置的から考えて悟が見ていたんだろう。

「それだけじゃないですよ。というより、あなたの行動はすべて監視させていただきました。これは姉さんにだけは知らされていなかったんですけど」

「深雪さんにだけ……？」

それはどうということだろう。深雪も計画の一端というより、かなり主要な部分を担っていたはずだ。なんたって直接大貴に接触していたのだから、それは当然だろう。それなのに、深雪には秘密にされていたとは、何か意図があつてのことだろうが。

「姉さんは、優しかったんですよ」

裕紀はため息をつくように言った。

「というより、決心が鈍かったんですよ。だから、最後まで迷っていました。あなたに村の歴史を話そうと進言したのも姉です。姉さんは情報収集のためだとか言いましたが、本当はあなたのことを試していたんですよ」

「試す？」

「殺すべき人かどうかをね」

その言葉になんの力が込められていないことに、大貴の全身に戦慄が走った。当たり前前のことを口にするのに、人は感情を込めようとしてない。つまり、そういうことなのだろう。

「智美さんが殺されるところを止めなかった。自分が原因だから、この計画に反対することはできなかった。それでも、あなたが善人なら、あなたが僕らの力になってくれるなら、この計画を断念することもできるのでは。たぶんそんなことを思っていたんですよ。姉さんはいくらか揺り動かされたみたいですが、最後にあなたが気付いちゃいましたから」

「気付いた？ 何に？」

「愛さんの祖母は自殺なんかではないってことですよ」

それは確か智美の墓の前で深雪と話したことだ。あの時、深雪は突然涙を流し始めた。それは、そういう意味だったのか。この計画を断念させようと、誰も死ななくていい道を探そうと模索していた。それなのに、大貴が気付いてしまった。道が、断たれてしまった。だからこそ、涙だった。深雪は、大貴のことまでも考えていてくれた。

「……そうだ、愛さんは、どうして」

あの時、愛に目もくれず逃げ出せばもしかしたら可能性はあったかもしれない。だが、大貴は愛を助ける道を選んだ。一番救うことのできる可能性があるのは愛だったから、大貴はあそこへ向かった。騙されているのだと思っていたから。愛は裕紀たちに利用されているのだと、純粹にこの村のことを思わされているのだと、そう思っていた。でも、大貴を襲ったのは間違いなく愛だ。見間違えるはずがない。あの時のあの姿は間違いなく。

「姉ちゃんは全部知ってたぜ」

低く、圧力をかけるような声。これは、勝也だ。視線は中空を眺めているものの、こちらを向いて話している。

「あんたが気にすることじゃねえよ」

吐き出すように答えたその声は、何故か寂しそうに大貴の耳に届いた。悔やんでいるような、願っているような、そんな響きを感じる。一瞬、勝也は大貴に目を向けた。その目には、やはり裕紀たちとは違う。別の色が見える。それが何を表しているのか大貴にはわからないが。

「愛さんはどうやら全部知っていたみたいですね、これは村民もほとんど知らないことなのです。僕らだって、この計画がなければ知ることはありませんでしたよ」

勝也は最初から知っていましたと言いつつ裕紀は横目で勝也を見たが、勝也は何も言わずに口をつぐんだ。また中空を眺める。それにしても、裕紀の物言いにはぞっとする。微笑を浮かべながら、淡々

と計画について口にする。いくらなんでも後ろめたい気持ちはあるだろうと、少しは後悔しているだろうと、そう考えていたが、裕紀の表情からも言葉からも、それは一片たりとも見出せない。日常の延長であるように、死を語る。

「これが村中に知られたら、この村は自然と機能しなくなってしまうんです。だから、あなたが知ってしまった以上、もうおしまいです」

それはそんなに重要なことなのだろうか。大貴が殺される原因は、どうやらそれを知ってしまったからということらしいが、それほどの出来事なのであろうか。驚く出来事ではあるが、何が何でも隠し通さねばならないことでもないような気がする。

そんな大貴の表情を読み取ったのか、裕紀は続けた。

「あなたは、その先には、気付いていないようですね」

「その先？」

「気付いていると思いますが、愛さんの祖母は歴史を知り、恐怖しました。そしてこの村から逃げ出し、この村の存在を歴史と共に公にしようとしたのです。そこで村民は彼女を捕らえ、殺しました」

と、ここで裕紀は間をあけた。その先に核心があると、暗に示すように。

「殺したのは、愛さんの祖父。つまり夫です」

「なっ」

「それが、この村の掟ですから」

また、掟だ。どこまでもどこまでも、この村を締め付けている。

「この村の歴史を知られてはいけない。僕たちは隠れた存在であるべきだ。それはもう周知のことで、言う必要すらないことです。だから、その原因を作った愛さんの祖父が責任を取りました」

だからか、と大貴は思う。これを知ってしまったから、美談ではないと知られてしまったから、大貴は殺される。正確には美談ではないと、自殺ではないという事実を知ってしまったら、村民の中には真実に辿りつしてしまう恐れがあるから。復讐心を失くしてしま

っている村民が知ってしまったら、裕紀の言ったようにこの村は機能しなくなる。村のために、自分の愛する人のために死を選んだ。そんな美談が、本当は作られたものだったと知れたら、多くの村民がこの村を離れても不思議ではない。むしろそれは必然であろう。

裕紀はクツクツと笑う。試しているように、嘲るように。

「頭の良さが自分の首を絞めましたね。まさに、自業自得です」

笑顔でそれを語る裕紀に、心の底から恐怖を覚える。だが、それ以上に底知れない怒りをも込み上げてくる。裕紀は、裕紀たちは、愛を騙していた。それが失敗していたとはいえ、愛がすべてを知っていたとはいえ、裕紀たちが騙そうとした事実が変わらない。

頭が熱くなる。殺されるという恐怖を何故か感じない。あるのは、ただただ怒りだけ。歯を食いしばって裕紀を睨みつけた。それ以外できることもない自分がもどかしい。

「誰が、死ぬんだ」

それでも、できることをする。まだチャンスがあるかもしれない。まだまだ、つけこめる隙があるかもしれない。自分が殺されていないということは、まだ事は終わっていない。

「四人死ぬのだろう？」

「それも気付いているんですね」

裕紀は意外というよりも、おもしろそうに合いの手をうつ。

「姉さんが言い忘れていましたから、真弓さんに聞いたんですね。

ああ、だからあなたの昨夜の行動が妙だったんですか」

納得したように裕紀は言った。

歌。昨夜、大貴の前で真弓が披露してくれた。そのよく澄んだ声を響かせて、悲しげで怨ましい歌。

人が人を殺すとき、人のためにと頭を垂れる

人が人を殺したのち、それを忘れて諸手を上げる



これを怨みと言わざるか、これを怨みと言わざるか

忘れし記憶に鐘鳴らし、雨と共に降らせよう

恵みの雨など与えるものか、我等の存在を知らしめよ

四つの人頭柱にし、怨みの欲を育まん

姉の犠牲は己が罪、そなたが無念を晴らすのだ

裕紀たちが復讐を再燃させたのは、智美の事件がきっかけなのはいうまでもない。絶望したのだろう。歴史を知っていながら、復讐を果たす絶好の好機をみすみす逃してしまった。それどころか、町の側にまわる人間まで現れる。それが、赦せなかったのだろう。

「四つの人頭とは、四人を殺すことを意味しているのだろうか？　なら、あとの二人は、真弓さんと深雪さんだな」

大貴と愛、それに真弓と深雪。それが今回の生贄。

「そして君たちが復讐を果たす」

それが『己が罪』だから。この村に住むものは、必ず男と女最低一人ずつ生まなくてはいけない。そんな掟がある。ただ単に人口を増やすことが目的ではなかったのだ。歴史の流れと共に、解釈の仕方が変わってきたのだろう。

「でも、君たちはこんなことをして何が変わると思う。君たちが掟に従って、生贄をだしてまで掟にしたがって、何になるんだ」

大貴は壁をつかって体を起こそうとするが、どうにもうまくいかない。幸いにも頭の痛みは少しだけましになってきているが、この状況ではどうしようもない。

「何が変わる？　事業は確かに断念することになるだろう。それで

も、それは時間の問題なんだ。この村民の多くが復讐心を失くしているのは知っていることだろう。いくら掟になぞらえたところで、すべての村民に伝わるはずがない。それこそ、無駄死にだ」

最後は力なく、咳くようになってしまったが、それでも大貴は間違っているとは思っていない。大貴を含めて、たった四人が死んだところで、何も変わらない。

「記事を書く。町に戻ったら事業の反対記事を書く。そして、智美さんの事件の真相を公にする。そして、この村がいかに重要な場所であるか、無くしてはいけない場所であることを示す。こんな馬鹿げたことは今すぐ止めるべきだ」

「無駄ではありません」

裕紀はそれでも、凜とした声で否定する。間違いはないと、後悔はないというふうなまっすぐな目を大貴に向けて。

「確かに、あなたの言うことは真実です」

「なら」

「でも、あなたの言うことは半分も当たっていません」

一瞬の期待を、これまた一瞬で葬り去った。ぴしゃりと。有無を言わさぬ口調で。

「あなたは間違っているんですよ」

「まちが……い？」

「僕たちの最終目的は正解です。町への復讐。それに間違いはありません。ですが、第一の目的といえますか、掟になぞらえるのは意味があるんです。それは村民に掟を思い出させることだけではありません」

それとは言って裕紀は息を吐いた。そして、目を見開いて、まっすぐに大貴を見る。

「村の歴史を知っている人間をおびき寄せるためです」

## 26 大貴く扉をたたく者

そんなことがあるのだろうか。村の情報が、街に流れることなんて

いや、町の情報は村へ流れている。ならばその逆だつてあるだろう。それに情報を完全に漏洩させないなんて、よく考えなくても不可能だ。事実、沼には町から多くのものが侵入している。これまで情報の漏洩がなかったことにこそ疑問を持つべきだったんだ。

「でも、それは本当なのか？ 下手をすれば情報を向こうにただ売りすることになるんじゃないか」

「姉さんが聞いたんですよ」

裕紀が苦虫を噛み潰したように顔を歪めた。それまでの裕紀とはまるで違う。笑っているからこそ、感情を読み取ることができなかったが、それは、はじめて大貴が見た裕紀の感情の変化だった。

「姉さんは聞いたんですよ。町の住人が智美さんに対して、呟くのを」

「呟く？」

「どうせ生贄だろう、と」

「……………それはっ」

「わかりましたか？ 知っているからこそ、智美さんを殺すなんて考えを実行したんでしょうね」

そういえばそうだ。いくら自分たちのミスを隠蔽するためとはいえ、そう簡単に人を殺すだろうか。いくらその考えを思いついたからといっても、人を殺すのは思っている以上に重労働だ。だが、生贄のことは知っていれば。この雨乞いの村の実態を知っていれば。死ぬために生まれてきたことを知っているのであれば。

「だからこそ、真弓さんも協力してくれました。その特定の人間をおびき寄せるために」

裕紀はそう言った。まっすぐな瞳で、これ以上ないくらいに。

「それが、僕たちの負った罪なんです」

そのときだけ、裕紀の表情に翳りが見えた。それは一瞬のもので、大貴も見過ごしてしまうほどの、一瞬だった。だから、大貴はそれになんの感慨も抱かなかった。もしも知っていれば、ここで裕紀のことを違う視点から見ることができたのなら、まだこの先穏やかな結末を迎えられたのかもしれない。だが、大貴は何も感じなかった。それは運命なのかもしれない。この雨乞いの村という運命。復讐のために作られ、復讐のためだけに生き、復讐で縛る。すべてが復讐に向かい、螺旋を繰り返す。だからこそ、ここで大貴が気付かなかったことは必然なのかもしれない。

「だが、半分も当たってないとはどういうことだ？」

それとは知らず、大貴は問う。知っていれば変わったかもしれないが。だが、運命とは、そんなものだろう。

だから、裕紀もそれに答える。多くを語らずに、語る。

「言葉通りですよ。半分もあっていないんです。おかしくありませんか？ 生贄は村民から出すんです。あなたが生贄になれるわけじゃないですか」

確かにそうだ。

しかし、それなら真実とはなんだ？ 町に復讐するために、命をもつてしらしめる。それに間違いはないのだろう。だが半分も当たっていないとは、どういうこと

「あなたでなくてもよかったですけどね。ただ単に、定型句かもしれないませんが、運が悪かったんですよ。間が悪かったのかもしれないですね」

ゆったりとした口調で諭すように裕紀は言うが、それでも大貴はうまく情報を整理することができない。しっかり点と点を結んでいたつもりで、それ以外ないと考えていたはずだったのに、それは所詮つもりだった。

「穴だらけじゃないですか、あなたの理論も。勝也から聞いたんじゃないありませんか？ この歌を正確に知っている人間は少ない。なの

に、それを見立てて生贄を並べても意味がありませんよ。あなたも言ったでしょう？ すべての村民に伝わるわけがないと」

その通りだ。大貴もそれを知ったから、勝也の言葉の不自然さに気付いたのだから。

「何度も言いますがあなたを混ぜるのはおかしいですよ。生贄は村民から選ばれるんですから。だから、この場合の四人目は智美さんですよ」

「じゃあ君たちの計画は、三年前から、あの事件から仕組まれていたのか？」

「そんなわけありませんよ。この計画を考えたのは、三年前。智美さんが殺されたからです。これは三年間かけて練りに練った計画なんです。ほんと、あなたは可哀想な人ですよ。僕が言うのもおかしいですけどね」

ふふふと裕紀は笑う。その純真に見えたその笑顔が、今では猟奇的にしか感じない。

「あなたがこの町に来ることは一ヶ月以上前から知っていましたからね。絶好の好機。そしてこれ以上ない適した人選でした」

「どういう、ことだ」

「町からの犠牲者には、大きなポイントがあつたんですよ。それは個人的に来てはならないことです。あなたは仕事関係でこの村を訪ねました。そうすると、町にもその記録が残るでしょう。あなたが期日に帰ってこなければ、すぐに騒ぎになってくれます。個人的な旅行者では、いなくなつたところでいつ騒ぎになるかわかりませんからね」

騒ぎになることを望むのはどういうことだ。この雨乞いの村は隔離された状況こそが望ましい。騒ぎになるなどもつてのほかだ。この計画に加担している以上、真弓がそれをよしとするとは思えない。この村は隠れた存在でなければならない。それは大前提のはずだ。

「僕たちの目的はね。復讐なんです。それは否定しません。ですが、僕らが考えているのはね、智美さんの復讐です。過去どれだけこの

村が虐げられたか知りませんが、僕らは智美さんの復讐しか考えていませんよ」

真弓さんはね、と裕紀は続ける。

「利害が一致しているだけです。というより、この計画を提案したのは僕と悟ですが、大部分は真弓さんが考えたものなんです。真弓さんの、というより、この村の悲願と、僕らの怨みを晴らす計画をね」

「じゃあ、真弓さんは自分から生贄になるつもりだったのか？」

「そうですよ。そして、愛さんは純粹でした。村を守りたいからと、ただそれだけのために覚悟を決めてくれました。問題だったのは、姉さんでしたが、姉さんも智美さんの死に責任があった。だから、最後は姉さんも折れましたよ。といっても責めたつもりはありませんでした。死ぬのは怖いが、智美さんに恩返しがしたいといってね。そして、あなたがこの村に来てから、僕らは影で動き続けましたよ。あなたにとって不可思議なことが多かったでしょうが、僕らは論理的に行動していたんですよ。すべてにおいて、意味があったんです」

「じゃ、じゃあ、」

すべてにおいて意味があるのなら、ならば。

「愛は何故失踪したりしたんだ？」

「早い段階であなたの存在をこの村中に知らせるためです。そして、愛さんが失踪前に出会った最後の人間があなただと村民に知らせるためです」

大貴の存在を、村に知らせる？

「愛さんの失踪と、あなたの来訪。それが同時期に起こればどうですか？ それに何かの因果関係を感じませんか？ 失踪にはあなたが関係しているのではないかと」

その通りだろう。だが、愛の失踪が日常茶飯事なら、それほど奇異すべきことでもないのではないか。事実、村民に慌てた姿は見られなかった。

「事件を調べるのは、基本的にこの村の警官です」

話が逸れたのかと思ったが、裕紀の目はそう言っていない。口元に浮かべた微笑はそのままに、話を続ける。

「しかし、町が絡んでくると話は変わります。智美さんの時には、町から警官が何人も派遣されました。それゆえ、智美さんは晒しものにされたんですけど」

その言葉に場の雰囲気微妙に変わった。全員が何か感じるものがあるのだろうか。押し黙ってはいるが、圧迫感は幾分も増している。

「あなた関連で騒ぎが起これば、調べるのは町の警官。当然、あなたの動向を探るでしょうね。そうすれば、愛さんとあなたのことを不審に思わないはずがない」

その通りだが、かといって、それがなんになる。愛と大貴が何か関連しているかもしれないが、それを掴んだところで特に疚しいこともない。ただ単に会って、話しただけ。何よりも、裕紀たちは大貴を殺すつもりだ。つまり、死んだ人間を疑うことに意味があるとは思えない。

「姉さんは、ちゃんと遠回りをして智美さんのところに行きました。商店街を通り、畑を通って、道なき道を歩いた。そう、あなたと一緒にね」

裕紀の言葉で、頭に浮かぶものがあつた。それは、ずっとわからなかった、大貴の役割。

「あなたと姉さんが村を歩いたのは誰もが知っています。そして、あなたと二人で人気のない場所へ行くのもね。それは、村民の誰かが必ず見えています。姉さんはあなたと別れた後、僕ら以外誰にも会っていませんよ。つまり、多くの村民が見たのは、あなたと歩いているところが最後です」

冷や汗が背中といわず、額といわず、ところ構わず全身から噴き出してきた。真弓と最後に会ったのは誰だ？ いや、そんなこと聞くまでもない。あの神社を参拝する人間は誰もいない。真弓は神社

から出ることそれ自体が少ない。そして、大貴があ神社に泊まっていることは村民の多くが知っている。

「殺された人間すべてに関わっている、町からの住人。その人物が失踪したとなれば、それはどうなりますか」

唇の端を吊り上げて、いやらしく裕紀は笑った。

「あなたには僕たちの姉を殺した罪を背負ってもらうんですよ」

ふと風の流れが変わった。室内に澱んでいた空気が一掃されるように風が渦を巻きすべるように吹き抜けていく。冷や汗に大貴の背中にはびっしりと濡れ、その背が冷やされていく。氷を投げ込まれたように不快な寒気を大貴に与えた。遠くで地鳴りのような音が聞こえる。耳鳴りのようでもあるが、低く規則的な音。そう、誰かが走っているような。

誰かが、近づいてきている。

それに気付いたのは大貴だけではない。全員がほぼ同時に異変に気付いた。皆が一樣に目を向けた先。本殿の扉を荒々しく叩く音が耳に響いた。そして、仰々しく扉が開かれる。外は闇夜。月明かりを隠すようにその人影は荒い呼吸を室内に響かせる。

「……できないよ」

聞き覚えのある声。力なく首を振るのがわかった。

「……できないの」

荒い呼吸の隙間から搾り出すように、だがはつきりと拒絶を示す。薄闇にまぎれていた彼女の輪郭が次第にはつきりとしてくる。この数日いくつもの表情を見せてくれたが、寂しげな表情が一番印象的だった彼女。その理由はもはや明白となっている。

「ごめんなさい」

そこには死んでいるはずの深雪が大粒の涙を流していた。



## 27 大賣く振り下ろされる刃く

「どうして……」

誰にともなく裕紀は呟いた。それまで崩さなかった微笑も消えている。

深雪は死んでいなければならない。そして、すでに死んでいるはずなのだ。

なのに……、深雪はそこにいる。肩で息を繰り返し、惨めに涙を流しながら。

「ごめんなさい……でも、やっぱりいやなの。できないよ」

深雪は子供のように首を振った。整えていた髪が乱れても、見向きしない。ここまで走ってきたのだろう。膝は登山を終えたときのように震えている。

「どうして、だよ」

膝を抱えて蹲っていたはずの悟が、震える体を隠そうとせず深雪の前に躍り出た。唇を噛み締め、狂わんばかりに目を剥きだして。

「ここで、ダメだろ。もう、ダメじゃないか。やるしかないところじゃないか、何で、あんたは生きてるんだよ。智美姉ちゃんも死んだのに、あんた、また逃げるのかよ。一人だけ、逃げるのかよ。みんな、覚悟が決まってるのに、またかよ、また繰り返すのかよ」

「落ち着いて、悟」

裕紀がたしなめるが、その言葉に力はない。

「あんた、後悔したんだよね。なら、どうして、繰り返すんだ。もう、嫌だって、あの時も言って、たじゃないか。なのに、どうして、なんだよ。今度は二人も、愛さんと真弓さんを、犠牲にしてるんだぞ。あんたが覚悟を、決めたんだから、もう、死ぬしかないんだよ。僕らが、喜んでいると、思っているのか。喜んで、姉さんを殺しているか、思っているのか。死んでほしくなんかないよ。それでも、決めたんだから、やるしかないじゃないか。戻れないじゃないか。」

もう、ダメだろ」

「できない、できないの！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ だって、私は復讐なんてしたくない！ 真弓みたいに先祖様のために復讐なんてしたくない！ 愛みたいに村のためなんて考えられない！ 私は、本当は町に行つて色んなものを見たかったの！ 綺麗な服を着て、お洒落なお店に行つて、おいしいものを食べて、町にはもつとすごいものがあるんでしょう？ この村の娯楽なんて、何もないじゃない！ 全部町の残りカス。私たちが喜んでいるものなんて、町じゃ忘れられているのよ！ たった三時間よ！ たったの三時間向こうに行くだけで、あんなに魅力的な世界が広がっているのに、どうして行けないの？ 歴史のため？ 掟のせいで？」

誰に問いかけているのかわからない。それゆえに、誰も答えることはない。たとえ問いかけられたとしても、明確な解答を投げかけることができるはずがない。ここにいる誰もが、同じことを考えているのだ。同じことを考えているからこそ、このように馬鹿げた計画を実行に移している。今のままでは復讐を行うことができないから、だからこそ新たな武器が必要なのだと。

思えば、この計画は誰のためのものなのだろうか。悟にとっては智美のため。真弓にとってはご先祖様のため。では裕紀は？ 勝也は？ 圭介は？ 深雪は？ 四人は心の奥底で願っているはずだ。誰も死んではほしくないと。できることならば復讐のことなど忘れて、普通に生活を送りたいと。

だが圭介は巫女の子孫として家系に縛られ、勝也は愛を守るという村の掟に縛られ、深雪は智美を見捨てたという後悔の念に縛られ、裕紀はその弟として縛られる。それぞれを縛る鎖は禍福のように絡み合い、もはや解けることはない。

「そんなのはいやなの！ 私はもつと自由でいたいのに！ みんなだつてそうでしょ？ みんなだつて本当はいろんなことがしたいんじゃない？ だつたらダメよ。ここでしんじやつたら終わりなの！ 怖い、だって、私は智美が目の前で殺されるのを見てるから、人が

死ぬ瞬間を見てるから、知ってる……あんなのいや！ 死にたくない！ 死にたくないの！」

深雪が縋るような視線を大貴に向けた。

「そうでしょ？ 三島さんは優しい人じゃない。どうして殺さないといけないの？ こんなことしたって、もう終わりなのよ。ご先祖様の復讐を、智美たちの復讐にすり替えたって同じよ！ きつとみんな忘れちゃう。ただ遅い早いかだけに決まってる。ねえ、お願いだから、もうやめようよ」

「深雪さん、俺の姉貴は……」

圭介は立ち上がり、気だるそうな所作で深雪に寄る。

冷ややかとも取れる声音で呟いた。訴えかけるように、助けを求めるかのように。

「深雪さんは知ってるよね？ 姉貴は自分の役目を全うする。だから、俺はそれを尊重した。俺だって姉貴を止めたかったさ。でも無理だった。姉貴はいつからか家族ではなくなっていた。たぶん、俺のことを思ってくれたんだと思うけど。自分が巫女としての役目を全うするため、家族ではいることができなかった。巫女であり姉貴でいるのは俺を苦しめる。俺がそのギャップに耐えられなくなる。姉貴は身を削る思いで耐えてくれた。もしかしたら一人で泣いていたのかもしれない」

空を仰ぐように喉をそらせる。天井には、何も無い。

大貴はひとつだけ鍵のついた部屋を思い出した。あの扉の向こうで、真弓は何を考えていたのだろうか。唯一絶対不可侵の聖域。巫女の仮面を脱ぎ去ることのできる限られた空間。

「姉貴が最後に言ったのは巫女としての言葉。姉貴としての言葉は残してくれなかった。だから俺は姉貴の最後の願いを叶えたい。姉ではなく、巫女の願いを」

「どうして？ お姉さんなんだよ。最後なんだから、真弓のこと考えてあげてよ！ 家族なんだから、たった二人の姉弟なんだから！」

「俺の姉ちゃんは、」

勝也が握り締めていた拳を解いた。そして、独白のように呟く。

「真弓さんとは違う。姉ちゃんはやっぱ俺の姉ちゃんだ。俺が生まれたときからずっと俺の姉ちゃんをしてくれたよ。そういう意味じゃ俺は幸せだったのかもしれない。でもよ、俺はそれだけだ。俺は姉ちゃんがどれだけ苦しんでたのか、ちつともわからなかった。

姉ちゃんが失踪するようになったのがいつか、正確にはわからねえけどよ、たぶん祖父ちゃんと祖母ちゃんのことを知ったときだと思う。あれ以来、姉ちゃんは自分の家系を探していたんじゃないかな。もしかしたら親父やお袋もそれを知ってたから、姉ちゃんがいなくなっても心配しなかったんだろうな。……やっぱ俺は、何も知らなかった」

「やめてよ……そんなこと言うの、ダメだよ、そんなこと」

「ごめん、深雪さん。でも、最後までいいは姉ちゃんのことをわかってえ。姉ちゃんがどれぐらい村が好きだったのかを、知りてえんだ」

「裕紀！」

耳を覆いたくなるほどの悲痛の叫びを、深雪はあげる。声は掠れ、恐怖に全身が痙攣している。とめどなく溢れる涙をもはや拭おうとしない。あまりの恐怖からか、深雪は笑っている。それ以外の表情を知らないかのように、ただ、ただ。

「助けて、お願い。裕紀……お願い」

裕紀は何も答えない。ただ黙って深雪を見下ろす。大貴からは裕紀の背しか見えないため感情を推し量ることができない。もどかしかった。おそらくこの中で深雪を助けることができるのは大貴だけ。それなのに、何もすることができずただ蹲っていることしかできない。いくら体を蠢かせても縄は大貴の腕にきつく絡みつき肉をえぐるだけ。すでに表面の皮は剥げ血が滴り始めているだろう。鋭い痛みが大貴の全身を襲う。脂汗が額に浮かび上がる。それでも、無意味とも思える抵抗をやめることができない。

「裕紀君！」

言わずにはいられなかった。無意味とも思えるかもしれないが、

それでも言葉を尽くさなくてはならない気がした。深雪だけでも、目の前に見えるこの女性だけでも。

「きみはこれでいいのか？　今ここで深雪さんを犠牲にすることが最善なのか？　すでに計画の一部は崩れているだろう。彼女と最後に一緒にいたのは俺でなければならぬ。だけど、誰かが覗いているはずだ。深雪さんがここまで走ってくる道のりで、誰も深雪さんの姿を見なかったと断言できるのか。そうならば必ず疑問を持つ人間が出てくる。計画を突き止める人間は出てくるぞ」

裕紀は振り向かない。大貴の言葉は間違いなく届いているはずなのに。その肩は震えている。泣いているのだろうか。悔いているのだろうか。

大貴は深雪を見た。腰が抜けたのか力無く座り込んでいる深雪。泣き笑いの表情のまま、救いを求める殉教者のように裕紀を見上げる。矛盾しているその姿。見るも無残な姿。見るも惨めな姿。見るも愚かな姿。

それでも、美しかった。

すべてを晒し、偽るところの無い真実。

無様で滑稽で愚かで惨めで憐れで……哀れで、儂くも美しい。

目が離せなかった。瞳が離れない。この二日間、深雪が形作っていた表情たち。それはすべて偽りの中の幻想。大貴は始めて深雪という存在を自覚した気がした。深雪が演じたのはすべて幻想の世界。誰もが幻想を夢見る。幻想を掲げつつも、誰しもが現実と折り合いをつけて生きている。なのに、深雪は幻想を演じた。幻想を自然なものとして演じていた。大貴に対して「らしく」振舞おうと、深雪は知りもしない幻想を演じた。わかるはずがない。それは幻想なのだから。

だから、自然な存在などあるはずがない。なのに深雪はあまりにも自然であり、あまりにも当然のような存在。役割を全うするために、幻想の中で行動していたがために表れた違和感。

自然な存在という違和感。自然すぎた、それが深雪。

夢のような時間。長かったのか短かったのか。  
だから気付かなかった。見えていても、気付かなかった。  
振り下ろされる、その刃に。

## 28 大貴く跪く光く

ランプの光が強く揺れた。その場に映っていた全員の影が激しく揺れ動く。強い風が入ってきたわけでもないのに、ランプの光は揺れ動く。そう、それは誰かが持ち上げたかのような光の動き。

この部屋は神社の本殿。中には何も納められていない、仮初めの本殿。中は殺風景であり、毎日真弓が掃除していたであろう部屋。大貴たちが中にいるだけでそれは何も変わっていない。唯一、おそらく裕紀たちが持ち込んだであろう物はランプひとつ。ゆえにこの中にある、物といえるのはランプひとつ。鈍器として適している物も、ランプひとつだけ。

大貴からはよく見えていた。悟がランプを持ち上げ深雪に近づいていくのを。

縋るような視線を裕紀に注いでいる深雪の横に、緩慢とも思える動作で近づいた悟。裕紀も圭介も勝也も誰もが悟の動作の意図を測りあぐねていた。それゆえに判断が遅れる。悟は躊躇いもなく深雪の頭部に打ち下ろした。誰もが止めるまもなく、声を上げることすらもできなかった。打ち下ろす瞬間、ランプの光は消え、暗闇が視界を支配した。大貴が確認できたのはそこまで。ガラスが碎ける音、硬いものがぶつかる音、何かが倒れる音。

大貴の中で何かが崩れる音がした。それは最後の欠片。縋りつくベキ蜘蛛の糸。

村に来てからいろいろな表情を見せてくれた深雪。それでも思い起こしてみると、深雪は気がつくと思しそうな表情をしていた。無邪気な笑みもたくさん見てきた。それでも、その寂しそうな表情は他のどんな表情よりも、ずっと深雪に沁みこまれていた。そして、最後は嘆きに満ちた表情で。笑って、泣いて。

どうして彼女は泣いていたのか。

どうして彼女は嘆かなければならないのか。

どうして彼女を救えないのか。

どうして、どうしてどうしてどうしてどうしてどうして

……………ドウシテ

「裕紀」

不思議と頭が冴えている。何故だろう、雪原を目にしているような裏寂しさ。脳裏の中、遠くに佇む女性は誰なのか、深雪なのか真弓なのか……………愛なのか。

ゆっくりと、裕紀が振り返る。月明かりは足元を照らし、顔は窺えない。泣いているのか？

「……………泣いて、いるのか」

「……………いいえ」

足元から膝、丹田を昇り首元へ、そして顔が月明かりに照らされる。

裕紀の頬には変わらない微笑が張り付いている。笑っている。裕紀は、笑っている。

「何故、助けない……………。おまえは、深雪を守るんじゃないのか」

大貴の問いに、裕紀は噛み締めるように、呟く。

「……………復讐の、ためですよ」

一層、深まる笑み。頬に皺を作るほどの、満面の微笑。

「なぜ笑って」

「もういいでしょう」

大貴の言葉を遮る。その瞳は柔らかい光をたたえているはずなのに、温かみを感じない。家畜を見つめるような瞳。

「僕は、もう疲れたんですよ」

そう言っ、心から疲れたように笑った。背後には深雪が倒れている。抱き起こせばまだ可能性はあるかもしれないのに、裕紀は大貴をただただ見下ろす。

姉の死が存在しなかったかのように、笑う。

姉を殺したのが大切な友人でも、笑う。

これから罪を重ねるのに、笑う。



この世のすべてを、嘲笑う。

「頼むよ」

力なく呟いた言葉に、答えるような金属音。視界に現れたのは悟。その手にはランプと呼ぶのもおこがましい鉄の塊。赤黒く、闇が支配している。

声が出ない……いや、出ているのだろうか。わからない。

ただ、悟が近づいてくるのがわかる。いま大貴が抱いている感情は恐怖のはずなのに、命が尽きる寸前に佇んでいるはずなのに。

わからない、わからない、わからない……。

闇が呼吸している。闇よりも深い闇色。闇の中で闇を糧に生きる闇。

「さようなら、三島大貴」

この最後の言葉を誰が言ったのかわからない。ただ、振り下ろされる束の間、大貴の瞳は四つの闇を捉える。

闇の中で闇を糧に生きる闇。

雨乞いの村の、化身たち……………。

## 29 清水く瞳が語る真実く

「ひどい事件ですね」

捜査資料を眺めながら清水は呟いた。

「若い女性が三人も……」

清水が警察として治安を守るようになってから早三年。幼い頃より漠然と夢を見てきた職業。高校大学と順調に進学し、公務員試験に一発合格を果たした。理想よりもいくらか異なってはいたものの、清水は現状に不満は持っていない。難解な事件を解決したい願望はあるものの、三年前の事件を思い出すたびにその考えは棄てるようにしていた。それは配属してすぐに起こった事故。そういえばその事故もこの村が現場だったか。

清水の目の前には半分削り取られたような小高い丘がある。最近削り取られたわけではないが、さほど古い跡でもない。その丘の前には赤茶色の岩が地面に突き刺さっていた。清水は当時の光景を思い起こしていた。この岩の下敷きとなり死んでいた女性のことを。

「近藤さん、今回の事件にあの時のことが関わっているんですかね」「難しいな」

近藤と呼ばれた男は顎をしゃくって唸り声を上げた。

「仏の場所は同じだが、殺しと事故じゃ違いすぎるだろ」

「おれはあれが事故であるとは思っていませんよ。近藤さんだってそうでしょう？ どうせ上のやつらがもみ消したんですよ」

「滅多なことを言うもんじゃねえ」

たしなめはしたが近藤も思うところがあるのか、顎に伸ばした無精ひげを触りながら、しきりに考えを巡らせているようにみえた。中肉中背であり、年も四十を半ばも過ぎている。この歳で現場に出てきているためキャリアではない。出世コースからは外れているが、現場では誰よりも若手の気持ちを理解してくれる人だ。これまでも清水は何度となく助けられてきた。

「かといって、あの事故が無関係とするには早計だな」

「でしょう」

「だがもう犯人の目星はついているんだろ」

「ええ、犯人は出版社に勤めていた三島大貴と思われます。村民からの聞き込みにより、被害者すべてに関わっていることがわかりました」

清水は捜査資料を二、三枚捲った。

「この事件の被害者は神童真弓、畑中深雪、綾里愛の三名。三名ともこの場で倒れていました。第一発見者は相内悟。彼は三年前の被害者相内智美の弟であり、定期的にこの場所の手入れをしていたそうです」

「死因は？」

「神童真弓、綾里愛は薬物を盛られたものとみえます。畑中深雪は鈍器による脳挫傷だと思われます。凶器は見つかっていませんが、ガラスの一部が傷口に付着していることから懐中電灯のようなものではないかと推測しています」

「一人だけ撲殺なのか」

「ええ、ただ不自然な点があるんですよ」

そう言っただけ聞いていたわけでもないが、清水は声音を落としました。

「神童真弓の殺害場所ははっきりしていません。この場で毒殺された可能性、他の場所で毒殺されここまで運ばれた可能性の両面から調べています。綾里愛は衣服や肌に着している泥や植物から、殺害場所は別の場所ではないかと思われます。畑中深雪は別の場所で殺された後ここまで運ばれたようです。三人とも殺害場所は特定されていません」

「死体をここまで運んだということか」

「それだけではありません。鑑識と初動捜査にあたった警官の話によりますと、薬物はこの村で入手可能なものです。そしてこの場に包み紙が二つ。これらは被害者の体内から検出された薬物を包んで

いたものと断定。さらに薬物が包まれた状態でもうひとつ発見されました。どれも被害者三名の指紋は検出されていますが、犯人と思われる三島大貴の指紋は検出されていませんでした。

薬物は三人分用意され、二人が毒殺。一人が撲殺。もしも殺人であるなら薬物はひとつ使われなかった計算になります。痕跡を消す意味を考えると、これを処分しなかった意図はわかりません」

そこまで話したところで近藤は唸り声を上げた。清水も同じ心境だった。

「毒は三人分用意され、一人が撲殺されたか……。自殺、という可能性はないのか」

「鑑識によると畑中深雪の傷痕は第三者によるものであることは間違いないそうです。このことから畑中深雪が犯人であり二人を殺害したという考えも否定されます。共犯者や裏切りの存在を考えると別ですが。」

死亡推定時刻は綾里愛と神童真弓が深夜の十二時から二時頃、畑中深雪は二時から三時頃です。このデータと村民の目撃情報から鑑み、状況から見て最初に死亡したのは綾里愛、神童真弓、畑中深雪の順だと思われます。綾里愛は三島大貴と別れた後に失踪したらしく、おそらく……」

清水は言葉を濁した。この情報は近藤の耳にもすでに入っている。近藤は捜査をする際、必ず清水に捜査内容を喋らせて再確認する。こうすることにより偏見を持たず捜査ができるのだそうだ。

「綾里愛が失踪してから死亡するのに随分時間が空いているな」

「それも疑問点のひとつです。綾里愛が拘束された痕はみられず、睡眠薬等も体内から検出されていません。検出された薬物は毒殺に使用された一種類のみです。集団自殺という線も無理やりですが考えられますが、そうすると三島大貴が逃走した理由に説明が付きません」

「すでに三島大貴は殺害され、他に犯人がいるんじゃないか？ この村に来るまで被害者とは面識がないんだろ。殺す動機が思い当た

らん。強姦された形跡もないわけだしな」

「そうなんですよね、しかしそうすると三島の死体がここにはいないのは何故なのでしょう？」

「俺に訊くな」

近藤は諦めたように首を振った。ポケットからタバコとライターを取り出すと風を避けるように身を屈め、三度目で火をつけた。うまさうさに吸うと鼻から勢いよく紫煙を撒き散らした。ノンスモーカーの清水は煙を避けるように半歩後退する。

「三島大貴が犯人なら三年前の事件とこれは無関係だろう。捜査本部も三島を犯人と断定している」

「ですが、どうにも納得できませんよ。物証は何一つないなんて」「ちよつといいですか」

落ち着いた声が二人の会話に挟み込まれた。振り向くと花を手にし、学生服に身を包んだ少年が三人に、神主の装束をした少年が立っていた。声をかけた少年は微笑のよく似合う爽やかな雰囲気をしている。確かこの少年は。

「畑中裕紀くんだね」

「ええ、清水刑事さんですよ。もう現場検証も終わったということなので、いいですか？」

裕紀が花を揺すった。よく見ると、四人ともそれぞれバケツや小さなシャベルなどを手にしている。清水は無言で頷き、道を譲った。ありがとうございます、と裕紀は丁寧に頭を下げると、近藤にも一礼し地面に突き刺さった岩の前にしゃがみこんだ。花や線香を置く仕草には慈愛を感じることができた。清水はその姿に目を向けないのが礼儀と思い、視線を他の三人に移した。

三人とも清水は聞き込みで顔も名前も知っていた。神童圭介、綾里勝也、相内悟。圭介が神主の装束に身を包んでいる理由も清水は訊いている。何でも神童家は代々雨の神に仕えていた由緒正しい家系であり、女子が神の言葉を代弁するため一人神社での生活を強いられる。しかし神童家に女子がいなくなったため、その代理として

圭介が管理をしているということらしい。聞き込みのときにも思ったが、圭介は神主の装束を見事に着こなしている。毅然とした振る舞いには、姉が殺された事実にも背負わされた使命にもうろたえているようには見えない。唯一の違和感として、圭介の耳にボールピアスが光っていることだろうか。それが俗世とのつながりであるかのように感じるのは考えすぎだろうか。

「行くぞ」

近藤が携帯灰皿でタバコを押しつぶし、清水の返事を聞くまでもなく歩き出していた。こういったさりげない気遣いが清水は好きだった。タバコの火を消したのも線香の匂いを消さないためだろう。清水は何も言わず近藤の後に従った。

しばらく歩き、こちらを向かずに近藤は呟いた。

「おまえ、この村の噂を聞いたことがあるか」

「噂ですか？ そういえばこの村は呪われているとか聞いたことがあるような」

「そうじゃねえよ」

近藤の額から脂汗が浮いていることに清水は気付いた。その声は先ほどのように抑えられているが、誰にも聞かれないという無言の訴えを清水は感じる事ができた。

「もう二十年近く前になるか。俺はこの村にきたことがある」

「事件か何かですか？」

清水の問いに近藤は首を横に振った。

「ただの興味本位だ。非番を利用して観光がてら来たんだよ。その時に当時の巫女にも会い、この村について話を訊いてみた。大したことねえ話だ、その資料に書いてあるのと似たり寄ったりのことを話してくれたよ」

近藤は清水の手の中にある捜査資料を指差した。その指先がかすかに震えている。

「笑顔で喋ってはくれたが、俺は鮫の口の中にいる気分がしたな。常に牙を喉元にかけているようにすら思えた。話が終わるや否

や俺はこの村を去った。それっきりここを訪ねようとも思わなかった」

「……………」

「おまえはあいつらの目を見たか。特に、畑中と神童のを」

裕紀くんと圭介くんが？ 清水が振り返ると、四人とも岩の周りをせわしなく動いていた。もうはつきりと輪郭を区別することができない距離にいるが、どうにか区別はついた。

「そりゃ、見ましたけど……………」

清水は口ごもった。近藤が何を言いたいのかわからなかったからだ。

「あの日、俺が逃げ出すように村をでたのもあの目のせいだ。あの時の巫女と同じ目をしてやがる。わかるか、あの目はどこか踏み越えちまった目だ」

「………… まさか近藤さん。あの事件と彼らが関係しているとでも？」

「そうじゃねえ。ただ、あの目には近付くな。引き込まれれば、二度と戻れんぞ」

近藤のその言葉は腑に重くのしかかった。

もしかしたら、近藤がああ岩の前を去ったのは彼らを気遣ったのではなく、ただ彼らを恐れていたのではないだろうか。近藤がああ目に何を投影しているのかわからないが、近藤を震えさせる何かを、彼らはその身に潜ませているのではないか。

もう一度、清水は振り返ってみた。もう彼らの姿は見えない。

まだ清水は感じるができない。近藤の言う踏み越えた先を。

「………… そうそう」

と清水は先に行く近藤の背に話しかけた。

「ひとつ妙な目撃情報が入ったんですよ」

「妙な目撃？」

「ええ、村の十歳ぐらいの少年の話なんですけど、被害者の死亡推定時刻にあたる深夜二時頃に畑中深雪が走っている姿を目撃したそうです。少年はすぐに両親を外に連れ出したそうですが、両親は姿を

見なかったそうです」

「それが本当なら、死亡推定時刻がかなり限定されるな」

「といつても信憑性は薄いですね。深夜でしかも寝ぼけているところだったらしいですよ。少年はかなり頑固に主張していました」

清水は苦笑交じりに言った。近藤も冗談だと思っているのだろうか、あまり深く考えようとせず再びタバコに火をつけた。

「なんにせよ、俺たちの仕事は終わりだ。今日中に引き上げるぞ」  
「はい」

最後にもう一度、清水は後ろを振り返った。三島大貴を捕まえることができれば、彼らはどんな顔をするのだろうか。怨みの気持ちを募らせるかもしれない。彼らがどんな気持ちで墓標の前に立っているのだろうか。

同族意識だろうか。

敵対心だろうか。

怨念だろうか。

それでも、彼らが後悔しない選択肢を見出して欲しい。まだまだ若いのだから。

清水は空を仰ぐ。湿っぽい風だ、雨が降るかもしれない。



### 30 エピローグ―ここは雨乞いの村―

「予定通りだ」

二人の刑事が見えなくなったところで圭介は手を止めた。

「警察の活動拠点にうちの本殿を開放している。これであそこが調べられることはまず無いね。まさか証拠を自分たちが消しているとは思わないだろうしさ」

圭介は耳のピアスに触れた。鋭い冷たさが指先に伝わる。

「決行は今夜だよ。俺のほうで警察の動きは警戒しとくけどさ、今日は村に来ている警官全員で捜査会議を開くことになっているから、気にすることもない」

「ほんとに、平気か……な」

「村の秘密を知ってる野郎はこれで全員なのか？」

「全員じゃなくてもいいんだよ」

裕紀が微笑を崩さぬまま言った。

「知っている人間が死ぬ、というのが重要なんだ。この村の噂を知っている人間が死ぬ、という別の噂が流れればいい。そうすることでこの村の歴史を覆い隠してくれる。新しい噂を作るのは僕たちじゃない、町の人間なんだ」

裕紀の後に圭介が付け足した。

「つまり、町に流れてしまった村の歴史を、新しくできた村の噂のひとつにしてしまうのさ。木を隠すなら森の中。証拠があるのならともかく、証拠は俺たちの頭の中にしかない。自分の身の危険を顧みず正当性を主張する人間はいないだろうしね。ここは確かに呪われた村とされるかもしれないが、そうすれば人も寄り付かなくなり、歴史を知られたとしても噂のひとつとして考えられてしまう」

「その通り」

裕紀は圭介に微笑みかけた。いつもと変わらない爽やかな微笑だ。その微笑を圭介はまっすぐと見ることができない。その微笑の理由

を知っているのは、真弓がいなくなっただけまでは圭介しかいない。悟も勝也も裕紀の微笑を自己防衛と考えているだろう。深雪さんの死を背負ったための事故制御。それは正しくもあり、同時に間違っている。

悟が深雪さんを殺し、さらに三島大貴を殺した。その時でも裕紀の微笑は崩れなかった。裕紀の基本表情は微笑だ。三年前のあの日から。

圭介と真弓だけが知っていた。裕紀と智美が恋人同士だったことを。

圭介が知ったのは偶然、智美が真弓に相談しているところを耳にした。礼儀と思いついてすべてを聞かずその場を離れたが、二人が隠れるように付き合っているのが圭介にとって不思議でなかった。

「付き合っているんだろ」

それからしばらくして圭介は裕紀に尋ねた。裕紀は驚いた顔を見せたが、すぐに相好を崩し、照れ笑いを浮かべた。その表情は人形のような微笑ではない、裕紀の紛れもない感情の結露だった。付き合いを隠している理由を問い質したが、裕紀はお茶を濁すばかりで結局答えてはくれなかった。

その理由がわかったのは智美が死んだ日。悟は血相を変えて智美に近づこうとした。

悟は智美のことを愛していた。血を分けた姉だとわかっていてもなお、悟は自分の気持ちを偽ることができなかった。裕紀と智美は悟の感情を知っていたから公然と付き合うことができなかった。悟が縋りつこうともがいている傍らで、裕紀は物言わぬ智美を漫然と眺めていたように思う。

それからというもの、裕紀はよく笑うようになった。その頬には常に微笑を湛えていた。まるでこの世のすべてを夢んでいるかのよう。まるでこの世のすべてを諦めたかのように。

裕紀の微笑を作り上げたのは智美であり、その微笑を確固たるものとしたのは深雪だった。深雪の死後、圭介は裕紀が微笑を崩すと

ころを見ていない。

微笑が裕紀の選択した自己防衛手段。智美の死によって生み出された。悟が感情を爆発させたように。勝也が唯々諾々と愛に従ったように。圭介が真弓に反抗したように……。

「なあ、圭介」

回想に浸っていた圭介を呼び戻したのは勝也の声だ。悟られないように緩慢な動作で振り返る。

「向こうの先に、何が見える」

勝也が向く先、そこには何があるわけでもない。ただひたすら木々が葉を揺らしているだけ。鬱蒼とした林には、地元のものでも恐怖を感じる闇の抜け殻。勝也は目を凝らしているが、諦めたようにため息をついた。

「駄目だな、やっぱり俺には見えねえ」

「そうだね」

「……………圭介？」

「勝也」

圭介は勝也が向く先を見つめる。佇むのは林。吹きぬける風。

「見えないに越したことはない。あれは、見ちゃいけない」

おそらく裕紀も見えている。踏み越えてしまった証。戻れない烙印。

圭介は空を仰いだ。

もうすぐ、雨が降る。

翌日、村の警官は騒然とした。

村から再開発のために訪れた土木関係者五名が、何者かの手によって殺害された。死亡推定時刻は午後八時ごろとみられる。被害者はすべて四肢をばらばらにされており、その顔には苦悶の表情が浮

かんでいたという。犯行日は大量の捜査員が村に駐留されていたが、運悪く会議の時間であり、巡回している警官は誰一人としていない空白の時間であった。

警察のプライドを踏みにじられたとして、多くの警官が犯人を捜そうと躍起になって動いたが、不思議なことに村民の誰もが犯行時刻にその場所に近づいていなかったそうだ。複数の村民から同様の供述が得られたため、結局手がからしい手がかりは見つからず、犯人不明のまま捜査は打ち切りとなった。村の再開発も無期限延期が決定し、事実上の中止だと行政に対する不満が町で爆発した。だがそれも一時的なものであり、新たに首相の不祥事が起きたことで噂をするものもいなくなった。

噂といえば、この村に関する噂が町に流れるようになった。

やれ村に行けば殺される。

やれ村には隠し財宝が眠っている。

やれ村ではなく忍者の里だ。

やれあの村は殺人鬼の村だ。

どれもとりとめもなく、ありそうでなさそうな誰が発端なのかもわからない噂話。ある人間は恐怖に引きつった顔で生贄の村だと主張したそうだが、誰もその話を真に受けることはなかった。何年か後、次第に噂すらもなりを潜めると、これまた誰が名付けたのか知れないが、誰もがこの村を正式名『雨乞いの村』でもなく、行政命名『雨の村』でもなく、『逃げ水の村』と呼ぶようになる。

逃げ水とは雨が降った後にできる遠くの水溜り。それは追いかけても追いかけても決して捕まえることのできない水。もしも捕まえてしまえば災いが起こるとも言われている。

追いかけても決して追いつくことのない逃げ水。見えているのに触れることのできない逃げ水。まるで亡霊のように佇み、誰も彼も惑わし続ける。観光で訪れてはならない。憧憬の対象としてはならない。

復讐が復讐を呼び、怨みで怨みを育てる。

復讐こそが目的で、復讐を成すために歴史を刻む。

復讐を存在理由とし、復讐のために生涯を捧げる。

復讐を生産し新たな復讐の下、再び村は脈打ち始める。

この先この村がどうなっていくのか、それは別のお話。

復讐のために生きるこの村の末路は、決してよいものではないだろう。人を呪わば穴二つ。それが摂理というものだ。

ただ、彼らは呪いを恐れていない。すでに彼らは呪われているのだから。

彼らを忘れてはならない。だが知ってはならない。闇の中で生きるものたちを……………。

ここは雨乞いの村。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5578d/>

---

雨乞いの村

2010年10月8日13時09分発行